

ジョジョの奇妙な冒険
第5部外伝～真実へ
の探求～

京都府南部民

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ボニート・E・ゼルビーニ……スタンド名『キャプテンビヨンド』……所属組織『パツシヨ
ネ』……警告！警告！主人公は！ジヨジヨじゃない！主人公は！ジヨジヨじゃない！警
告！警告！……

目次

プロローグ	1
第1話 パックス・ロマーナ! ①	8
第2話 パックス・ロマーナ! ②	15
第3話 パックス・ロマーナ! ③	25
スタンドゥキャプテンビヨンドゥ	36
第4話 イタリアン・ラブソデイ ①	40
第5話 イタリアン・ラブソデイ ②	
第6話 イタリアン・ラブソデイ ③	49
第7話 これも素晴らしき我が人生 ①	54
第8話 これも素晴らしき我が人生 ②	60
第9話 どうせ撃つならピストルで! ①	68
第10話 どうせ撃つならピストルで!	77
②	87
第11話 週刊3面記事の謎	93
第12話 フニクリ・フニクラ ①	

147	第18話	フニクリ・フニクラ⑦
139	第17話	フニクリ・フニクラ⑥
134	第16話	フニクリ・フニクラ⑤
124	第15話	フニクリ・フニクラ④
115	第14話	フニクリ・フニクラ③
108	第13話	フニクリ・フニクラ②

157	第19話	かくも美しき我らの常識
	第20話	お気の召すまま
	第21話	ハイウェイ線上は戦場にて①
	第22話	ハイウェイ線上は戦場にて②
	第23話	ハイウェイ線上は戦場にて③
	第24話	水是水①
	第25話	水是水②
	第26話	水是水③
	第27話	ワインセラーの明日①

233

218

211

189

183

177

170

第28話 ワインセラールの明日②

第29話 伊仏直行使①

第30話 伊仏直行使②

第31話 作戦名シャルル・ド・ゴール①

第32話 作戦名シャルル・ド・ゴール

(ホル・ホース)

第33話 作戦名シャルル・ド・ゴール

(ボニート)

第34話 作戦名シャルル・ド・ゴール②

第35話 真実の探求

エピローグ

プロローグ

ボニート・E・ゼルビーニと言う名前をご存じだろうか？

この名前を知っているならば、まず表を生きれる人間ではないのは確かだ

彼が裏の世界——マフィアと言う職業に就職したのは最近の話ではない

彼には父母がいるのはいたが、彼の記憶には二人の影は無い

彼が生まれてきたときには既に亡くなっていったのだ

死因は事故死。高速道路でトラックに車ごと踏みつぶされたと聞いた

よくある話だとこの後遺産相続だとかで親族が争うのだが、それも無かった

父母が死んだ時、通帳の中身は日本円にすると5000万から0になっていたのだ

親族は葬式と言う葬式が終わったあと、赤ん坊のボニートに慰めの言葉をかけるだけ

で早々と帰ってしまっていた

赤ん坊のボニートは孤児院に預けられる訳でもなく、教会に預けられる訳でもなく、

道端に捨てられた

そこからだ彼が今のボニートになったのは……

彼はホームレスに拾われ養われイタリアのリグーリア州、ジェノバの小さな公園で暮

らしていた

ボニートが6歳になったころ、彼はそのホームレスのために空き巣をするようになった。そのホームレスは喜んだ。ボニートも喜んだ。

しかし、その2年後だ

そのホームレスは死んでしまった。死因は分からないがボニートは悲しんだ。初めて彼は心からの涙を流した

教会の近くの適当な場所に簡素ではあるがホームレスの墓を建てた。死体を土の中に埋め、大きめの石をそこに力強く地面に埋め込んだ。

泣きに泣き、ボニートはそこから一步も動かず一週間飲まず食わず墓前に座っていた。そこにある人物が現れた。

その人物はボニートの後ろに立ち、1時間たつても動かなかつた

ボニートは人物に顔を向けた。その瞬間、その人物は恭しく頭を下げながら「君がボニート君だね？」と、疑問の言葉を投げかけた

ボニートは驚愕した。相手の体型が自分の視界を埋め尽くすほどの肥満体であったからだ

その男は自らの名前を『ポルポ』と名乗った

「ああ、怖がらなくて良いよ。私は君のお父さんの友人だからね……ぶふう」

ポルポはボニートの横に座り胸ポケットをゴソゴソとしている

ボニートはさつきから目を丸くしてポルポを見ている

その視線に気づいたのと探し物を見つけたのかポルポはボニートの方に振り向く

ボニートは慌てて視線を逸らす。父の友人と言ったとはいえ、この男を信用するにはまだ早いと判断したからだ

「……ボニート君。私がおしもあるマフィアのボス、大企業の社長……とにかく何でも良い。組織のトップに位置する人間だったとしよう。私には無論部下がいる、その部下を私は何を用いて採用したと思う？」

「……人間性？」

ポルポからの唐突な質問にボニートはそれっぽい事を考え答えた

しかし、ポルポは首を横に振り否定の意を示す

「君のその答えは本心では無いようだね……まあ良い、そんなことは下らない事だ」

ポルポはそう言うとボニートの目の前にその巨体を近づける

圧倒されるかのような威圧感の前にボニートは体のバランスを崩し、尻餅をつく

「いいかね？人が人を選ぶにあたってもっとも大切なのは『信頼』だよボニート君。確かに君の人間性と言うのは『信頼』とは切っても切り離せないようなものだ。だが、明確なものでは無いよ、『人間性』は嘘をつきやすいからねエ」

ポルポは座り直し、ポケットから取り出した何かをボニートの前に置く

それは手紙だった。長い時間を経ているのかセピア色に染まっている手紙。

ポルポの方をボニートは向くとポルポは『ライター』をつけばなしでタバコを吸っていた。ボニートは手紙を取った、裏には「アルバーノ・E・ゼルビーニ↓ボニート・E・ゼルビーニ」と書いてあった

「その手紙は君のお父さん、アルバーノ・E・ゼルビーニから君宛の手紙だよ」

「父さんからの……」

ボニートは手紙の封を切った

そこには父からのメッセージについて書いてあった

『我が息子ボニートへ』

ボニート、この手紙をお前が読むころには私も妻も死んでしまっている事だろう。

本当なら父親らしい事を書いておくのが筋なのだが、今我々は追われている。誰がとは言わない。私にも分からないのだ。ただ追われていると言う事しか分かっていない。だからこそこの手紙を書いた。解明してほしいんだ。私たちを一体誰が追っているのかという事を……それができるのは、何も知らないお前なんだボニート。頼む、真実を追求してくれ。

お前が私の組織に入る入らないは勝手だが、父の立場からするとやめてほしい。この

組織の上の………』

手紙は不可解な所で終わっていた、いや終わらされていた

読み終えると同時にポニートは複雑な感情を抱えていた。第二の父とも言えるホルレスを埋葬したあとに第一の父からの手紙を読むというのは非常に複雑だった

「君のお父さんはね、よく自分の息子と一緒に仕事がしたいと言っていてね……まあ、その反面マフィアにも成って欲しくなかったみたいだがね。この手紙はお父さんの死後3日に来たんだよ」

つまり、この言葉は暗に『勧誘』の意を示している

「……………」

ポルポがアルバーノの事を話していたが、今のポニートにとってそれはどうでもよかった

彼は悩んでいるのだ。このまま生きがいも無く第二の父の墓を守るか、今まで会いもなかった第一の父の願いを叶えるのか……

「ポルポ………さん……」

「ん？どうしたかね？」

「今から僕のある行為を子供が遊んでいるようなものと思ってみてください」

するとポニートは木の棒を茂みから取り出し自分とポルポの間に立てた

木は全く動かず、中立を保っている

すると、風が吹き棒が倒れた。棒は…ポルポの方へと向かっていた

「ボニート君？これは……」

「決まりました。ポルポさん」

ボニートは何かを決意したかの様にポルポの前へと行き……膝まづいた

つまり、臣従。ポルポの所属する『パツシヨーネ』の入団を決めたという事だ

「うん、分かった。君のお父さんの『信頼』は見事に合格したという事だ」

「……ありがとうございます」

「だけど……『私の信頼』には合格していないがね」

ポルポはにやりと口元を歪め、手に持っていた『ライター』を……再点火した

「それはどういう事……」

その瞬間ボニートは首を何かに刺される激痛を感じ地面に倒れこむ

そう、まるで『矢』にさされたかの様な感じだった

すると朦朧とする意識の中、『黒い何か』がボニートを放り投げた

『黒い何か』はポルポの体へと向かい、消える際にこうつぶやいた

「この魂、すでに選ばれていた者だった……」

「……………」

タバコを捨て、気絶しているボニートをポルポは鬱陶しそうに抱え上げ自分の乗ってきた車へと放り込み、自身も助手席へと座り部下に運転をさせる

「ブふう、選ばれていた魂だつて？ん？ん？」

後部座席で寝転がっているボニートを見てポルポはスナック菓子を食い始める

「アルバーノめ……また厄介事を押し付けおつて」

この物語は……

受け継がれる『黄金の精神』を描いたものでも

永遠の絶頂の『吐き気を催す邪悪』を描いたものでもない

強いて言うなら……『真実への探求』を描いたものであるツツ！

第1話 パックス・ロマーナ!①

「全くあの時は本当にビックリしましたよ」

「何を言う、おかげで君がいるんじゃないか」

イタリアのネアポリスにある公衆電話で藍色を基調とした迷彩色のスーツを着た男性が自分の上司にあたる人物に電話をしている

スーツの男は『ボニート・E・ゼルビーニ』

電話の相手の上司は『ポルポ』

この二人は世間で言う「ギヤング」の仕事をしている

所属組織は『パツシヨーネ』

イタリアの言葉で情熱を意味しているこの組織だが、麻薬や強引な地上げなどで運営資金を貸せている為、ある意味情熱とはかけ離れている事をしている

「ははは、違いねえ……：そーいや、この前頼まれた仕事終わりましたよ」

「ブふう、報告を聞こう。どうだった？」

「結果から言うとなら成功ですが、見積もった以上に金を使いましたね……ざっと3000万」

ポニートは今まで二次組織からの麻薬購入の交渉にあたっていたのだ

麻薬の売価というのは変動しやすく、買えるときに買わないとそれこそ大損をこく場合もある

その交渉によりおよそ500kgの麻薬が手に入る事が確約されたのだが、向こうが金額を渋り始めたので仕方なく自分のポケットマネーを出したのだ

組織としては笑顔ホクホクだがポニートからすれば損な話である

「分かったよ、上と話をつけて君の口座に振り込んでおくよ。……そう言えば、この前君宛に請求書が2通ほど来ていたが？」

「経費で落としといてください」

不意に後ろを見ると人が3人程並んでいた

公衆電話だから3人とも分かっているのか不満のある顔はしていないが時計を何度も確認している者がいる

「あくポルポさんすいません。人並んでるんで続きは事務所からで良いですか？」

「ん？あく分かった分かった。だが早くしてくれよ、刑務所は安全だが不自由な面もあるからねエ、まったくサービスを上げてもらいたいものだよ」

「へいへい、体重減らしたらサービス上がるんじゃないんですか？」

「3000万は私が癒着しておこう」

「え!?ちよつと待つて……」

ガチャン

電話の切れる音がしてボニートは鞆を持ちうなだれながら公衆電話を後にする

彼の貯金からして3000万はさほど痛い出費ではないが蓄財家のボニートにとっては頭を悩ませる

その総資産何と1億

マフィアと言うのは法外な取引で大金を得る事もあれば、大損する事もある

一般人より上の生活もできれば下の生活を送ることもある

ボニートはどちらかと言うと1億の財産を持つてはいるがマフィア全体で見ると中の上ぐらいである

幹部クラスのポルポは十数億の資産を持つている

「そういや最近減りが早くなってきたな…(一か月食費抜き生活始めるか)」

二度言おう、ボニートは蓄財家である

別に金が全てだとか第一だという思想は持つていないが蓄財家である

ただ単に使うべき時が来た時の事を考えて必要以上の出費をしないで、「貯めるだけの吝嗇家ではない」とボニートは語っている

ホームレス時代の苦々しい経験から金を上手くやりくりしないと生き残れないとい

う思想なのだ

現にポルポの部下で経理係だった者が適当な数字で売り上げを報告しに行った時、彼が経理の事務所に怒鳴りこみ正確な数字をポルポに提出している

「仕方がない……サイドビジネスで賄うか」

ポニートに限らず多少の収入のあるマフィアは本職とは別の副職をしている

ある者はレストランを経営しているし、またある者は塗装業を営んでいる者もいる
ポニートは不定期ではあるが運送業を営んでいる

自分でデザインした「bonito」の文字を描いている10トトラックで運搬している

「無いとは思うが……」

事務所への道から銀行の道へと切り替える

この地点から銀行に行くのは少々遠いが彼にそんなものは関係ない

く数分後く

「ウソ！ あった！ 3000万あった！」

周りの人物から奇異の視線で見られている事などお構いなしにポニートは喜びの声

を上げる

彼がいるこの銀行は、そこいらの民間人が出入りしているような銀行ではなく、小さな会社の社長や大手企業の部長クラスの人間が出入りしている銀行なのでボニートの「3000万」の単語は聞きなれているのか自動ドアの前で電話をしている者もいれば、適当な雑誌を読んでいる着飾った女もいる

「(ポルポさん事だから半ば諦めかけていたが…ついてるぜ)」

ニヤニヤしながら彼は通帳を鞆の中に入れる

周りを見渡して時計を見る

時間は「10:00」を示している

「(時間もあるし、トイレ行つてくつか)」

鞆を腕に抱えトイレの個室に入る

この時点では彼は「ギヤング」・「マフィア」と呼ばれる類とは言えない

しかし彼はまぎれもない、れっきとした、誰が何を言つても、正真正銘の、折り紙つきの「マフィア」・「ギヤング」である事には変わりはないのだ

く地下水道く

「よし、今より作戦を決行する」

「同志諸君、健闘と生還を祈る」

「[[[[C r e d e r e ! o b b e d i r e ! c o m b a t t e r e !]]]]」

「イタリアは何度でも復活する

ファシストは何度でも復活する

戦争は何度でも復活する

国家に命捧げる兵士諸君

『ローマ進軍』まではまだ遠い

現在は資金を優先的に確保するのだ」

ただ一人の指導者によって黒シャツを着た兵士たちは銃器を掲げ、自分達の「祖国」の旗を掲げる

「正義の為には法律を犯すことも許される。そのとき暴力は武器となり、正義となるのだ。」

——ベニート・ムツソリーニ——

第2話 パックス・ロマーナ！②

『5階フロア制圧！』

『同じく5階非常階段制圧！』

それは正に電撃作戦であった

突如として銀行に現れた黒シャツの武装勢力によって銀行は占拠されてしまった
1階のロビーに社員、一般人はロビーに集められ目と口をテープで張られている

「電気も止まり人質は増え……ふむ、計画は順調のようだな」

黒シャツの中でも独特の雰囲気を漂わせた男、『指揮官』は缶コーヒーを飲みながら部下の持つてきた書類に目を通す

指揮官の目の前には人質が綺麗に並べられている

その中でも身なりの良い人物に近づき、口のテープをはがす

「頭取殿？腹は決まったかな？」

「あ、ああ、分かった！金だな！金さえあれば良いんだな！」

「うむ、1000万ユーロとお小遣いに10万ルーブル貰おう」

「10万ルーブル？何でまたそんな通貨を……」

「早くしてくれないか」

目はふさがっている為、分からないが頭取の頭に拳銃を突きつける

頭取の顔は冷や汗が吹き出し、歯を震わせながら金庫とコンピュータの暗証番号をくちにする

「ほう、今の頭取殿の状態を擬音語であらわすと……うくん『ダラダラ』と『ガタガタ』が良い具合できています。うむすばらしいバランスだ、勲章を上げたいほどにだ」

拳銃を下げ、回転いすに座り：頭取の頭に発砲する

「だが、金で命を売買するものには銃弾がびったりだ」

頭取は床に勢いよく倒れ、周りの人質がパニック状態になる

「人質諸君安心したまえ、今のは威嚇射撃だ。身代金1000万ユーロが支払われたと同時に君達を開放する。もつとも場を騒がしくする者は順次射殺していくので理解していただくよう」

ロビーが静まり返り、人質から聞こえるのは涙をすすする音だけだ

「うむ、よろしい」

後ろから年若い黒シャツの兵士が指揮官の前に現れる

「指揮官殿、ご報告があります！」

「続けたまえ」

「はっ！先遣隊は二手に分かれ正階段を使い6階へ、別働隊は非常階段を使い7階に行きました！」

「逃亡用の10万ルーブルを含め、計画は更に順調……ふむ、良い。引き続き制圧するよう伝達せよ」

「はっ！了解いたしました」

指揮官は椅子に座り拳銃を拭いていると兵士が振り返り、また指揮官の前に現れる。

「どうした？」

「はい……実は妙なものを聞きまして」

「妙なものだと？」

「私自身は見ておりませんが、連絡隊の同志がこの1階トイレの個室の天井に大きな穴が開いていた、というのが耳に聞こえましたので」

「大きな……穴？」

「7階トイレ」

「ツ痛え、やっぱ無茶するもんじゃねえなあ」

ボニートは頭を抱えながら周りを見渡す

壁には7と書かれてあり、安堵の息を漏らす

「本当なら8階が良かったんだが、ちょうど良いハンデ…である事を祈るか」

服に着いた埃を払い、鞆から拳銃を取り出す

平時とは言え何が起こるか、誰に狙われていてもおかしくないマフィアの職業上、この手の武器を持つのは仕方がないとも常識とも言える

壁伝いに移動し音をたてないように移動する

すると、いくつかの足音が聞こえてきたのでボニートはもう一度トイレの個室に戻る

—— 順調ですな。中尉殿 ——

—— うむ、しかし偵察とはいえ油断はするなよ ——

—— 分かってますよ。 ——

ボニートが聞き耳を立てている限り敵となっている人物は2人

それも「偵察」という単語を聞く限り、その後ろには「本隊」となるものが控えているのが分かる

ボニートは拳銃で思いつきり壁を殴る

—— おい！トイレの方から何か聞こえたぞ！ ——

——了解！アドネ先行します！——

足音がゆつくりとボニートのいる個室へと近づいてくる

そして足音が消え、個室のドアと床の間に影ができる

「今すぐドアを開け！そうすれば人質としてそれなりの……待……遇……を……」

イタリアの若き青年兵アドネが急に自分の腹部に異変を感じ、恐る恐る下を向く

2か所だった

自分の腹から血が吹き出ている

「え？……そんな、嘘だ、ろ？お……、れは」

「ごちやごちやうるせえ」

倒れこんだアドネの頭部をボニートは踏みつけ、壁に叩きつける

アドネの遺体から使えそうな装備を取り外す

「手榴弾にシヨットガン、そしてこの軍服モドキ……ただのコスプレってわけでも無さそうだな」

「アドネ！どうした!?!おい！」

外で待機している男が慌ててアドネの元へとやってきた

ボニートも慌てて個室のドアを上手く使い隠れる

そして死体に驚き駆け寄った所をショットガンで狙い撃つ

「うがー……きき、きき、ま……よくも……」

アドネと同じく頭を踏みつけ壁に蹴り飛ばす

「文句言うんじゃない、部下の弾で死んで部下と同じ死に方だ……誇れよ」

倒れた壮年の軍人から手榴弾を幾ばくか頂戴する

せめてもの弔いの為、二人の兵に十字を切る

「しっかしコイツらは本当に何なんだ？ただの強盗にしちや装備が良すぎるしなあ」

ポニートは死体を物色し、服をひっぺがす

血のせいで所々赤くて分からなくて目を細めていたが襟元に何かの刺繍が施して

あった

そこには赤白緑のトリコロレ、その中央には赤を基調とした白い十字が描かれてい

た

「何だこりや？イタリアの国旗では無さそうだが……」

哀れ、ポニートには知識はあっても「学」が無かった

分からない方の為に説明するとこの国旗はイタリア王国の国旗である

1861年から1946年にかけての王政だった頃のイタリアの国旗である

「まあポルポさんに聞きゃ何とかなるか……問題は……」

『おい！どうした！応答せよ！応答……』

「コイツなんだよな」

ボニートから見れば若い方の青年兵アドネのトランシーバーから怒鳴り声が聞こえてくる

彼はトランシーバーを手に取り、アドネの首にかけてあつたネームタグを見ながら答える

「こちらアドネ！警備員が銃を持って抵抗している！応援を求め……っ！」

ボニートが鼻をつまみトランシーバーに怒鳴りこむ

するといきなり銃声が鳴り響く

誰も撃っていないのに銃声が鳴り響く

『大丈夫か！アドネ、応答せよ！』

ボニートはトランシーバーを便器の中に放り込み、トイレ入り口に近づく

遠くから複数名の足音が聞こえてくる

ボニートは息を殺し、耳を澄ませる

——アドネはどこに行った！——

——中尉殿の姿も無いぞ、探せ！探すんだ！——

ドタドタと慌ただしい足取りで兵隊たちは過ぎ去っていく

ボニートはそれを確認した後、壁伝いに暗い廊下を歩む

「暗くてよく見えねエ……かといってライターを使う訳にもなあ」

思案しながら暗闇を進んでいるとボニートの手に何かが触れた

「こいつあ……ちようど良い」

壁にはこの銀行の簡易的な見取り図が描かれていた

この7階のフロアの部分に赤い丸がひとつあるこれが現在地なのであろう

ボニートは目を凝らしながら赤い丸から道をなぞつていき6階への道を探る

「階段という階段には兵隊がいるだろうし、エレベーターもこの調子じゃあなあ……」

ボニートが思案に暮れているとわたつてきた廊下の方から複数の足音が聞こえてきた

——おい！あそこに人影が見えるぞ！——

——動くな！——

「やっべー！」

僅かだが頭の中に残っている地図を思い出しながら、とにかく7階を逃げ回る

曲がり角はなるべく曲がり追手の目をなんとか眩ませようとする

「(ここを曲がればエレベーターがあるはずだ！無理に開けてその中に入りワイヤーを伝って1階に！完璧だ！)」

ボニートは勢いよく廊下を曲がり、エレベーターへと直進する……しかし！
「おっと、ここまでだ」

ボニートの横から銃器を持った複数の兵隊が彼を囲む

追手の二人も合流し退路も絶たれた

「囲まれたか……」

「手を頭に当てて目を閉じゆつくりと座れ！」

ボニートは渋々という事を聞き目を閉じゆつくりと座る

兵士の一人が銃の照準をボニートに定め、引き金に指を添える

「アドネと中尉殿の分だ！くらえ！」

兵士が今に発砲しようとする

目が一種の狂気に満ちているのがその証拠だ

その時だった！

兵士が持つていた銃が兵士ごと浮かび上がり地面に叩きつけられたのだ！

「ポルポさんから、『一般人にはなるべく使うな』と言われちやいたが……」

ボニートの後ろがゆらりとうごめき一つの『像（ビジョン）』が現れる

二角帽に赤と黒の水玉コートを着ている海賊のようないでたちをしている

頭部は頭蓋骨だけで歯を「カチカチ」と音をたて、服から盛り上がっている筋肉がその威圧感を更に増幅される

「だが、あくまで『なるべく』だ。そうなんだ『なるべく』なんだ。仕方ねエよなあ？」

ボニートは腕を組み、勢いよく立ちあがる

「本腰入れるぜ！『キャプテンビヨンド』！」

ボニート・E・ゼルビーニ

彼は『スタンド使い』である

第3話 パックス・ロマーナ！③

「指揮官殿！7階の別働隊との連絡がつきません！」

「指揮官殿！一部だけですが電気が復活しているフロアが！」

「指揮官殿！6階の先遣隊との連絡が絶たれました！」

1階のロビーでは黒シャツ達が小さな声ながらも慌ただしいやり取りを繰り返していた

何度も何度も同じ場所を行ったり来たりしては作戦事項を確認し合っている兵が思わぬアクシデントによりうまく対応ができず、その場にただ立っている者もいれば、とりあえず仕事をしているフリを見せる為に意味も無く歩き回っている者が多い。

それに、この状況でもっともうまく対応できていない者がいた。

中央のイスに優雅に腰かけていた『指揮官』である

爪を噛み、貧乏ゆすりを繰り返している

「(いかん！兵に動揺が走り始めている！おまけに私までもが『ソワソワ』しているとは！)」

ここで『指揮官』の経歴について少し話させてもらおう

本名は、ベネデット・カナリー

元々、大企業の平社員であったが、ある時上司が政治家との癒着について知ってしまった、それを上司に問い詰めたが、あえなく一蹴される。案の定クビになってしまったベネデットは路地裏を放浪している時、右翼組織に勧誘される。そこで意外にも頭角を少し現在の『指揮官』の地位に就いている

「あの指揮官殿……」

「焦るんじゃない！先遣隊との連絡が絶たれたからなんだというのだ！増援だ！増援を出せ！」

「は、はい！」

通信兵がぎこちなく敬礼し、去っていく

後ろに控えていた兵士たちは通信兵の指示に従い階段を登り始めた

「私は……戻ってしまったのか？あの時と同じようにみじめに……」

その瞬間、指揮官から大量の汗を噴き出し体もブルブルと震えだしている

「…………『ブルブル』まで起き出した…………つまり」

指揮官は頭を腕で覆うようにしゃがみこみ、周りからの声を聞こえないように遮断する

まるで悪い事をした子供が親からの叱責を拒絶するように

「絶対、『嫌な事』が起こる！絶対に、絶対にいいいいい！」

「指揮官殿！お気を確かに！」

指揮官が遂に喚きだした

部下が寄ってくるもそれを振り払うかのように腕を振りまわす

狂いだした指揮官に部下達は疑念を持ち出す

「自分達の計画は本当に遂行されるのか」と

指揮官が狂いだしている頃

ボニートはエレベーターのワイヤーを使い降りていた

しかしその顔には疲労の顔が少し見える

「映画みてえな事するとはゆめゆめ思っちゃいなかったが、これはこれで」

ワイヤーを掴んでいた腕の筋肉がゆるみボニートは勢いよくズリ落ちる

「きついなだよな」

ボニートの上には「2」の数字が書いてあり開きつばなしのドアから光が漏れている
それを確認したボニートは少し微笑み

「1階まで目と鼻の先……よし、見えてきたぜ！」

ボニートは何と…手を離れたッ!

2階と1階、数字こそ1違いだがその間の距離は非常に長い!

だが、ボニートはそんな事を考えてはいない!

つまり!彼にとっては距離など1kmであろうと100kmであろうと変わりないのだッ!

『キャプテンビヨンド』!

「人質を殺せッ!皆殺しだ!」

「指揮官殿!どうか落ち着きください!」

1階のロビーは本当の意味で慌ただしくなっていた

人質は遂に泣きだし、指揮官は声を荒げて部下を怒鳴りつける

周りにいる兵はほぼ年若く恐らくだがまだ20にも満たない年の者もちらほらと見受ける事が出来る

「言う事を聞かん者は死刑だ!」

指揮官は銃を取り出し、最初に泣き始めた人質へと近づいていく

「貴様かあ！秩序を乱した者は！」

「いやああああ！」

拳銃の銃口を人質の頭につける

手が震えながらも笑顔で引き金に指を添える事が出来るのはもはや狂気そのものでしかない

「一般人巻き込むたあ、とんだアマチュアだな」

開くはずのないエレベーターがゆっくりと開き、そこから埃まみれになってよく見えないが藍色のスーツを着た男がせき込みながら這いあがってくる

「お目にかかれて光栄でございます。指揮官殿。とても言やあ満足か？」

藍色スーツの男、ボニートが指揮官の目の前に立つ

指揮官は掴んでいた人質を乱暴に離し銃口をボニートへと向ける

しかしボニートは驚かず堂々と指揮官の目の前に立ち、挑発しているかのように口笛

を吹きながら辺りを見回す

「そうか、貴様が我らの先遣隊を！」

「先遣隊？ ああ、あの軍服モドキ共の事か？」

「モドキではない！ 彼等は立派な『軍人』だ！ イタリアに忠誠を誓った『神聖なる軍隊』だ！」

増援により少なくなっているがロビーにいた兵士は銃を手にしボニートへと銃を向ける

指揮官は自分が優勢に立ったと確信し右手を上げる

「そしてこの私も『軍人』だ！ 歴史に名を残す程のな！」

指揮官の右手がボニート目掛けて振り下ろされる

兵士たちは銃を一斉に発射し、ボニートの位置には煙が充満し彼の姿は視認できない

指揮官は銃を天高く掲げる

「諸君！ 仇は討った！ もはや恐れるもの無しい！」

周囲から感嘆のどよめきがあがる

指揮官もにやりと笑い今度こそ優雅に座る

しかしだ

良く考えてほしい

完全武装していた兵隊を不意打ちに近い形で倒したボニートにとって周りからの一斉射撃などで死ぬであらうか？

ましてや銃で撃つたのだ。なぜ、床に血が付いていないのであろうか？

「人間の油断は……大体『勝利の後』にやってくるモンだ、ってポルポさんが言ってたが……本当だったな」

ボニートは天井の電灯にぶら下がっていた

さらに言うとう無傷！

「今度はこっち……」

「貴様！なぜ！」

ボニートは颯爽と床におり、拳銃で自身の生存に驚愕していた周りの兵士を滅多撃ちにする

しかし所詮と言つては語弊が生じてしまうが彼が使っているのはあくまで銃

弾切れしてしまった銃にボニートは舌打ちをし、鞆の中から手榴弾を2つ取り出し、一つをドアの方に投げ、もう一つを階段へと投げた

「これで警察が来るあ、お前らも1時間後にはブタ箱行きッてもんかねえ？」

ボニートのこの言葉に黒シャツの兵隊達はいつきに青ざめる

1人の兵士が黒シャツを脱ぎ、爆破されたドアへと向かい外へ逃げ出した

その兵士に引き続き、続々と兵隊達が銀行より逃げ出す

ボニートは人質達のテープを引きはがし、避難するように指示をする

「これで全員かな……ん？」

ボニートは人質達が我先にと避難している中、ある人物を見つけた

指揮官だ。黒シャツを脱ぎ捨て人質達に続いて自分も逃げようとしている

ボニートは『キャプテンビヨンド』を発現させ、指揮官を壁に叩きつける

『敵前逃亡』はよオ、死刑じゃなかつたかねエ」

「ああ、ああ、ああ……」

指揮官は迫りくるボニートに怯え後ずさりする

ボニートの後ろでは炎が燃えており指揮官の恐怖に拍車がかかる

「どうする？ぶん殴られるか、投げ飛ばされるか？どっちが良い？」

「嫌だあああああ！」

指揮官はみじめにも泣き喚き、窓の方へと逃げ出す

脳内が混乱しているせいかな窓には到達したものの手が上手く回らず、鍵をガチャガ

チャさせているだけだ

「頼む……頼む……開け！開け！」

「窓から出たがってるって事は『遠くに行きたい』……つまり『投げられたい』の解釈で良

いな？」

『キャプテンビヨンド』が指揮官の後ろに現れ——思いつき『ぶん殴った』

ゝ事務所ゝ

「あゝ、腰痛い」

目の前にあるソファに座り込み、鞆の中から通帳を取り出す

通帳は黒焦げになっていた

軽く舌打ちした後、ボニートは焦げた通帳をビリビリに破きゴミ箱に放り投げる

「文無しかあ……」

だらーっと、上を見上げぶら下がっている電灯を見つめる

すると電話が鳴り響いた

足で鬱陶しそうに引き寄せ受話器を取る

「はいゝもしもし、こちゝらゝボニートゝ」

『声に張りが無いよ、ボニート君』

電話の相手はポルポだった

「どしたんですか? さつき連絡入れたばっかなのに」

『そのさつきの間にあることが決まってねエ、まったく上層部の連絡網には困ったものだよ』

「それはそれは……で、何ですか? 新しい仕事?」

『君がこの前解決した銀行強盗事件の件でね。実はあの右翼団体、我が「パツシヨネ」としては非常に厄介な組織でねエ……』

ポルポはポニートに次の事を話した

あの指揮官率いる右翼団体はイタリアの中でも巨大な組織で「パツシヨネ」の運営を邪魔していた事

強盗事件以降、その右翼団体は弱体化し、近々警察が強制捜査に乗り込むとの事

最後に「パツシヨネ」は強制捜査後、警察に多大な賄賂を送り右翼団体の土地一体の利権を自分達に譲る事だそうだ

「人事異動がめんどくさくなりますなあ、しばらくデスクワーク一辺倒ですかね?」

『その人事異動の対象が君だよ』

「え?」

ポニートの顔からいつもの飄々とした表情が消え、しばらく放心状態に陥る

しかしポルポは容赦なく話を続ける

『右翼団体の持つていた土地の4分の1を君に譲渡する形になってね…ブふう、ま、とりあえず昇進おめでとう』

『今まで「パッショーネ」に貢献してきた君の功績は上層部も評価していてねエ、件の強盗事件解決が決定打になったようだよ』

『形式上は幹部にはなるが、私の部下である事には変わらないみたいだからね』

『まあ、よろしく頑張りたまえよ若人』

ポルポは言いたい事だけを言って無慈悲に電話を切った

ボニートは電話を切られた事に気づかないのか、未だに受話器を耳に当てている

「へ？」

口をぽかんと開け、きよんとしている様は滑稽の極みである

スタンド～キャプテンビヨンド～

ボニート「え〜つと何々？ 『文字数が足りませんのでせめてもの文字稼ぎの為にこのセリフを使っておいてください』……………何だコリヤ？」

『キャプテンビヨンド』

能力パラメータ

破壊力―B（投げる力A）

スピード―B

射程距離―C

持続力―C

精密動作性―B

成長性―E

容姿

頭部は海賊旗に描かれているような骸骨で、ボロボロの二角帽を被っている

しかし四肢胴体は筋骨隆々としており、傷だらけのフロックコートを着用している
(色は赤)

能力

どんなものでも持ち上げる事ができ、掴む事ができる

本気を出した時の投げける速度は、秒速約1500m。戦車とほぼ同等の速度を誇る。
掴む能力としては、音や空気を掴む事ができる。音を掴んだ場合は放すまで、その音は発せられる事は無い。しかし音を掴むには必ず音を出す物体を掴まなければならぬ。
第2話で銃の音が後から聞こえたのはこのため

本体であるボニートにもこの能力は適用され、空中移動や高速移動も可能。もつとも
どちらも『持ち上げられている』『投げられている』ので、あまり良いものではない。
ボニート自身も、持つ・掴む・投げるの能力は使えるが、キャプテンビヨンドと同時に
使用している場合は、移動もできず無防備な状態になる。

経緯

幼少期のボニートがブラックサバスの矢に指されたことにより発現したスタンド
最初のころは非常に力が弱く、13歳時点でもポルポに片手で止められるほどであつ
た

ブラッククサバスによる無慈悲な攻撃とポルポからの容赦ない仕事を与えられ、精神力が飛躍的に高まった

ボニート曰く「ポルポさんにしちや、良い仕事をしてくれた」

ポルポの言いつけである「一般人にはなるべく使わない事」を信条としており、このスタンドが使われることは日常ではまずない

しかし日常で役立つような能力でもないのでボニート自身は苦ではない

こういった経歴があり、ボニートは戦闘においてはスタンドを使うよりも自前の銃であつたり、体術で相手をいなす事のほうが多い

ボニート「ん？もう一つあつた……『はつきり言って実はこれも文字稼ぎの為のセリフです。しかし一つだけ言えるとするならキャプテンビヨンドはストリーターの構成上多用するということはありません。なぜならボニート君はストリーターの裏側で活躍してもらおうと思っっています。安心してください。良心的には大活躍していると思っておりますので……それでは文字稼ぎとして記入しておきます………イタズラか

何かか？」

第4話 イタリアン・ラブソディ①

B o n i t o

「えーと、確か改築費がこれだけだから、残りは次の事業の資金に充てて……」

電卓の作業は別段嫌いなものじゃない

紙に筆算で計算するよりかは楽だし早い

今、俺ことボニート・E・ゼルビーニは晴れて幹部に昇進し、新たな土地にて事務所を貰ったのだが、現在その改築に向けて予算を練り上げている

「今月の収入から色々差っ引いたとして……出来た」

電卓に映し出された数字を今度はパソコンを使い、キーボードで打ち込んでいき、予算案の原案を制作する

出来上がったのを何度も読み返し、誤字脱字が無いかを調べる

「うん、大丈夫だな」

In v i oと書かれたキーボードを押し、椅子に深くもたれかかる

不意にカーテンを開き、外を覗く

町はいつもと変わらず陽気に過ごし、その平和を謳歌している
「良きかな、良きかな」

俺もその平和を謳歌しよう

そうだとオペラを聞きながら昼寝をしよう

そんな事を考えながら、簡易ベッドに寝転ぼうとすると……

ジリリリリリリリリリリリ！

「蛸は待っちゃくれねえか……」

ポルポさん
上司の電話はどうにも断れない

〜3時間後〜

「はい、これ。この前言った予算案です」

「ん」

ポルポさんは、いつもと変わらず刑務所内の一室に寝転びながらスナック菓子を食べ
ていた

牢屋の壁に穴が開き、そこから資料を渡す

「ちよつと多くないかい？」

「あんたらがちやんと管理してたらこんな額にはなりませんよ！」

俺は怒号をまき散らしながら、ポルポさんに勢いよく詰め寄る

しかし防弾ガラスが邪魔をして、顔を押し付けるだけになってしまふ

ポルポさんは、そんな様を見て少し鼻で笑った

「仕方がないじゃあないか。あそこは元々我々の土地では無かつたんだよ？それに警察との癒着関係が記者どもに嗅ぎつけられてね……それで急遽、あのボロ事務所を買ったんだよ」

「ボロ事務所!?それ分かつてて、俺を派遣したんですか!？」

「私の自費で買ったんだよ？200万と安かったがね」

「俺も刑務所暮らしがしてみたい……」

もうこれ以上反論しても誤魔化されるだけなので、諦めて肩をがっくりと落とす

「まあ、この予算は何とかして通してみるよ。あまり高望みしないほう良いと思うけどね」

「言われなくても分かってますよ……」

「拗ねるな拗ねるな」

ガラス越しだがポルポさんが背中を叩いてくれるのが分かる
何でこういう細かいとこだけ気を遣うんだろう

もうちよつと他の事に気を配りやあ良いのに
体重とか

「……あ、そうだ」

ポルポさんは何に閃いたのか、クローゼットの小物入れを開き中をあさり始めた

「はい、これ」

俺に渡されたのは写真だった

写真には金髪に青い服をきた少年が移っている

髪型も特徴的だが、何より写真からでも伝わる独特の風格が視神経を通して刺激される

「新入りですか？」

「うん。名を『ジオルノ・ジヨバーナ』」

「名前に太陽がつくたあ……よろしい事で」

なるほど髪型もさることながら、名前も大層なもんだ

しかし……

「で、こいつがどうかしたんですか？」

長くこの業界にいて分かるが、この手の奴はゴロゴロいる

自分を大きく見せたいと思っっているのかは分からんが、他人とはちよつと変わって
ますよとアピールしている若者は沢山いる

何度かポルポさんの採用試験の合格者を見た事がある

どいつもこいつも中々の曲者だった

合格者は真正正銘の『曲者』だった

このジョルノという少年も『曲者』なのだろう

マフィアと言う仕事もさることながらスタンド使いである以上、相手の特異性は見た
だけで分かる時もある

「監視だよ」

「監視?」

「うん。最近の若者がどのようなにして採用試験を通ってくるか見てみたくなってね
……」

「黒服連中に任せりやいいじゃないですか……」

「いやいや黒服達は別の用事があってね、席を外しているんだよ」

黒服達と言うのは、ポルポさんが独自に雇っている連中だ

俺の次にポルポさんが『信頼』している連中だ

……少々、根暗だが

「そういう訳で君にやって貰いたいんだよ」

「……………」

「一応、給金は出すよ」

「そいつはどこにいるんですか？」

（（

「（最近アクション映画のやりすぎの様な気がする）」

ジョルノ・ジョバアーナ追跡の為に、建物の屋上を飛び移りながら監視する

双眼鏡に写るのは件の青年『ジョルノ・ジョバアーナ』とポルポさんのスタンド

『ブラックサバス』

どうやら戦闘をすでに始めているらしく、ブラックサバスの回転蹴りがジョルノを襲っていた

案の定だとは思っていたが、ブラックサバスの攻撃に反応している限りジョルノもスタンド使いだというのが分かる

「相変わらず悪趣味なスタンドですこと……」

影から現れて影に消える

ライターさえうまく扱えば、暗殺・窃盗なんでもござれ

それが『ブラックサバス』

「やっぱりあれか……本体の性格に似るのかな」

ぼやいているとジョルノの動きに変化が見られた

いや避けている事には変わらないのだが、ブラックサバスの動きを見定めているように見える

「そろそろ動きだすかな？」

予想の中

ジョルノの背後より揺らぎが生じ彼のスタンドであろうものが現れる

その姿は正にてんとうむしを彷彿とさせる

ブラックサバスはジョルノのスタンドを視認したのかバックスステップで距離を取った

なるほど見事な洞察力だ

ジョルノはブラックサバスの能力を理解したのか建物の影から離れるようにしている

しかし……

「影からは逃げられんぜジヨルノ君」

カラスだ

カラスの影からブラックサバスが現れ、ジヨルノの首を絞めようとした

何とかかわしたようだが、その際に良い蹴りを一発貰ったのか腕を抑えている

「……………」

興味深い

非常に興味深い

焦りと冷静を同時にこなしているように見える

単なる冷や汗か覚悟の汗か

非常に興味深い

その一瞬だった！

「ブラックサバスが浮いた？」

いや、浮いていない

あれは『持ち上げられている』ッ！

木が生えている！猛烈なスピードで木がブラックサバスを持ちあげているんだ！

持ち上げられたブラックサバス。ブラックサバスは日光に弱い！

ジヨルノはそれに気付いたのか！

「手に汗握るたあ正にこの事。良いね良いね」

ここまで昂ぶったのは久しぶりだ

やはりこの『仕事』は止められない

しかしもうそろそろ終わりだろう

スタンドの弱点がばれた以上、戦いは長く続かない

——アアアアアアアアアアアアアアアアアア——

ブラックサバスの断末魔だ

仕事が終わったので屋上から撤退する

「ジヨルノ君、入団おめでとう」

ようこそ『パツシヨーネ』へ……………

第5話 イタリアン・ラブソデイ②

「ライターの炎は無事だったようだね。よし、君の入団を認めよう。ジオルノ・ジョバアーナ君」

「ありがとうございます」

恭しく頭を下げ、ジオルノ・ジョバアーナが退出する

そして牢屋の隅からどこからともなくボニート・E・ゼルビーニが現れる

「ポルポさんとしてはどうですか？あの少年は？」

「どうとも。組織の駒だ。」

ポルポは相変わらずの態度で答えた

しかしその意見は幹部としては何も間違つてはいない

組織『パツシヨーネ』の運営の為に末端構成員が様々な場所へ派遣され仕事を遂行する

これはマフィアに限らず、いくつかの民間企業でも見られるであろう

「スタンド名『ゴールドエクスペリエンス』……………その能力、見る限りでは地中から植物を生やす事が出来るだったね？」

「ええ、見る限りはですが」

「ブふうく、もうちよつと分からなかったのかい？」

「それができんならあんたが現場に行けばいい事でしょうが」

笑いながらだが悪態をつくボニートに対して、ポルポは肘をつき寝転がる

ポケットからタバコを取り出し『ライター』で火をつける

「安心したまえ、ブラックサバスは解除しているよ」

「分かっていますよ」

ボニートも懐からタバコを取り出し、ライターに火をつけようとする

しかし中々つかず、カチツカチツと音が鳴るばかりだ

すると後ろから『ライター』がでてきた

ボニートが振り向くとポルポが「使いたまえ」と言わんばかりに『ライター』を差し

出す

「ありがとうございます……」

ライターを手に取り火をつけた……その瞬間！

「な!？」

ブラックサバスがボニートに向けてその鋭いパンチを繰り出した

しかしボニートは体をひねらせ間一髪のところでは何とか避ける

「何するんですか!？」

「ほほほほほ! たまには無駄な事をしてみるものだよ」

笑顔のポルポの横にはブラックサバスがゆらゆらと立っている

ボニートは額に汗を浮かべながらポルポに詰め寄る

「ポルポさん! 仕事はやったんですから、いつもの口座に振り込んでくださいよ!」

「……? 何の事だね?」

「とぼけないでくださいよ! ジョルノ・ジョバァーナの監視をしたら、報酬を渡すって約

束でしょうが!」

「ああ、その事ね」

牢屋の壁に穴が開き、綺麗な唐草模様の皿が現れた

その皿の上に盛られていたのは『バナナ』だ

「ポ、ポポッポッポ、ポ〜ルポさん? こ、これが報酬とか言いませんよね?」

「報酬」

ボニートの拳が強化ガラスにひびを入れる

ポルポはタバコを吸いながら、笑っている

「ほほほほほ! 今日には愉快的日だ! 君の口座にはちゃんと振り込んでおくよ。安心した

まえ」

「…じゃあこのバナナは？」

「実はさつきフィリピンの友人が来てくれてねエ、お土産の直送バナナだよ。君も食べたまえ。フルーツは食物の癒しだよ」

「なるほど」

見るといつのまにかポルポの手にもバナナが握られていた

ポニートもバナナの皮をむき始め、口に放り込む

ポルポとポニート・E・ゼルビーニ

二人は今知る由もない

この『バナナ』を引き金に物語が始まる事を……………

ズドオン！

第6話 イタリアン・ラブソディ③

ズドオン！

「……………」

「……………」

バナナが銃になるところを見た事がある人はいるだろうか？
いるならば今すぐネアポリス刑務所に行く事をおすすめする

この2人から多大な礼金を貰えるだろうから

「ポルポさん」

「ん？」

「これは一体どういうことぞ？」

「さあ？」

ポニートは敵意が無い事を示すために銃をポルポの前へ放り投げる

ポルポもいきなりの出来事に空返事しかかえせない

ポニートもいきなりの出来事に困惑し、目が泳いでいる

「とりあえず、だ」

最初に口を開いたのはポルポだった

後ろのテーブルにある残りのバナナを掴み、様子を見ている

「どうやら特殊だったのはあのバナナだけのようですね」

「そのようだ」

ポルポは前にある銃を見つめながら、目的であったバナナを食べる

「このバナナは大丈夫なようだ」

「でしような」

「問題は誰が銃にしたかだ」

バナナが銃になる

あまりにも非科学的すぎて、例えばインシュタインでもこの現象は理解できないだろう

しかし、ボニート達にとってこれらの事は日常的であるのだ

「何かしらのスタンド」

「それが大前提だろうね」

そうスタンド

「このスタンドこそがすべての物理学も常識もひっくり返す事ができる

「フィリピン人の友人という可能性は？」

「それは無いよ……彼は一般人だ」

「つまり……ジヨルノ・ジヨバアーナ」

「そうだろうね」

命を狙われたというのに、この余裕

この2人には共通の考えがある

『命あつての物種』

誰から教えられたわけでもなく、いつの間にか頭の中でそれが浮かぶようになっていた

故に、余裕なのだ

「しかし、見事なものだねエ。あのジヨルノとかいう小僧、意外と成り上がるかも知れんぞ」

「珍しいですね、他人を褒めるなんて」

「ほほほほ！褒めるだけの価値はあるよ。あの小僧、私を自殺に見せかけようとしていたなあ」

「はい？」

ポルポが他人を褒める

それも入ってきたばかりの新人入りで、自分を暗殺しようとしていた人物をだ

ポニートは目を丸くした

付き合つて16年来、自分が褒められてことなんて指で数えるほどしかない

一番最近褒められたのは、20歳の誕生日の時。それから4年も経過している

ポニートは目を丸くした

そんなポルポが他人を褒めたのだ

驚かすにはいられない

「まあ、彼の唯一の誤算は君がいた事だろうね…それを見たまえ」

「？」

ポルポが指をさす

そこにはさつきの銃が転がっていた

ポニートは銃を拾い上げ、ポルポの前に見せる

「それは私のガンコレクションの一つでね…私がバナナを食べれば、そのままズドン

！私は自殺したと処理される…」

「死因はバナナアレルギーによる発作とでも書かれるのでしょうか」

二人は笑いあつた

しかし笑いごとではない

命を狙われた。それも新入りの手によつてだ

死んでしまったのならそれで終わるが、生きている以上は何かしらの形で『報復』をしなければならぬ

それはギャングの掟と言っても過言ではない

「さて、どのようにお礼をすべきか………悩みどころだね、ボニート君」

「まったく」

「ふむ、そうだ」

ポルポは何かを思いついたようだ

電話を引き寄せ、ボニートに聞こえないような小声で何かを囁いている

「……ああ………いや、そうじゃ………うむ………よし」

ガチャン、と受話器を置き、ボニートに振り向く

何があったのかはしらないが、一言で表すならご満悦という言葉であろう

「ボニート君重大な発表だよ。上はペリーコロから、下はブチャラティまでに公開したまえ」

「はい」

ポケットからボニートはメモ帳とペンを取り出す

しかしボニートは知らない

ポルポの言葉が予想の斜め上を行っている事を

「ポルポは死んだ。死因は拳銃による自殺。」

第7話 これも素晴らしき我が人生①

「天にまします我らが父よ、ポルポの魂はあなたの御許に行かれ……」
絶対ない、そんなことあつてたまるか

あの人が天国に行くなら、俺はきつと大天使の一人に選ばれている
神様？流石に麻薬を売り買っている人間がなるなんて恐れ多い

…じゃあ大天使も無理か

目の前に弔問客の方が現れた

挨拶をしないと

「惜しい人を亡くしました」

「しばらく『パツシヨーネ』も静かになりますね」

「本当にお悔やみ申し上げます」

次々と挨拶しに来た弔問客の方々と一区切りつけると、俺は教会の外に出た

2時間近く中にいたんだ

少しぐらい休んでも罰は当たらないだろう

く5分後く

「ふうく」

この葬式の最中に俺はある決心をした

禁煙だ

20の誕生日からほぼ毎日と吸っていた

そろそろ潮時だろう

医者からも度々注意されているからな

「それにしても……」

何でおれが葬式の幹事をしなきゃならないんだ

それもこれもポルポさんがあんなこと言わなきゃ……

くくくくくくく

「ポルポは死んだ。死因は拳銃による自殺」

「……とでも触れこんでおけ、私は今からアメリカペンシルヴァニア州の別荘に身を潜める」

「遺産の27億は君にやろう。なに、はした金だ」

「君の仕事はただ一つ。パツシヨーネを見届ける事」

「だが基本的には自由に動いてもらって構わないよ。君も24歳、一人前の男だ」

「それでは向こうでよろしくやっておくよ。何か困った事があつたとしても電話は掛けてくるなよ。せつかくのバカンスが台無しになるからねエ」

「それじゃ頑張りたまえよ、若人」

~~~~~

「なアにが『頑張りたまえよ、若人』だ。自分もまだまだ52歳だろうが……」

「なあ、ちよつと隣良いかな」

若い男が頭を下げながら、隣に座ってきた

喪服を着ているところから見ると弔問客の一人のようだ

きつとポルポさんの陰険な試験を乗り越えた奴だろう

パツシヨーネの中には「ポルポさんのお陰で組織に入る事が出来た!」とか言つて、ポルポさんをやたらと信奉している連中がいるのは確かだ

「今誰の葬式やつてるか知つてるか?」

「おいおい何言つてるんだよ。我らが恩師ポルポさんの葬式に来ない奴なんていないに決まつてんだろ」

「ほお、『ポルポさん』ときたもんだ……フフフフ、ハーハツハツハツハ！」  
「どうした？いきなり笑いだしたりして」

男が驚くのも無理はない

俺自身、笑顔を見せる事はあっても笑い声をあげるほど笑った事は無い  
口を大きく開けて良い事は、この業界においては無い

後ろから薬を盛られたり、スナイパーの良的になる事があるからだ

だが、これは……笑うよりほかにない

「死人にまで Sign・re をつけるのは、恐らくお前だけだろうぜ。ましてや見て  
ねエ所じや呼び捨てにしているらしいのになあ」

「……何の話をしている」

おお怖い

これだから1980年生まれの若者は苦手なんだよ

「いやあ、俺も何言ってるかわかんねえんだよ。とりあえずだ、はじめましてブローノ・  
ブチャラティ」

「！」

「何も驚くことあないだろう。お互い同じ上司の下で働いてんだから」

「……………」

ブチャラテイが怪訝な表情で俺を見ているのが、良く分かる

俺がブチャラテイの事を知ったのは最近の話じゃない

俺がパツシヨ―ネのバツジを胸に付け、堂々とネアポリスの町を歩けるようになったころだ

ポルポさんが「見どころのある若造が入った」と言つて写真を見せてくれた事があるもつとも教えてくれたのは生年月日ぐらいなもんだつたがな

「なるほど……お互いにお見通しと言う訳だ」

「そつちの方が詳しいみてえだがな」

どうやら警戒は解いてくれたみたいだ

さて腹割つて話すとするか

ちようど最高のストレガも入ったところだしな

くカフェ ルビコンく

カフェと名前は付いているが、はつきり言つてここは飲み屋だ

顔を赤くした男達の憩いの場として連日連夜大騒ぎしているが、今は昼

客も少なく、ダウンライトが良い味をだしている

ブチャラティに酒を勧めたが遠慮されてしまった

酒よりもコーヒーや紅茶が良いとのことだ

「それでポルポさんなんて言つたと思う？ 『君の6000万を差し引けば10万人が助かる』とか言つたんだぜ？ 良く言うよ、そのあと5700万のアルピーヌ買ったって自慢してやがる」

「はっはっはっは、ポルポには相当使われたみたいだな」

「使われたなんてもんじゃねーよ、搾取だよ搾取。いつか革命起こしてやらあ」

少し酔いすぎたようだ

店主に水を頼み、一気に飲み干す

視界が安定してきた

ブチャラティはコーヒーの2杯目を注文したようだ

「一つ……聞きたい事がある」

「ふん、言ってみろ」

「ポルポの隠し財産についてだ」

早速食いついてきやがった

「これだから1980年生まれの若者は苦手なんだよ

だが、おもしろい

「隠し事は一切なしと行こうか、よし話してみな」

「……今俺達はこの状況を使い、幹部になろうと思っている」

「その為に上納金が必要ってワケか」

何も言わずブチャラティは頷いた

「その隠し財産、話によると6億の価値があると聞く」

「ああ、そうだ。モンローが見つけたネックレス、ナポレオンの指輪、その他の宝石などなど、どれもいわくつきの品だから手は出さなかつたが……」

「場所を……聞きたい」

ブチャラティと俺の視線が重なった



そこには笑いも怒りもない

たったひとつのスゴ味の勝負だ

「詳しくは言えないが……………『綺麗な場所の中でも最も綺麗な場所』と言っておこう」

「……………感謝するよ、ボニート・E・ゼルビーニ」

「いやいや、酒につきあってくれた礼さ」

ま、とりあえず引き分けということだ

## 第8話 これも素晴らしき我が人生②

「一応、ブチャラテイには財産の事は伝えときましたよ」

『ああ、ブチャラテイが気付いたのか、それは上々だ』

「えらく信頼してますね」

ボニートは事務所にある電話からペンシルヴァニアでバカンス中のポルポに今までの事を報告していた

その電話の向こう側からは銃声が聞こえている

「で、そちらはどうですか？」

『全然良くないねエ。原住民どもめ、歓迎の仕方を知らないなら引っこんでおればよいものを……』

「黒服達は？何のためにMP43なんてクラシックな銃を買ってやったと思ってるんですか」

『安いだけでブレダを選ぶ君よりかはマシだと思うよ』

「枢軸が好きなら国産を愛して下さいよ」

『国産？フィアットは車だけで充分だよ』

「あ、それは同感」

今、ポルポはペンシルヴァニアに元々いた地元ファミリーとの交戦の最中だった

ポルポ自身は戦っているわけではない

黒服達がボニートの給料から無理矢理差し引かれた金で買ったMP43（ナチスドイツの機関銃）を使つて応戦しているだけである

「たまには運動もしてくださいよ？ 入国審査の時に一悶着あったそうじゃないですか」

『フーン！ 自由の国と称しておきながら検問を設けているアメリカが悪い』

「そういうのを暴論っていうんですよ……それじゃ、そろそろ店員の視線が厳しくなってきましたので……」

『こちらにも激戦になつてきた……それじゃ』

受話器を置いたボニートは店員に多めのチップをはずみ、店を出た

時間はちょうど14:00

店の裏口に駐車してあるイヴェコ社製特注大型10tトラック「ユーロカーゴML100E」に乗り込んだ

「ヤッ」

進路はカプリ島の方向に

♪〜ふ〜ふっふ〜♪」

ボニートはある人物と待ち合わせをしていた

カプリ島の展望台で待ち続けて15分

近くの出店で買ったフルーツジュースを飲んでいる

「それはなんて曲かね？」

「ペリーコロさん」

ジュースをゴミ箱に放り投げ、ボニートは挨拶をした

ペリーコロ

この名前は『パツシヨーネ』においては大きな意味を持つ

最古参の幹部であり、ボスからの信頼を一手に引き受ける存在といえ、その重要性が分かるであろう

「6億は受け取りましたか？」

「ああ、今頃銀行の中に眠りつく頃合いだろう」

「最高のベッドですね。俺もご相伴にあずかりたい」

「わしは味わった事があるぞ」

胸ポケットから出された写真には若い男性が女を侍らせ、札束の山に座っている姿が映っていた

「これはどこの御曹司ですか？」

「30年前のわし」

「!？」

写真と何度も見比べたが、同一人物とは思えない

写真のペリーコロは長身でその目はキラキラとしており、正に「危ない男」を漂わせている

目の前にいるペリーコロは背は低く目は眼光こそあるものの写真のような覇気はない

「時の流れって恐ろしいですね」

「そうか？ わしは楽しんでおるがね」

ボニートは苦笑する

年季の違いを感じさせられる言葉に返答が難しくなっているからだ

「しかし……一つだけ腑に落ちぬ事がある」

「何か？」

「君が6億の隠し財産をみすみす手放した事だよ」

「……………」

6億

一般市民から政治家でもその数字は甘美な額であろう

無論ギャングであったとしてもだ

それを彼——ボニートはあっさりトブチャラテイに手渡した

それがペリーコロには謎なのだ

『綺麗な場所の中でも最も綺麗な場所』難しいと思っただけですがね」

「いやいや、わしも頭をひねらせたよ」

綺麗な場所の中でも最も綺麗な場所

前者の綺麗な場所とはカプリ島の事を意味している

古代ギリシアの人々が「美しい場所」を求めた際に列挙されたのがカプリ島であるか

らだ

後者の最も綺麗な場所とは「トイレ」のことである

カプリ島はイタリアが誇る観光名所の一つであり、比較的だが掃除は他より施されて

いる

トイレとは汚れる場所である。だから掃除をしなければならぬ

綺麗かどうかと言われれば話は別だ

だが、掃除当番の日程が毎日組まれている事を考えるならば他の施設よりも綺麗な場所ではあろう

ボニートはそういう意味を含めてブチャラティに伝えた

もつともブチャラティがその言葉を信用したかどうかは分からないが

「先行投資は抜け目なく惜しみなくが常識だと思ひまして」

「つまり、君はブチャラティ：いや、ブチャラティのチームがこれから伸びると？」

「若者に期待しましょうよ、老いを楽しめませんよ」

「……………ふおつふおつふお、ポルポから聞いていたが君も中々言う方だな」

「いえいえ、それほどでも」

ペリーコロは鞆のポケットから封筒を出し出店のカウンターにおいた

封筒には「フイレンツエ急行乗車券」と書かれてあり、中には切符が2枚入っていた

「これは？」

「ボスからの指令だ」

「!？」

パツシヨーネのボス

その正体は謎に包まれており、いわく姿を見た者はこの世にいないと言われている  
ボスについては一切の事を調べてはいけない

今までにチンピラだったり警察だったり調べてきたが、1週間とたたずに変死体となつて発見されてきた

「現段階では動かなくて良いが……いずれ、そのフィレンツェ急行にブチャラテイのチームが乗る。君の仕事はブチャラテイのチームと合流し、彼らの任務に助勢する事。ボス直々のご指名だよ、受けてくれるね？」

「もちろん」

「ならば、よろしい」

鞆から更に資料が出てきた

どれもこれも「麻薬収入に関する報告書」「コルシアーノファミリーの抗争による経過」と恐ろしいものばかりだ

ペリーコロはその中から1枚取り出し、ボニートの前にさしだした

紙には誓約書と書かれていた

「古い、とは言わないでおくれ。わしもボスもこれが1番信頼できるからね」

「……まあ、おしゃれではありませんな」

ボニートは迷いなく、空白の欄に自分の名前を書き記した

その様子を見てペリーコロは安堵の息を吐く

「うむ、これで安心して仕事を任せられる」



「……………ペリーコロさん」

しかしボニートには1つ気になる事があった

「どうかしたかね？」

「何故切符が2枚なのですか？」

「パートナーを1人見つけたまえ、そして何よりこの指令は2人でないと達成できないとボスの判断だ」

「2人ですか……………」

「うむ、それでは異存ないな？ わしは次の仕事があるので急がせてもらおうよ」

ペリーコロはタイミングよく現れた黒のセダンに乗り込み、その場を去った

後に残されたボニートは額に手をやり思案に耽っていた

コンビで仕事に当たった事もあるし、大人数で仕事をしたこともある

そのおかげか人脈は広いと自負している

いずれもポルポの紹介・推薦によるもので、どれもこれも一流の腕を持った者たちだ  
「ま、人選はこつちで出来る以上楽はできるかな？」

トラックに乗り込み、エンジンを動かせる

重い排気音がボニートの耳に鳴り響いた

流星は世界に名を誇るイヴェコ社

それも特注品となればトラックと言えど箔がつくというもの

「とりあえず、事務所に戻って休むとするか」

タイヤが動き出した……………

「ちよっとお客さん！お金払ってくださいよ！」

「コノヤロー！少しはかっこつけさせろってんだ！」

タイヤが停止した……………

## 第9話 どうせ撃つならピストルで！①

「なあ、エスカーニ。無理にとは言わねえから引き受けてくれねえか？報酬はたんまりと払うからよ」

『ハハッ、すまないが私も今仕事の途中でね…おつと目標が見えたので失礼するよ』

「何がエスカーニだ！トスカニーニにでもなっちまえつてんだ！」

受話器を乱暴に置き、名刺にバツ印を付ける

ボニートのこの行為は本日にとわって21回目となった

ありとあらゆる名刺、電話番号の書かれたメモ帳は次々とゴミ箱に放り込まれていく

「おい！グーデン、とつとと水持ってこい！」

「は、はい！今すぐ！」

グーデンと呼ばれた青年は慌てながら給湯室へ向かった

グーデンドルフ・マツケシユタイン

それが彼の名前だ

ドイツでフリーターをしていたが、親と大喧嘩して家を飛び出しはるばるイタリヤにやってくるも、イタリヤにいくだけで資金を費やしてしまい路地裏生活を送っていた

挙句の果てに恐喝をしようとするも、その最初の相手をボニートにしてしまったのが運のつき、現在はボニート運搬会社の事務処理係に任命されている

………実情はボニートの舎弟であるが

「お水持つてきましたあ!」

「遅い!俺だったら後3秒は早くできるぞ!」

「は、はいいいい!」

怒号が鳴り響く

グーデンドルフにとつては恐怖と親切が混じった声に聞こえてしまう

馬車馬のような奴隷生活を想像していたのだが、ボニートからの命令は基本的に雑用

全般

そして何と言っても給金が良い

反社会的な立場になってしまったのが未だ気を引いているが、今の生活を捨てる事も出来ないと思ひ続けている

「あ、あのくボニートさん」

「んあ?どうした?」

「その………さつきから何をされているのか、気になるのですが……」

「………同窓会のメンバー集めだよ」

ゴニートは『なるべく一般人は巻きこまない』を第一の信条としている  
しかし完全にこの言葉を守るわけではない

「自分から」「自分のせいで」というのは何度かあるからだ

ゴニートも巻きこんでしまった以上、最大限の力を使って守ってきたつもりだが、力  
及ばず最悪の結果を招いたこともある

そういつた経緯があつてかグーデンドルフには全てを語っていない

言つた事があるとしたら「自分はギャングだ」の一言だけだ

「へ、へえ、同窓会ですか……」

「今んとこ全員断つているがな」

「はあく、そうですか」

ゴニートは改めて残つた名刺を睨みつけた

残る名刺は54枚

彼の人脈の広さを思い知らされる

だが、全員と親しい訳ではない

人脈作りのために話しかけてきた者もいれば、仕事に情は挟みたくないとそつけない  
者もいた

ちなみに、冒頭に出てきた『ピサの雀蜂』の異名をとるエスカ―ニは人脈作りのため

に話しかけてきた人物だ

「グーデン、今日はもう良いぞ。部屋に戻って休んどけ」

「はい、それでは失礼します」

下の部屋は空き部屋になっていたので彼の住居スペースになっている

グーデンドルフは足早に部屋を出ていく

その様を見てボニートは少し鼻で笑った

「さて、どうしたものか」

回転いすで移動し窓の外を見る

19:00のネアポリス

夜はこれからだと言わんばかりに酒飲み達が町を闊歩している

ボニートは溜息をつき、名刺の方へと顔を向ける

「もう少し粘ってみるか」

く2分後く

「腹減った」

帽子を被りボニートは町へと繰り出した

こらえ性がない? いや、彼はまだ禁煙をしている

~~~~~

「スパゲツテイ、スパゲツテイ大好き」

スパゲツテイとは「ひも」という意味を持つイタリア語 *spago* から来ており、その歴史は紀元前4世紀に遡るほどである

細さによつて名称が変わり、

太いものをスパゲツトーニ

少し細いものをスパゲツテイーニ

それより細いものをフェデーリーニ

更に細いものをヴェルミチエツリ、カペツリーニ

と、呼ばれている

トッピングや調理方法によつて多様な味に変える事ができ、ナポリタン・カルボナーラ・ペペロンチーノなどの名は聞いた事があるだろう

食べ方はいたって簡単で、フォークで巻き上げ一口で食べる

すすりながら? する人はするだろうがポニートはそのような食べ方はしない

「やっぱりボロネーゼ美味しい、イタリアに生まれてよかった」

ボロネーゼ

世界的な呼び名があるとすればミートソーススパゲッティの事だ

厳密には違うという話もちろはら聞くが、そこは割愛しておこう

イタリアボローニャ地方の調理方法によるスパゲッティで訳すならば「ボローニャ風」となるだろう

そしてポニートの大好物でもある

「このソースとの絶妙なかけあい! 麺のちょうどいい柔らかさ! もうたまらない!」

ボロネーゼスパゲッティを食べた口から出るのは大絶賛の嵐だ

高級レストラン「シチリアのコック」はポニート行きつけの店で御用客には護衛付きの個室を用意している

御用客と認定されるには全メニューを1度に頼み、全て平らげる事だ

「もうお腹いっぱい! おーいウエイター君お会計!」

「では、レジの方へご案内いたします」

「あいよ」

ボロネーゼスパゲッティ 30ユーロ

彼の財布にとっては大した出費では無い

（

「ああ、食べた食べた」

食欲を満たしたポニートにとって、パートナー探しの話をするのは野暮だろう

食事とは食べることも楽しさだが、食後こそその幸せが、いかに素晴らしいものか分かる瞬間なのだ

幸せを感じる時に仕事話を持ちかけられたら顔をしかめる事があるだろう

「そーいや事務所に戻ってパートナー選びが残ってるんだっけ……」

自分から思い出してしまったのではフォローのしようがない

さっきの満腹感はどこへやら

がつくりと肩を落としポニートは俯きながら歩き出した

「(どいつもこいつも一癖二癖ある連中だから、はつきり言っであんまりつるみたくなえンだけどなあ〜)」

歩くポニートにまばゆい光が差し込んだ

映画館のネオン看板の光だろう

先週にリニューアルオープンしたこの映画館は中々に盛況しており、客の出入りが目立っている

「(映画か……『踊れトスカーナ!』以来何も見てねえな……」

特に興味があるわけではないが適当にパンフレットを取る

パンフレットには映画のスケジュールや評論家の一言などが載っていた

「『電車泥棒』『ロマンスは午後5時』『パニックシティ』『ベルギー篇』……意外と面白そうだな」

どうやら興味がわいてしまったようだ

ページをどんどんと進めていく

ボニートはあるページで進みを止めた

ジャンル別ランキングのページだ

「……………」

ボニートは何を思いついたのかパンフレットを放り投げ、事務所へ向かって走り出した

その光景に何人かが振り返ったが、特に気にする事も無く元に戻った

どうせだから、パンフレットのジャンル別ランキングの1面を紹介しよう

今週最高峰のマカロニウエスタン！

『馱馬車よ、もう一度』

く弾は残っちゃいないぜ？く

強盗と知能犯で有名なカストーノは次の標的を現金輸送の……

マカロニウエスタンとはアメリカの西部劇に対抗する形で生まれた映画でいうなれば、ヨーロッパの西部劇との呼称が似合うだろう

西部劇の主人公が正義感として描かれるのに対して、マカロニウエスタンの主人公は悪漢として描かれる事が多い

共通しているところがあるとすればテングガロハットぐらいであろうか

くくくくくくくく

「……………ああ、俺だ。ボニートだ」

「仕事を頼みたい」

「それは良かった。じゃあ、明日の12:00ちょうど、レストラン『シチリアのコック』で待つてるからな」

「ああ？安心しろ極秘回線だから心配するな」

「報酬は仕事が終わってから、お前の言い値で払おう……………バカにすんな、これでも幹部クラスだぞ」

「それじゃ頼りにさせて貰うぜ」

「ホル・ホース」

第10話 どうせ撃つならピストルで！②

「よ」

「これはボニート様。それではお部屋の方に……」

「いや、今日は待ち合わせをしているだけなんだ」

「左様ですか。では、私はこれにて」

時は12:00分

「シチリアのコック」前に来たボニートは辺りを見ながらベンチに座った

ホル・ホースはまだ来てないようだ

「ちきしよー、あのアメリカン野郎……15分前ぐらいには来いってんだ」

イタリア人は時間感覚がルーズだと言われているが、守る人間はちゃんと守っている

ボニートもその内の一人だ

「よう、ボニート」

「遅えーぞホル・ホース」

テンガロハットに西部風の衣装を身にまとった男——ホル・ホースはボニートが今ま

で仕事をしてきた中で最高の相棒だった人物だ

組んだ回数は計4回

「ヒビツ、そう言わんでくれ。今でこそ全快だが、その前まではナース追っかけてたんだからよお」

「失敗したのか？」

「エジプトでな………とところで仕事って何だ？」

ホル・ホースは仕事の内容までは聞かされていない

「昨晚いきなり電話がかかってきて、『仕事をしたいからこっちに来い』と言われたぐらいだ

それ以上は何も聞いていない

「平たく言うなら護衛だな」

「誰の？」

「俺の」

「お前の？」

「俺の」

「…おいおい、冗談よせよ。お前にや自慢の『キャプテンビヨンド』があるんじゃないのかよ」

「いや、上の人に2人でやれって言われてな」

ペリーコロの指示は2人で仕事に当たる事

いや、正確に言うならボスからの指示になる

ブチャラティの任務がどれほどのものかは知らないが、ボスから直々の指令となればきつと難易度の高いものなのだろう

「まあ、そのなんだ。病み上がり最初の仕事としちやあ簡単な方だと思うが……」

「退院祝いが仕事話なんて、酔っ払いでも笑わねえぜ……」

「ずっと笑ってるからな」

ホル・ホースはタバコをくわえ、火をつける

ライターはジッポー社の1937年モデルだ

「仕事は引き受けてやろう……だが憶えといてほしいことがある。お前とはちゃんとしときたいからな」

「言ってみろ」

「いざとなつたらお前を見捨てる、向こうが強いとわかつたら向こうにつく、お前が死んでも仇はとらない」

「良いだろう、覚悟しようじゃねえか」

「よおし！ 契約は成立だ！」

ボニートとホル・ホースは固い握手を交わし、笑みを浮かべる

だが、ホル・ホースは何かに気づいたようだ

握手を解き、レストランとは反対側のビルの上を見ている

「どしたの？」

「いや……ちよつとりハビリついでに、な」

『皇帝!』

~~~~~

「見つけたぞ……ポニート・E・ゼルビーニ」

黒シャツを着た青年の手に持つのはウインチェスターM70

かのベトナム戦争でアメリカ軍が使用したスナイパーライフル、狙撃銃だ

「よくも指揮官殿を……指揮官殿を！」

銃身にとりつけられたスコープに写るのはポニート・E・ゼルビーニ

彼にとって自分から全てを奪い去ったと言っても過言ではない憎き怨敵

それを今から殺すというのだ

これほどの歓喜は彼にないだろう

「死いね！」



Bannon!

脳天に穴が開いた彼に掛けられる言葉は無い

~~~~~

「今からどうすんだ？」

二人はトラックに乗り、国道を進んでいた

「本当なら事務所に戻って色々対策を練りたいんだが……ちよつと野暮用があつてな」

「あくあ、仕事始めに野暮用なんて聞きたくないんだが」

「じゃ、ラジオでも聞くか？」

このトラックにおいてラジオチャンネルはたった一つのみ

RAIイタリア放送協会だ

ボニートが気に入った理由はオペラ・クラシック等の曲を流しているからである

「相変わらずクラシックなんてもんを聞いてんのか」

「良い曲だろ？」

「ああ、前振りのねーちゃんの声は魅力的だったよ」

「なら残念だったな。そのアナウンサーもう結婚10年目だ」

「……………イけるかもな」

「おい」

ハンドルを回し国道を抜け、ボニートはトラックを高架下の人気のない所に停めた
ホル・ホースは疑問の表情を浮かべる

「どうした？」

「言つたら、野暮用だつて。ついてくるか？」

「護衛を頼んでおきながら、その言葉はいただけないぜ」

「そーかい」

ボニートは荷台の扉を開け、ダンボールを一つとりだした

「それで？」

「ホル・ホース、俺たちは就職難・雇用なたらと言われている時代に転職が出来たんだ。
ありがたく思えよ？」

「はあ？」

ダンボールの中身はアームカバーにサンバイザー、伊達眼鏡にメモとペン、カジユア
ルな感じのネクタイ・ズボン。首に下げるであろう通行許可証のネームプレート

そして何よりメモ帳に挟まれた「ポルポンス新聞社」の名刺

まぎれもない『新聞記者』の姿である

第11話 週刊3面記事の謎

「どうも、ポルボンズ新聞社のオーレ・カッティチェリと」

「写真担当のエドワード・ワーズです」

「おお！よく来てくれたね！警部は14階の奥にいるから」

「はい！ありがとうございます！」

見事転職に成功した2人はオーレ・カッティチェリ（ボニート）とエドワード・ワーズ（ホル・ホース）と名前を変えていた

そして彼等の新聞の最初の記事は「イタリアの警察を追う！」というもので、現在取材の為に警察署へ来ていた

「（おい、ボニート。いきなりサツに入り込むたあどういう事だ？）」

「（勘違いしているようだが、俺らにとつちやケーサツつてのは友人なんだよ）」

彼等は転職などしていなかった

未だギャングと殺し屋のままだ

チン！

エレベーターがついたようだ

警察官の案内で一つの部屋に案内される

「警部！記者の方々が到着しました！」

「入ってもらえ」

部屋の中から聞こえたのはボニート立ちよりも低く野太い声だった

ドアにかけられているプレートには取調室の文字

中にいたのは無精ひげを蓄え、口にシケモクをくわえている、正に中年という言葉が似合う男性だった

名をエルピディオ・マルケーゼ

その道13年の中堅警部で知られている

「やあ、どーも。記者のオーレと」

「カメラのエドワードです」

「……………まあ、どうぞお掛けになってください」

警部は警察官に人払いを命じて、ドアのかぎを閉めた

ブラインダー・カーテンも閉じ完全に外部から見られるという事はできなくなる

コーヒーマシンからコップを2つほど出し、エルピディオはやってきた客2名にふる

まった

「例の資料についてか？」

「ああ、そうだ」

このエルピディオという警部は正に曲者である

交番勤務でうだつの上がらない毎日を送っていたが、ボニートと出会い一変

ボニートから手に入れた情報を頼りに密輸などの事件を次々に解決。それは市民賞をもらうほどであった

だが、エルピディオに正義感というものはない

正確にいうなら警察として持つべき正義感が欠けているというのが正しい

パッションネと関係している違法風俗などは見逃しているし、ボニートとの関係を知られないために検挙・ガサ入れの時はまったく違う情報を流しこみ捜査の妨害をしている

そして何と言ってもパッションネとのパイプを持っているので上層部からの覚えも良い

急激な出世は返って怪しまれるので現在は警部と言う地位に留まっているが、いずれはトップクラスの地位を我がものにと野心家の面もある

警察と独自のコネを持ちたかったボニートにとってこのエルピディオは最適だった

「一応手に入れる事はできたが……」

「が？」

「いやあ、ちよつとな。あり得ない場所に保管されてあつたんだよ」

「ありえない場所？」

「説明は長くなるが……お前の欲しがっている資料つてのは、本来資料室の奥深くにあるべきものだった。確かにそこにも資料と言うものはあつた。だが、資料と言うにはあまりにもお粗末だった。場所・日時・担当捜査官などは書いてあつたが……一つだけ、抜けているものがあつた」

「抜けている？」

ボニートの眉間に疑問の皺が寄つた

エルピディオはその反応を待っていたかのような様子にやりと口元を歪める

「イタリアの警察が抜けてんのは、今に始まつた事じゃねエだろ？現に俺らみたいな奴とこうしているわけだし……」

「そう言つてくれるな……ホル・ホース君」

「……アンタ、俺を知つてんのか？」

「さあ、それはどうだかな？」

ホル・ホースは「エドワード・ワーズ」と名乗つており、ましてや目の前にいる警部

とは初対面だ

確かに暗黒街で名を馳せているという自負はあったが、まさかエルピディオに知られているとは思いもしなかったのだ

「話を本題に戻してくれ」

「おお、すまない。さて、どこまで話したかな……抜けているものだったな」

「……………」

「刑事資料においてそれは最も重要な資料が抜けていた……被害者の死体写真だ」

「死体写真？」

「昨今の捜査において写真の存在と言うものは意義深い

刑事ドラマなどで被害者の死体が映し出された写真をきっかけに事件解決と言うのは聞かない話ではないだろう

「写真が保管されていたのは25階にあるコンピュータールーム。そこは別に特別な場所と言う訳ではない。新米からベテランの連中もよく使っている場所だ………だが」

エルピディオはその死体写真を机の上に差しだした

写真に写るのは壮年の男女、恐らく夫婦であろう

それに対しポニートは何をするわけでもなく、その写真をただ見続けている

「これはデータの中の……極秘管理事項に指定されていた」

「…なるほど」

極秘管理事項とは、つまるところ国家秘密として扱われるという事である
ボニートが追っているある事件はそこまで大きいものではない

その事件は一般的に事故として処理された事件だ

国家レベルのような話ではないはずだ

それがなぜ極秘管理のファイルに入っているのだろうか

「なぜ、とは聞かねえぜ」

「そうだ、聞かない方がよい。これ以上はお互いに領分を越えてしまっている」

ボニートは引き下がった

これ以上食いついても意味がないと判断したからだ

「せいじゃ、俺らはこれでおさらばさせてもらうぜ…それと、これ」

ボニートはホル・ホースが持っているカメラからマイクロチップを1枚取り出した

その中身は敵対ファミリーの不正の数々と各アジトの地図だ

「これこれ。やつぱりチップははずんでもらわねえとな」

「フン、業突く張りめ。じゃあ、な」

「じゃあ、な。新米！記者が帰るってよ！お送りしてやれ！」


~~~~~

「いやあ、良い記事が書けそうです。それじゃ、お勤め頑張ってください」  
「はい！これからも励む所存です！」

ボニートは新米刑事に何度も頭を下げながら警察署から離れて行った  
高架下に隠していたユーロカーゴに乗り込む

だが、運転しているのはホル・ホース

ボニートはエルピディオから貰った資料をずっと読んでいた

「辛気臭えーのは苦手なんだがな、親父様よ」

「ん？何か言ったか？」

「いんや、なんでも」

事故死で死体に銃創……何やったんだよ親父様

## 第12話 フニクリ・フニクラ①

揺れ動く列車の中、新聞を読む男が2人いた

「今日のラ・スタンパによると大統領は経済困難に対して全面的に取り組むだよ」  
「今日のラ・レップブリカは外相の非難ばかり、つまんね」

どちらの新聞もイタリアで大きな影響を与えるマスメディアだ

ペリーコロからの指示があつたボニートとホル・ホースは難なくイタリア国鉄に乗る事が出来た

「お客様、乗車券のご確認を…」

「はいよ」

「オーレ様とエドワード様です。この度はイタリア国鉄をご利用いただきありがとうございます。ございます。それでは良い旅を」

駅員は連結部分のドアを開け次の車両へと進んでいった

ホル・ホースは新聞を机に置き、ボニートへと詰め寄つた

「ボニート」

「うん?どうした?」

「ブチャラティって奴はどこにいるんだよ」

彼らが今直面している危機

それはブチャラティを見つける事が出来なかったという事だ

駅に行つたは良いものの、人混みが多く流れるようにして乗車してしまつたのだ

彼らにせめてもの希望があるとと言うのなら、それはブチャラティのチームは必ずこの

列車に、16:35分発の列車に乗ると言う事をペリーコロが言つたぐらいだ

「何そんなに焦つてんだよ、折角タダでスイートクラスに座れてんだから満喫しろよ」

「あいにくだがな、今までスイートクラスなんぞとか言うのは座り慣れててな。今じゃエコノミーに憧れを抱いてるほうさ、つてそんなことじゃねえ！俺が言いたいのは任務不履行で俺まで粛清の手が伸びかねないかも知れないだろうが！」

「安心しろ、任務不履行の場合は処理されんのは当事者だけだ」

「何だ当事者だけか………ん？当事者？」

「うん、当事者」

「お前、当事者？」

「うん、当事者」

「俺は？」

「うん、当事者」

「当事者は？」

「処理される」

「ふざけんな！」

ホル・ホースは自ら放った怒号とともに新聞を投げつけた

ボニートは避けようと体を反らしたが、バランスを崩してしまい椅子から転げ落ちてしまふ

それにつられて簡易テーブルに置いてあつたアイスコーヒーを頭からかぶつてしまふ

「まあまあ、そう怒るなつて。ヴェネツィアまでに連中を見つけりや問題にはならんさ」  
「ちきしよく、俺が死んだら世の女どもが涙うるうるの……」

「ふん、だから女にかまけるのは程々にしとけつて言つただろうが」

「うるせえ！場末の娼婦しか抱いた事の無エお前が知つたような口をきくな！ああ、ドイツ軍の女性副隊長との禁断の恋があゝ、イングランドの貴族に仕えるメイドとのラブロマンスがあゝ」

「後で聞いてやるから、ほれ探しに行くぞ」

意気消沈しているホル・ホースを引きずりながら次の車両へと向かう

彼らがいるのは最後尾の6車両目

向かう先は1車両目だ

~~~~~

「マスター、ストレガを1杯。昼だから少なめにロックで」

「俺はアルマニヤック……いや、グラツパを頼む、ロックで」

結局見つからなかった

6車両目から風潰しに客席を見合っていたのだが、ブチャラティと同じ風貌を持つ者は一人としていなかったのだ

とりあえずいったん落ち着こうと2人は食堂車のカウンターで話し合う事にした

「おい、どういう事だ？どこの車両に行ってもブチャラティって奴はいねえじゃねえか」

「それはこつちが聞きてエよ」

2人はある意味では安心していった

少なくとも自分達は処理される事は無いだろうと思っっているからだ

ペリーコロの指示16：35発の電車に自分達は確実に乗った

なのに、目的であるブチャラティがいらないという事はブチャラティ達が何らかの理由で電車に乗り遅れた、あるいは電車から降りてしまったとボニートは考えていた

だが、そこにもう一つ疑念が生じる

「ポルポの試験を生き残ったあのブチャラティが失敗するとは考えようもないのだ
「ストレガとグラツパです」

「あーりがつとさん」

何も解決しないまま酒を飲むのはボニートにとつては嫌なものだ

相棒であるホル・ホースはそんな事お構いなし

イタリア特産蒸留酒のグラツパを悠々と飲んでる

「うんまいーやっぱ本場のグラツパは最高の味だあー」

「ラキヤと変わんねえと思うが………?」

ボニートはある違和感を感じ取った

さつきまでであったものがいきなり無くなったような感じだ

ホル・ホースも酒こそ飲んでるもその違和感に気付いたのか、右手をカウンター下に忍ばせている

「マスター、支払いを……!?!」

違和感の正体はマスターだった

さつきまでそこにいたのにいつのまにか食堂車から姿を消している

疑問に思ったボニートはカウンターから身を乗り出し、辺りを探す

「マスター？」

「お、お〜〜きや〜〜くううう様ああ〜〜〜」

カウンターの下にマスターはいた

しかし、それは先ほどのマスターとは言い難かった

腰は低く歯はほぼ抜けており、皺が顔のあちこちに出来ている

「マスター!?!ホ、ホル・ホース…これを見る!」

「い、いや、見るのはお前のほうだぜ……ボニート。マスターもひどいんだろが、これも……ひでえ」

「なんだと?」

ボニートが振り返る

ホル・ホースの視線にあったもの

それは……

「これはッ!?!この食堂車にいる人間すべて『老化』しているッ!」
「それも誰それ構わずだ。こりや性質が悪いぜ」

第13話 フニクリ・フニクラ②

「駄目だ。こいつも衰弱してやがる」

「くそつたれめ！」

ボニートの仕事の信条の一つ

『なるべく一般人は巻きこまない』

現在、目の前で行われている老化の惨劇はその言葉をいとも容易く崩したものであった

「恐らくだが：いや、これは明らかにスタンドの攻撃だツ！集団老化なんて聞いた事が無エ！きつと敵はこの列車内のどこかにいる。そしてこの規模、使い手なら把握して無え訳がない。この老化現象は連中にとって『奥の手』の一つだろう。つまり連中は」

「ボニート、一つ聞きたい事があるんだがよオ」

「何だ？」

「どうして俺たちは老化してないんだ？」

ホル・ホースの言葉にボニートは衰弱した乗客と自分達とを見比べた

まずは、料理

ボニートたちは料理と呼べるものは一切頼んでいないし、それどころか食欲も無い。他の乗客たちには、テーブルの上にステーキなど豪華な食事が置かれていたようだが、その料理も老化の影響なのか黒ずんだ塊となっている。

次に、服装

これは関係ないだろう

確かにホル・ホースは西部風の服を着ているが、ボニートは藍色を基調とした迷彩色スーツ（ブリーオーニ社製）

スーツを着ている乗客は何人かはいる

最後に、飲み物

ボニート達が手に持っているのはストレガとグラスツパ

どちらもイタリアを代表するリキュールとブランデーだ

だが、客員テーブルの上にあるのはワイン、ウイスキー、バーボンなどなど

無論リキュールとブランデーを飲んでいると思われる乗客もいた

「分かん……な、だが俺達には『何か』違うものを持っている……あるいは、その『何か』を持っていないから老化の条件から外れているとすんのが妥当だと思うが？」

「妥当かよ、じっくりしねえな」

「俺だってそんな言葉使いたかねえよ」

グラスをカウンターに置き、ポケットからタバコとライターを取り出す

タバコはオーストリアから取り寄せた「カサブランカ」

だが、ライターがうまく着かないようだ

「ホル・ホース、ライター」

「禁煙はどうした？」

はっ、とボニートは慌ててタバコを箱に戻した

そこでまた違和感に襲われる

何か力が奪われたような、特に左腕の力が奪われたような

「ボニート！お前、腕！」

「ああ？」

驚愕したのはホル・ホースだけではない

ボニートも驚愕する

「何だこりゃ!？」

指先からどんどん枯れ果てた木のように老化が進んでいく

爪は剥がれかけ、皮もめくれ始めている

右腕で力強く押さえようと、キャプテンビヨンドで押さえようと

「(何故だ？何故今になって…このタイミングでッ!)」

頭の中で自分の行動を一気に思い返す

そこにこの老化の秘密が隠されているかもしれないからだ

「この列車に乗ってからの行動を思い返せ！切符を駅員に渡した。ブチャラテイ搜索のために全車両を周った。そして今ここで酒を飲んだッ！アルコールの摂取量が問題なのか？いや、違う！もし連中が何かをあぶり出すためにこの無差別老化を行っているというのなら、そんな曖昧なもんじゃねえはずだ。きつと俺は『何か』を持つちまったんだッ！捨ててしまったんだッ！」ホル・ホース！この列車に乗ってからの俺の行動を詳しくだ！覚えている限りで詳しく、全て、言えッ！」

熟慮に熟慮を重ねたがボニートの頭の中で解決の糸口は見つからない

彼は自分の相棒に意見を求めた

自分の事は自分がよくわかっている

などと言う連中がいるが自分を見る事が出来るのはいつだって他人だ

「この列車に乗ってから……新聞を車内販売で買う、席に座って切符の確認、ブチャラテイ搜索のために全車両を周る、見つからず諦めてバーで一休み、ロックのストレガとグラツパで乾杯、周囲の老化に驚いて対策を練り始める、老化の条件について考え始める、そして……」

ホル・ホースは何に気付いたのか、目を見開きあるものを指さす

「グラスをカウンターに置く……」

「グラスをカウンターに……そういう事か!」

枯れた左腕の最後の力を振り絞りカウンターに置かれたグラスへと手を伸ばす

「老化の条件、分かったぞ!」

彼はグラスへと……いや、『ロックアイス』へと手を伸ばす

~~~~~

「なるほど『温度』か、そりや盲点だったな」

「サーモ何とかがつてのがあるらしいが、肉眼じゃ見えない所をつく能力だ。こりや厄介なことになったぜ」

互いにロックアイスで体を冷やしつつも、周囲への警戒を怠る事はない

ホル・ホースは『皇帝』の引き金に指をかけたままだし、ボニートは右手で大型フライパンをペン回ししているかのようにして遊んでいる

「こつちから行くか?それとも向こうから?」

「一番の理想的なのはこつちから行ってウルトラ大活躍して事件解決」

「一番の現実的は?」

「向こうから来て防戦一方で何とか勝利」

「勝てるだけ良しとするか……………」

ロックアイスを口に放り込み、更に冷蔵庫の中を漁っているのはホル・ホースだ

「なあ、ボニート。これは俺の予想なんだが」

「言ってみろ」

「敵はおそらく複数人で行動をしている」

この予想は仕事経験で培った直感が告げたものだった

ホル・ホースは様々な組織・人物と組み、様々な組織・人物と敵対してきた

政治家、企業の重役、マフィア・ギャング、極右極左団体、テロリスト、ある時は一

般人と手を組んだこともある

はつきり言って仕事の数だけならボニートよりも多い

「……………もし、お前の言う通りだった場合、その敵は多数か？少数か？」

「お前の好きな方で良いよ」

「じゃあ少数か」

フライパンを受け止め、貫通扉を睨みつける

『皇帝』の銃口も貫通扉を向いている

—— まったく、もう兄貴ったら容赦ないんだから——

「本腰入れるぞ！ホル・ホース！  
「アイ・アイ・サー！」



## 第14話 フニクリ・フニクラ③

「お前ってかっこつけんのは得意なくせに、後始末はへたくそ何だな」

「うるせー、上司の教育が悪かったんだよ」

2人がどこにいるか教えてあげよう

バーの食器棚の中だ

幸いにも皿などの物はほとんど入っておらず、大人2人が隠れるにはちょうどいい広さになっている

「未知の敵に当たるなんて暴挙は犯したくない」

「お前のご先祖様はポエニ戦争で象と戦ったんだぞ」

「残念、俺のご先祖様はゲルマン民族・フン族と戦ってたんだよ」

「大戦期はパルチザンか？」

軽口を立てている暇は無い

この密室空間において気温・温度は非常に上昇しやすい

ロックアイスの袋を束ごと持ってきたのが唯一の精神安定剤だ

「だけど、このままって訳にもいかんだろ。今すぐじゃ無くとも、いずれは反撃に出な

きやならねえンだぜ？」

「ホル・ホース、国語が正しくねえな。俺達は確かにこうしてこそそそしちやいるが、敵からまだ何もされちゃいない。反撃つてのは攻撃されたつてことだ。俺達の任務を遂行させやすくするのに一番良いのはな？ 『常に先制攻撃を仕掛ける事』さ！俺たちが反撃するんじゃねえ。連中が反撃するのさ！」

「……………よしその案乗つたぜ。ジョン・ウエインとまでは言わねえが、30年ぶりの大列車強盗と洒落こむか！」

2人は意気込みこそしたが、まだ出るには早い

お互い引き戸を少し開け外の様子をうかがう

男だ

男がカウンターに座って冷蔵庫にあつたであろう氷をガリガリと食べている

「敵か？」

「氷を食べている所を見るとそうだろうな」

老化の条件は温度に反応するものだ

それも高温であればある程にだ

「だが、奴がこの老化現象を引き起こしたとは考えられないな」

それはそうだ

老化させておきながら、その被害を自分も被ってしまおうようではお粗末にも程がある  
すると、ホル・ホースがボニートにある場所を指さしていた

しかしボニートの場所からはそれが確認できない

体をくねらせ場所を交換しようとするも、両者とも大柄な体型だ

そう簡単には移動できない

「おい、ハンバーガーデブ。体ひねらせろ」

「うるせーぞピザデブ。足邪魔だ」

罵りあいながらも、移動はできたようだ

隙間からホル・ホースが指さした方向を見る

そこには釣りざおがあった

「釣りざお?」

「奴のスタンドかなんかだろう。それに良く見てみろ」

その指示に従い、目を凝らしてみる

その釣りざおにはある物が一つなかった

釣り針がないのだ

見えるのは糸が地面に垂れ下がっているだけで、針の存在は何度見ても確認できない

「どんな能力だと思っ?」

「俺の見立てが正しけりや、魚をいつでも釣る事が出来る能力だな」

「クジラでも釣って貰うか？」

「そりや哺乳類だ」

しばらく見ていると男に動きが出た

釣りざおを持ちあげ、リールに耳を当てている

「何やってんだ？」

「おい、俺にも見せろ」

ホル・ホースがポニートを押しつけて覗きの隙間を占拠する

だが、ポニートは抵抗する事は無くその場所を譲った

「（敵の動きが全く読めねえ…探してんのか待ってんのか、目的はなんだ？）」

「ほおくくう、なるほどなるほど」

「何か分かったか？」

「奴の釣りざお……正確に言うなら釣り糸と言うべきか、釣り糸は壁を通り抜ける。

……ここからはあくまで推測だが、釣り糸はある場所に固定する事ができ、そこから振

動などを感じ取る」

「奴がリールに耳を当てていたのはそのためか」

「おそろくな、だが少し………何か引つ掛かるんだよな」

「釣り糸だけに」

「はっはっはっは、そりやうまい」

——ダン！ダン！——

「!？」

突然の銃声に驚愕の表情だ

もう、隙間何かを気にしていない

思いつき引き戸を開けた

目の前に釣りざおの男はいない

「こつち」

「あいよ」

2人はカウンターの下に隠れて、しばらく様子を窺う  
すると、もう一人男が現れた

特徴的な帽子？を被っており手には拳銃を持っている  
その拳銃の銃口は釣りざおの男に向けられていた

「あれ、なんて銃？」

「S & Wのシリーズだな。38口径ダブルアクション」

「まともやアメリカンか……」

「ベレッタを使われるよかマシだろ」

拳銃談議に花を咲かせている場合ではない

ボニートは先ほどの発砲で割れたであろうグラスの破片を指で掴む

ホル・ホースは『皇帝』を出現させ、タイミングをうかがっている

「いつ出る？」

「いや、出ない方が良い」

「はあ？ どういうことしたい？」

「焦りから来るタイミングはひどいタイミングだからな。何事も『待ち』の一手という奴

さ」

『待ち』の一手

ボニートの言葉にホル・ホースの眉間に皺が寄せられる

しかし、それでも動かないのは彼を信頼しているからであろうか

——なあ~~~~、あんたよ~~~~肉が食べれね~~~~んだよ~~~~——

——今すぐ食いたくなるようにしてやつから、離れてろ！——

帽子の男は老人にせがまれて、身動きが取れないようだ

——いいや、食えなくなるのはお前の方だぜ、ミスター——

——何だと?……てめえ、まさか!?——

慌ただしい様子にカウンター下の2人が顔をのぞかせた

これで驚愕の表情を見せるのは本日で何度めであろう

紫の縦縞スーツを着た老人が帽子の男、ミスタの手を掴み……老化させていたのだ!

「直は素早いんだぜ……」

紫スーツの老人は紫スーツの男になっていた

釣りざおの男が安堵の表情を浮かべながら近づく

「兄貴イ〜!流石、プロシユート兄貴はスゲエーや!」

「ペツシ、この程度で一々喚くんじゃねえ。俺達はなあ、そんじよそこらの仲よしグ

ループとは……」

プロシユート兄貴

そう呼ばれた人物は目の前で倒れているミスタの拳銃S & Wの銃口をミスタの頭に

向ける

「ワケが違えーんだからな」

『ブツ殺す』と心の中で思ったのならッ！

その時スデに行動は終わっているんだッ！

「ついてこいペッシ！ミスタが1両車目から出てくるのを俺は見た……娘は運転室にいるッ！」

「ま、待つてくれよオ、兄貴イ」

2人が立ち去ったあと、今度はカウンタ下の2人が現れた

「あくあ、退院祝いの仕事で早速死体が出来ちまったよ」

「俺も幹部クラスの初仕事でコレだ。嫌になるぜ」

ミスタの死体をまじまじと見つめながら、ボニートは十字を切った

ホル・ホースは冷蔵庫にある全ての氷を取り出し、腕に抱える

「どーする？途中下車でもするか？」

「そりや魅力的だが、2枚の切符を無駄にすんのはいただけないなあ」

「乗り越しのできない電車なんて願い下げだぜ」

「安心しな、すでに対策案はできてるぜ」



「ほお、んじや聞かせてもらおうか」

ボニートは壁に貼つてある車内案内のポスターに手をつけ、連結部分に指を当てる  
ホル・ホースはそれを理解したのか笑みを浮かべ、『皇帝』を出現させる

発案者のボニートも『キャプテンビヨンド』でカウンターの丸椅子を持ちあげている  
「ヒッヒッヒッヒッ、なるほど、そりや大変だあ。明日のスタンパの1面は俺らが取つた  
も同然つてワケだ」

「レプップリカもな。題して……イタリア鉄道史上最大の怪事件」

## 第15話 フニクリ・フニクラ④

「6両車目の切り離し完了ッ！ボニート！そっちはどうくだあ!?」  
「今ねじ外してるところだ！お前は先に4両車の仕事にかかれ！」

「あいよー！」

ラ・スタンパ（記事の一部より抜粋）

イタリア鉄道史上最大の怪事件!?

フィレンツェ行き急行列車を襲った真相に迫る！

「んう~~~~~よいしょっ！ふう、取れた」

ラ・レプツブリカ（記事の一部より抜粋）

敏腕刑事エルピディオ氏「解決は困難」

捜査本部は増員派遣を決定

「ホル・ホオース！そっちやどうだあ!?!」

「最後の1つだ!...クソツ、錆ついてやがる」

「先行ってるぞー！」

コリエーレ・デラ・セラ（記事の一部より抜粋）

被害者が語る「老人になってしまった」？  
連結部分が外れた訳は？

「2両車にかかる！」

「おう、行つて来い！」

イル・マニフェスト（記事の一部より抜粋）

新しいテロの疑惑、反政府団体の仕業か

フェットロヴィーエ・デッロ・スタート社重役一同「原因究明に勤しむ」

「3両車は終わったぞ！どうだ？」

「後10分あれば……ええい『皇帝』！ぶち抜きな！」

オッセルヴァトーレ・ロマーノ（記事の一部より抜粋）

車内で銃撃戦が起こった可能性あり

一部関係者は否定

「よし！ホル・ホース！上がつてこい！」

この怪事件はイタリア全土に衝撃を走らせた

~~~~~

「任務は遂行する、部下も守る。お前ごときに両方やるというのは、そうムズかしい事じゃあないな」

「早い、な。たしかに、早い」

運転室

そこは戦いの舞台となっていた

ブチャラティブsプロシユートと言ったところだ

先手はブチャラティブの1打から始つたようだ

『ステイツキー・フィンガーズ』の攻撃を喰らい、プロシユートの体にはジツパーと言うジツパーが体にあらわれている

「お前のスタンド『ステイツキー・フィンガーズ』……俺の『グレイトフル・デッド』より早いのは百も承知だ……エネルギーを老化に費やしている……からな」

「……………」

「だからこそ、お前は理解して、いねえ。速く走る車のボンネットほど熱くなるんだからなア、動くつてこたあつたまるつてことなんだよ、カロリー使つてるからな」

「！」

「気付いたようだな……氷で冷やしても手遅れだぜ……体内温度は上昇してんだからなあ！」

ブチャラティの全身に皺が現れる

奇跡的に生きていたミスタのスタンド『セックスピストルズ』のNO. 6が氷を使つて冷やそうとするも効果は無い

「氷ガキカナクナツテル！ブチャラティ！」

「どうした？今さら汗をかいたところで体は冷えねえぜ」

『グレイトフル・デッド』がブチャラティの腕を掴む

直に触れると老化のスピードは著しく速くなる

だが、ブチャラティは何もしない

「掴んだぞブチャラティッ！これで俺達の仕事は終わりだ！娘は手に入れた！」

「捕まえられるのも覚悟の上だ」

プロシユートは気づいた

ブチャラティが自分の腕をつかみ返していることにだ

「『任務は遂行する』『部下も守る』、両方やらなくつちやあならないのが幹部のつらいところだな」

覚悟はいいか？オレはできてる

プロシユートはさらに気づいた

自分を含めブチャラテイの足場にまでジツパーが仕掛けられているのを

「ブチャラテイッ！まさか、オメー！」

「お前をこのまま列車から追い出せる……『老化』さえ解除すれば、部下は復活する！娘も守れる！」

「てめー、外は時速150 kmだぞッ！腕を離しやがれー！」

「掴んだのはお前のほうだろ？」

ジツパーが一気に開かれる

時速150 kmの世界

プロシユートは開かれた部分を握っているのが精いっぱいの状態だ

「うおおおおおおお！ペツシィ！列車を止めろおおお！」

「(ん？これは……)」

焦るプロシユートとは対照的にブチャラテイは冷静だった

覚悟の上で行った行為なのだから

だが、逆に冷静すぎたのが問題だったのかもしれない

外の光景にブチャラティは冷静だった分の驚きが来てしまった

「(全車両が分断されている!?)」

~~~~~

一方、運転室

ペツシはブチャラティから受けた一撃からやっと復活していた

しかし、あたりを見回すと自分の信頼する兄貴がいない

ただ一つ変わっていることと言えば、巨大なジツパーがあらわれていることぐらいだ

「あ、兄貴イイイイイイイイイ！」

ペツシは窓から外の様子をうかがう

そこにあつたのはプロシユートがぎりぎりといった感じでジツパーの端をつかみ、ブ

チャラティを振り落とそうとしている光景だった

「(兄貴をた、助けねえと……………)」

ペツシは迷う

どうやって助けるのが最良の方法なのか

『ビーチ・ボーイ』 を使っても、緊急停止レバーを引いてもプロシユートは助かるが、問題はブチャラテイなのだ

外に出てしまった以上、『グレイトフル・デッド』の老化ガスの範囲は期待できない  
ブチャラテイを倒せたとしても残りの部下たちが復活し自分たちに報復しに来るだろう

「もう、良いほうなんてわかんねえー！」

『ビーチ・ボーイ』を片手に掴み、もう片手を緊急停止レバーへと伸ばす

「喰い付いたッ！だが、2人分……ブチャラテイめ！」

レバーを引いたはよいものの、電車はそう簡単には止まらない

ブレーキによる車輪の歯止め音が耳にこだましているが、今のペッシにとってはそんなことはどうでもよかった

『ビーチ・ボーイ』は本来1人分の重さしか釣り上げることではできない

今、こうして釣り上げられているのはペッシの精神状態が鬼気迫るものであるからだ  
スタンドは精神状態によってその力が変わりやすい

ペッシの中にある「兄貴を助ける」という強い一念が『ビーチ・ボーイ』を強くしているのだ



「あと、もうちよい………列車が止まった！」

『ビーチ・ボーイ』を解除し、運転室のジツパーへ向かう

「兄貴イイイイイイイイッ！」

が、しかし

「おおっと！お前はこっちだぜ！」

「な、何イッ!?」

後ろから唐突に現れた2人組、ボニートとホル・ホースに引つ張られペツシはジツパーの反対側へと放り出される

時間はちょうど夕方

夕日が辺りを照らしているがボニートたちのいる場所は列車によって影になっている

「お降りの際は右のドアが開きます…ってか」

「足元に注意をッ！」

ホル・ホースの『皇帝』の弾がペツシ目掛けて放たれる

……だがッ！

『ビーチ……………ボオオオオオイ!』

キーン!

「ンナツ!? 釣針で弾き返しやがった」

とはいえだ、放り出された衝撃がまだ残っているのであろう

ペッシは立つのもままならず、地面に突っ伏している

「最後の馬鹿力つてやつか……」

「とどめさすか?」

「ああ……………いや、少し待て」

地面に突っ伏しているとはいえペッシの顔に喜びの色が出ていた

これから殺されるかもしれないというのに、それもあつけなく殺されるかもしれないというのに

「…兄貴は、言っ…たんだ。『スタンドを…解除して、はいけない』……………ただの意気込…みだと思った。だけど本当…だったんだね、兄貴」

「こいつ何を言っ………………ッ!」

老化がまた始まった

プロシユートはブチャラティに巻き込まれ、生きていたとしても瀕死の状態、いや、健全な状態だとしても精神力の疲労からパワーは中々出せないはず

2人の読みは甘かったのかもしれない

ボニートの顔に汗が流れた

恐怖・驚愕・畏敬の汗だ

「オレらやばい仕事に当たっちゃまったなあ」

「ああ、ほんと最悪。恨むぜペリーコロさんよ」

氷の束袋で何とか老化をしのぐもペッシは復活してしまったようだ

だが、不思議な事にその目に殺意はない

あるのは決意の目だ

「野郎何かに目覚めちまったみたいだぜ？」

「そりや大変。んじゃ、今度こそ本腰入れますか」

「…アイ・アイ・サー……」

## 第16話 フニクリ・フニクラ⑤

「あらよつと」

「ほいさつと」

「うおおおおおおおー！」

釣り針に恐怖を抱いたのは2人の豊富な人生でも初めてのことであろう

「老化が進んでいる以上、まだ兄貴は生きています！なら、オレも生きて任務を遂行する  
！」

「若えーんだから、たまには仕事サボってみな！」

釣り針は物体をすり抜けて相手の体に食いつく

ホル・ホースの推測が目の前で現実となつていってしまった以上、岩陰に隠れることもま  
まならない

「列車から狙撃できるか？」

「無理だ。射程距離が足りない」

「プロが弱音吐いてんじゃねーってんだ、まったく……」

ふと頭に思い付いた名案も使えないようだ

だが、無理もない状況でもある

敵は360度どこからでも攻撃できるといつても過言ではないのだ

「それじゃ、お前は弱音吐かずに奴に一撃当ててみな」

「それじゃ、やってやらあ」

『キャプテンビヨンド』は砂をつかみベッシへと思いつきり投げつけた

スピードは風速ではなく時速100km

この速さで砂をかけられては堪ったものではない

「うぐえー！」

「よし！一撃！」

「お見事」

喜びもつかの間

砂攻撃を受けたベッシだったが受け身を取りすぐに起き上ってしまった

2人から笑顔が消え、消沈した顔となる

「近寄ってこねえ分、接近戦お得意のスタンドと踏んでいたんだが……」

「見た目で判断するなよ坊っちゃん。周りが狭く見えちまうぜ？」

「ふっふっふっふ………周りが見えてねえのはお前だ！マヌケめツ！」

「！」

不覚

ボニートの中指の先に釣り針が食い込んでいた

釣り針は手の中をどんどん進んでいき、手のひらと肘の間部分にまで到達する

「ちきしよつ、このつ、取れやがれ！」

キャプテンビヨンドが糸を引っ張り、無理やり引き抜こうとするも効果はない

それどころか遂に肘に到達してしまった

「ホル・ホース！『皇帝』だッ！『皇帝』で糸をぶち抜けえ！」

「おう！」

弾丸を2発

糸へと発射される

糸が切ればこつちのもの

ボニートはそう考え、冷や汗を流しながらも笑みを浮かべていた

しかし、それ以上に笑っている人物がいる

ペッシだ

「ぐおおおおおおお！」

弾丸が糸に触れた直後、ボニートの体全体に高圧電流のような痛みが伝わった

「ボ、ボニート!?!」

「オレの糸はそいつの神経とすでに絡んでいる。そんな状態で撃ちまったらその分の痛みはすべて！こいつの体全身へと行きわたるッ！ミスタと同じ手に引つ掛かったワケだ……」

「ちっ！クソガキめ！」

ホル・ホースは『皇帝』の銃口をベッシへと向けようとする

だが、それを遮るようにポニートの手が『皇帝』を掴んだ

「やめとけ、ホル・ホース」

「何抜かしてやがる！今、奴のスタンドはお前の腕に食い込んでいて、防御はできねえ！この状況だ！この状況で奴に撃てば必ず殺れんだぞ！」

「それは奴も一緒なわけさ」

「どういうこつた？」

「これを見てみな」

ポニートは首を指さした

釣り針が首に到達している

もうここまでこれば喉を搔つ切ることまできる

いや、頸動脈に穴をあけることも難なくできるだろう

「ホル・ホース。この勝負お前は手を出すな」

「……勝てんだろーな」

「じやなきや、こんなことは言わねえさ……おい坊っちゃん！」

「何だ！」

「テメーの手並み、いや見事なもんだったぜ！坊っちゃんと侮って悪かったな！」

「……………」

褒め言葉だというのにペッシの顔は不審に満ちている

まあ、ギャングの世界において褒め言葉ほど疑わしいものはない

「だからよー……」

「！」

釣り針が動き出し、喉元へと切っ先を向ける

だが、時すでに遅し

『キャプテンビヨンド』はボニートを掴んだ！

「V i e n n i   q u i i ! !」

座標は北緯42度東経10度

ギャングにとっては皮肉な場所だ

ピアノーザ島の壁は高い



## 第17話 フニクリ・フニクラ⑥

「あぶつふああー！」

投げに投げ飛ばされた場所はピアノーザ島

その昔はマフィアの重役・幹部の流刑地として良くも悪くも盛んだった島だ

1998年の閉鎖以来、島はめつきりとおとなしくなってしまった

だが、近年では受刑者達に「社会更生プログラム」という形で、ホテルの従業員だったりして島の発展に努めている

「おー、イテテ。飛ばしすぎたかなあ？」

だが、ボニートはプログラムを受けるために来たのではない

ペッシと戦うためにここに来たのだ

「へっへっへ、流石のやつもここまで離れちゃ、どうともできんだらうな」

首筋を触り、釣り針がなくなっただことを確認する

糸さし指を舐め、空に向けた

風速4・5mの向い風

灯台に掲げられたイタリア国旗は悠々と広げられている

「じゃあ、どーれ」

小岩を軽くつかみ、狙いを定める

目指すはイタリア国鉄フィレンツェ行き超特急付近

「手始めに……アンダースロー」

~~~~~

「ちきしょー、小僧め！」

「ふん！」

ボニートがいなくなったとしても戦いは続いていた

『この戦いに手を出すな』

ホル・ホースは相棒の言葉を守り、ペッシと戦っているがお構いなしと言わんばかりに釣り針が襲ってくる

交わり続けながら『皇帝』を使い、釣り針を弾き返しているがこれでは埒が明かない
「おい！ボニートは幾ばくか認めたみてえだが、オレから見りやてめえなんぞまだまだ

ガキだぜ！」

「ヘッ！だつたら少しは反撃してみろ！」

「やってほしいのか？」

弾がペッシの頬を掠める

頬から流れ出る血に目を見開き、咄嗟に岩に隠れるもホル・ホースの銃口が動くことはない

『皇帝』はホル・ホースの意志で自由に弾道を変えられることができる

岩ぐらゐの障害物などものともしないだろう

しかし、もう撃つことはない

彼はこの戦いに手を出す気はさらさらないので

「自慢の釣り針はどうした！落ち込みはここだぜ！」

暗黒街で名をはせているホル・ホースにもメンツというものがある

ただ手を出さないといいのは腑に落ちないのだろう

いくらボニートの釘打ちがあつたとしても、せめて挑発の一言二言は言わないと気が済まない

「うるせえ！今に見てろカウボーイ！」

挑発にペッシは答えるも、動く気配はない

頬を掠めたのが効いたようだ

「チッ、膠着状態ってか」

膠着状態

ボニートの言葉に従う状況なら、これほどありがたいことはない
本当ならこの状況はすぐに打破できる

いや、それどころかボニートがいなくとも一人でペッシを撃ち破る自信はある

「(だが、それじゃダメなんだよ。奴を、そんな……安っぽい野郎にするワケにや)」

ホル・ホースはあの時、『手を出すな』という言葉に疑問を投げかけた

しかし、当のボニートはそれに対し即答

了解の返事も頷きもしなかったが、だからこそ信頼したのだろう

『手を出すな』という言葉を

「(いかねーんだよ)」

動き出したのはホル・ホース

ペッシはその瞬間を見逃さなかった

「かかったな！」

一歩踏み出したその瞬間、ホル・ホースの脚に痛みが走った

釣り針はすでに腹部に到達している

「どつちに出るか迷ってたが、大当たりだ！」

『ビーチボーイ』の釣り針はどこかに引っかけることができ、それを餌として触ったものの体に侵入することができ

ペッシが餌としたのは、ホル・ホースの右足の下にある小石

流石のホル・ホースもそこまで目が行き届かなかつたのだろう

届いていたとしても注意していたかどうかは別だが

「もう一人のポニートって野郎は、逃げちまつたみてえだが……ホル・ホース！ 覚悟してもらおうぜ！」

「……………」

釣り針が胸部に達したというのにホル・ホースは微動だにしていない

それどころかペッシをずっと見ているだけ

……『殺気』を無くして！

「おい、小僧。勘違いを3つ以上してるって自覚があんなら注意しろよ」

「？、どういうこつた！」

「まず、だ。奴は逃げちやいねえ」

ホル・ホースの人差し指が空へ向けられる

「そして2つ。オレは覚悟なんかしねえ」

「なんだと!？」

「よく見てみな、汗かいてるだろ？」

「？」

「分かんねーようなら説明してやる。プロが汗をかく時は何にも気にしちやいねーってこつた。分かったか？オレは汗をかいている」

『皇帝』を撃つとき

決まって彼は汗をかくことはない

かいていたとしても、クーラーの効いた部屋に入ったように汗が引く

その昔のクライアントにも、その精神を見抜かれた

ホル・ホースの中指が地平線を指す

「さらに3つ。オレは負けるほうには絶対つかない主義だ。そして今、オレはお前に対してしている」

「……………」

ホル・ホースの親指がどこという訳ではないがどこかを指す

「最後に4つ目」

ペッシが固唾をのみこむ

一体何を言うのだ、と

最後に何を言うのだ、と

「拳銃は釣竿よりも強し！」

『ビーチ・ボーイ！』喰らいつけエエエエエエエエ！』

胸部通過！

首部通過！

だが、ホル・ホースは汗を流す！動揺しているのは明らかだ！

それなのに………笑みを浮かべているッ！

「さあ、小僧やってみな！あとちよつとだぜ！」

「なめるな！」

釣り針が脳に到達する……

が、その瞬間！

「ふぐあー！がつー！ヴあはー！」

多数の小石がペッシの胸部頭部に雨あられと降り注ぐ

ペッシは何が起こったのかは理解できている
ペッシはなぜこうなったのか理解できていない

〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜

アンダースロー・ストレート（外角低め）・カーブ・サイドスロー……知ってるやつは
全部投げたが、はてさて何発当たったものか

第18話 フニクリ・フニクラ⑦

「何発当たった？」

「見積もって17発」

「ええー、56個投げたんだぞ」

「下手くそ」

帰還したボニートを待っていたのは、ホル・ホースの軽口だった

遠く見えない相手に17発も当てたのだ、少しは評価すべきだろう

「そいじゃ、乗客が無事かどうか見てくるわ」

「おう、頼んだぞ。……………さて」

小石はペッシの体奥深くに突き刺さった

胴体から血はだらだらと流れており、地面に血だまりを作っている

一番の痛みは首を骨折したことだろう

「う、グ、おとおおああああ」

「やめときな、ペッシ。死に際はなるべく綺麗にするのが、俺たちギャングの嗜みってや

つだぜ」

「うる、せ」

ペッシは懐から『亀』を取り出した

亀についてボニートはまったく何も知らない

だが、瞬時に理解した

あれは大事なものなんだろう、と

「ペッシー！その亀をどうする気だ？」

「どうせ、死ぬんなら……それこそためえの言う通り『綺麗にする』つつーんなら……この

亀は叩き落さなきゃならねえ」

「……………」

ゆらりとキャプテンビヨンドが現れる

叩き落とす物騒な言葉を聞いたからには、ボニートもおとなしくはしてられない

何としてでもペッシを止めなければ、とどめを刺さなければならぬ

「だけど、そりゃあ……………ブチャラティの前でやってこそだからよォ」

ペッシは振り上げた手をゆっくりと落としていった

亀をポトリと落とし、その手に釣竿が現れる

ひびだらけの釣竿は今の彼の精神を表しているのか

「プロシユート兄いは……言ったんだッ！『食らい付いたら最後、スタンド能力は解除しな

い』とー」

首の骨が折れようと、体に幾ばくの石が刺さろうとも

もうその姿は「不細工」の一言に尽きる

それでも彼は守るのだ

兄貴の言葉を

「よし、そこまで言うんならやってやらあ！俺の投げとお前の釣り！勝負だ！」

「ふんー」

キャプテンビヨンドの拳にビーチ・ボーイが喰らいつく

防戦一方はボニートのやり方ではない

先ほどと同じように石を投げるだけ投げ、ペツシの体に当ててゆく

しかし、ペツシは怯むことなく釣り針を更に食い込ませる

ボニートは戦法を少し変えることにした

体全体に当てるのではなく、指を集中的に狙う

「なっ!? くおおおおお………」

ペツシの左手小指・右手中指が赤くはれ上がり、ぶるぶると震えだした

効果はあつたようだ

「ちっ、もう少しイカれると思ってたんだが……」

「読みが…甘えんだよ！」

「うおッ!？」

釣り針は肩の部分まで来ていた

ペツシの目的は首喉を搔つ切ることだったが、指への執拗な攻撃に一旦中断
そのままボニート釣りを釣り上げ、自らのもとへと引っ張る

「今だ！その喉元を、搔ッ！切る！」

釣り針がボニートの首へと伸びる

まさに、万事休す

さあ、どうする？

「そういうのは、てめえの首で試しな！」

釣り糸を引っ張り、ボニートはペツシを逆に釣り上げる

急接近するペツシ

その目に見えたのはキャプテンビヨンドの左拳

驚愕の表情がボニートからペツシに移った

「ビーチ・ボーイ！地面に食らい付け！」

「もう遅い！」

キャプテンビヨンドが遂につかむ

掴んだ相手には容赦しないのがボニート

思いつきり地面に叩きつけ、追い打ちにパンチを一発
ペツシの目から光が消え、口はだらしなく開いている

「……残念だったな、ペツシ。俺の『勝ち』だ」

敗者にその言葉は届いたのであろうか

何とも言えない勝利宣言

24歳のベテランと推定年齢30歳以上の殺し屋が、たった一人の新入りの暗殺者相手に苦戦を強いられた

今、ペンシルバニアでにやけ面を浮かべている上司には聞かれたくないことだろう

『食らい付いたら最後、スタンド能力は解除しない』……か、てめえはよくやったよペツシ。バカみてえに一つ二つの言葉をそこまで貫き通したんだ。恥じるこたねえぜ？むしろ誇りやいい、堂々とな」

フィラデルフィアで地元のファミリーとバカンスを楽しんでいる上司は人を褒めることがまず無い

それは、ボニートも同様である

同様というよりも学んだというほうが正しい

故に褒めるときは思い切り、褒めちぎる

褒められる＝認められたと思っても問題はない

「墓は作ってやんねーぜ。そんぐらいはお前も『覚悟』してるだろ？」
終わった

ペツシからは呼吸の音さえも聞こえない

足元によって来た亀を拾い、ボニートは戦いの場所に背を向けた

だから、甘いのだ。ボニート・E・ゼルビーニ。

ペツシは本当に死んだのか？ 確証は？ 根拠は？

その自信は一体どこから来ているのだ？

「……………」

「!？」

『いったん食らいついたら腕や脚の一本や二本失おうとも決して「スタンド能力」は解除しない』

ペツシとプロシユート兄貴が守った、この言葉

ボニートは褒めた。確かに認めたッ！

だからこそ、心の底のどこかで甘く見ていた！

ボニートは『言葉』で理解しただけであった！

「……………」

「うおお!!」

釣り針はもう心臓にも喉にも行くことはない

うまく引つ掛かったとしても肉片が一つ千切れるだけ

「……………」

それでもペツシは黙々と釣竿を引つ張る

せつかくの当たり目を逃がすわけにはいかない

くいつくいつと釣竿を小刻みに引つ張っている

良い具合に『直線』なのだ

ビーチ・ボーイの釣り糸が直線になった時、それはペツシがやると決めた時！

「!」

ボニートもスタンドを繰り出し、小石を一つ拾い上げた

腹に刺さっている釣り糸を上へと思いつき引つ張る

浮いたのはペツシ！

「見事だよ……お前は。だから綺麗にやってやる」

「……………」

キャプテンビヨンドが投げの体勢に入る

ボブ・フェラーを彷彿とさせるその球種はスライダー

ボニートが最も得意とする投球だ

「……………」

もはや声も出すことも叶わない

悲鳴も断末魔も、だ

ペッシはただ冷静に自分に向かってくる石を見つめている

もつと正確に言おう

彼は石の向こう側のボニートを見ているのだ

たとえ鳩尾に穴が5cmできたとしても

釣竿が崩壊していき、その手からなくなったとしても

スタンドを解除することはない

「……兄貴イ、俺あやってやっただろ？」

もう、マツ子マンモ野郎モなんて呼ばねえでくれよ

なあ、プロシユート兄貴

「……」

「どはっ」

安堵の息をつき、地面に座り込む

今まで溜めていた分の汗が浮かび上がった

体中のいたるところにできた傷口に、その汗が入り込み痛みを刺激させる

「……はあ、はあ。『やっ』だ。『やっ』……勝てたな」

『やっ』か

相手を侮つたにしては高すぎるかもしれないが、これぐらいが丁度良いのだろう
傷口を押さえながらよろよろと立ち上がり、ペッシへと近づく

「良いもん教えてくれたなあ、ペッシ。だが、お前にや……………」

「いったん食らいついたら腕や脚の一本や二本失おうとも「スタンド能力」は解除しない」

「『ブツ殺す』と心の中で思ったならッ！その時ステに行動は終わってるんだッ！」

「かつこよすぎるぜ」

第19話　かくも美しき我らの常識

「本当に終わったって感じだな」

「見たのか、趣味悪いーぞ」

2人の顔色は晴れやかとは言い難い

そう、これは何度も言うように『何とも言えない勝利』なのだ

いつもの2人なら両手を広げ「やった！」の一言ぐらいはある筈だが、それも無い

「乗客はどうだった？」

「ぴんぴんしてるとは言えないが、その内回復するだろう。それに向こう側も決着がつか

いたみてえだしな」

「そうかい……………」

思えば老化が止まっている

命綱だったロックアイスも溶け、束袋の中で水の塊になっていた

「あーあ、こんなに疲れたのは初仕事以来だ」

「まったくだな。まあ、スピードワゴン財団病院のリハビリよかマシだな」

スピードワゴン財団

今まで学校に行ったことのないボニートでもその名は耳にしたことがあった

薬学医学に関してでは世界トップクラスの権威を持つ財団

患者に差をつけず公平に診療することで有名だが、日陰者のホル・ホースが自ら進んでいくような場所ではない（無論、ボニートも日陰者である）

「前々から気になってたんだがよお、お前本当に何したんだ？」

「ヒヒヒヒヒ、守秘義務つてやつだ」

「……深くは聞かねえよ」

その判断は賢明と言えよう

ホル・ホースは退院したというよりも『取引』をしたというほうが正しい

もつともそれがどのような内容なのかは分からないが…

「俺も一つ気になってることがあるんだが、いいか？」

「何だ？」

「その亀なあに？」

ボニートの足元に亀が寄ってくる

とりあえず「大事なもの」とは認識していたが、実際のところ何なのか詳しいことはわかっていないのだ

「ブチャラティのもの……ってのは分かってんだけど、さっぱりだ」

「亀の密輸？」

「暗殺者をわざわざ送り込んでも欲しい代物か？」

「いやあ、この甲羅の輝きといい。尻尾の色艶、たまりませんなあ」

「ゾーフィリアか……初めて見たぜ」

「バカ。動物愛護と言いやがれ」

亀がボニートの手に戻ってくる

見れば見るほど不思議な亀

甲羅にカギのような形の模様があるが、持ち主の趣味だろうか

とてもじゃないが理解できない

「嫌な目つきだ。俺あ嫌いだぜ、コイツ」

「アジアじゃ、これを精力剤代わりに使うそうだがな」

「マジか、では早速……」

「待ってくれないか」

後ろから手が伸び、亀が取り上げられる

ブチャラティだ

プロシユートとの戦いが後を引いているのか、疲労の色が見える

「お久しぶりだあな、ブチャラティ」

「……ああ、そうだな。ボニート・E・ゼルビーニ」

フルネームで呼ばれるあたり、ブチャラティのボニートへの信頼は高くないようだ
その事に勘付いたのか、ボニートは肩を竦める

「ほーん、コイツが噂のブチャラティか」

「あんたは？」

「俺か？俺はホル・ホース。縁あってボニートの…護衛？付き添い？まあ、そんなところ
だ」

「そうか。俺の名前はブローノ・ブチャラティ。なり立てだがパツシヨーネの幹部だ」
自己紹介を終えたホル・ホースとブチャラティ

握手こそしないものの、互いの立場というものは説明できただろう

「男同士のむき苦しい挨拶はそこらへんにしといて、だ。ブチャラティ、仕事の話を進め
ようじゃねえか」

「俺は…いや、俺たちは今『ある人物』の護衛の任務に当たっている……」

「……………」

「そしてその人物は…」

ボニートたちの視線がブチャラティの手へと向けられる

亀が目の前に来たからだ

「この中にいる」

「!?」

「うお!」

~~~~~

「ボスの娘!?お前、よく引き受けたな」

「自分でも驚いてるさ。これが幹部としての初仕事だからな」

亀のなかは意外と快適であった

少し湿っぽいのが気になるが、ふわふわのソファ・冷えたジュースがそれらを打ち消してくれる

ボスの娘、トリツシユ・ウナ

パツシヨーネのボスは、とにかく謎に包まれている

探ろうものなら社会的に抹殺、人々の記憶からも消し去られるという話もあるのだから恐ろしいものだ

それも今日の前にいるのは、そのボスの娘

へ々に動けば、明日から下水道の水を永遠に飲まされることになるだろう

「で、お前らは今のところ何処に行くつもりだ？ フィレンツェ行き急行に乗った以上、大体の推測はつくが……」

「ヴェネツィアだ」

「ヴェネツィアか……少し遠いな」

「ああ、そこでできるだけ早い足が欲しいんだが……」

「ふむ、なるほど」

ポニートはソファ腰深く座り、どこか遠いところを見た

頭の中に残っている地図の記憶を最大限掘り起こしているのだ

副業とはいえ運送業を営んでいたおかげであろう

「(アヴェルサの駅は途中で見たから、今の場所は恐らくフォルミアを過ぎたか手前かのどっちかだろう。そう考えると……うん？ 俺たちは今どこにいるんだ?) なあブチャラテイ、そういやここってどの辺りうえ!？」

亀が思いっきり揺れた

イタリヤはヨーロッパの中でも地震が多い国だ

様々な原因が考えられるが、一般的にはユーラシアプレートとアフリカプレートの境



目がイタリヤに多く、断層が見受けられるのがその証拠である

他にも、シチリア島からアトラス山脈（正確にはカラブリア半島から）が海溝とつながっており、それが沈み込むことによつて……………

「トラツクが停まったのか？」

「おい、ミスタ！天井見張つてたよな？運転手に何が起こつたんだ!」

「え!?!い、いやあく俺も見るのは見てたんだがなあ、だけど見えねえような気も知れなくて…」

要はただの人災のようだ

~~~~~

「俺らはお客様だあぞ！何で車探しなんかやらなくちゃならんよ」

「黙つて地図見るポニート。サービスエリアまでどれくらいだ？」

「地球を5週半できる距離!」

「お、見えてきた」

「……チクシヨウ」

もはや、幹部の威厳はない

護衛のためとついてきたジヨルノ・ナランチャ・アバッキオ・フリーゴ・ミスタは疑問の目を向けている

「クソ、いやな目で見てきやがつて俺はこう見えても年収5000万は軽くこなす男なんだぞ」

「『こう見えても』ってことは、少しは自覚がある訳だ。年収5000万のほとんどがドラッグマネーの奴への視線にや、まだ優しいほうだろ」

「お前はどつちの味方だ!」

「収入と給金が比例して多い奴の味方」

「守銭奴!資本主義!拝金主義!」

サービスエリアに到着した一行は車を盗もうと塀を超えようとする

そこに待ったがかかった

ブチャラティチームの中でも博識な人物パンナコッタ・フリーゴだ

彼の主張は「車を盗まれれば通報と警察のコンピューターで1時間と持たず捕まる」というものだ

だが、反論の意見も出てくる

ミスタの主張では「またヒッチハイクをしてモタモタするほうが危険だ」になるそう

だ

年長者のアバツキオはどっちともとれぬ発言

ナランチャはブチャラテイの意見を聞こうというが、今ブチャラテイはボスの娘のそばにおり、迂闊に動くことはできない

「ああ、話長くなりそうだから便所行ってくる」

「早く戻って来いよ」

ホル・ホースはこの論争に巻き込まれるつもりは無いようだ

「ボニートさん」

「うん？」

意外な人物からボニートの名前が呼び出された

ジヨルノ・ジヨバアーナだ

ポルポを暗殺しようとした第一容疑者の一人

しかし、ボニートにそういったものへの複雑な感情はなかった

ポルポはペンシルヴァニアでよろしくやっているし、そしてジヨルノはそのことを知らず「自分が仕留めた」思っている

現状ではポルポ・ボニート側が勝ちの状況なのだ

「警察に追われず、それでいてスピードのある移動手段……知っていますか」

「……………生憎だが、運転に関しては公的にやってきたからな。この業界じゃ珍しく免停歴は0な筈だぜ」

「そう、ですか」

とはいえ、素っ気なくあしらうぐらいは許されるだろう

そもそも、ボニート達はいくら任務といえど、「客分」の立場

深い口出しは双方ともに御法度だ

『『100台』……『100台』盗めば、どれに乗っているか判別するのは難しいでしょう』

「……?」

『ゴールド・エクスペリエンス』！

ジヨルノのスタンドが車に攻撃を始めた

見積もって10台くらいか

それらの車は「カエル」へと姿を変える

これに目を見開いたのはボニートだ

『ゴールド・エクスペリエンス』の能力は植物をはやす能力だと認識していたからだ

「残った車に乗れば、探すのに10倍の時間はかかります」

「な、なるほどよー」

「確かにサツの搜索網を潜り抜けるにや最適か……エルピディオの泣き顔が拝めるな」

イタリアにこうして怪事件が、また一つ生まれた

列車ほどではないだろうが、何かしらのコラムには書かれるだろう

題名は「またはや珍事件!?車の集団失踪」となるか

「ブチャラティに伝えろ!車が手に入ったとな」

アバツキオの指示に、ジョルノは手に持った亀に顔を向けた

残った4人はセキュリティの甘い車の選別に取り掛かる

「よし、それじゃあ俺も一服しよう……か……な」

ぎゅるるるるるるるるるる!

ボニートの腹から素晴らしいほどに低温の重厚なハーモニーが流れた

急な事だったのか腹を抱えるボニート

ああ、面白すぎる

「何で……このタイミングでえ、家から出るときは、ちゃんと用は足す派なのに……ぐえ」

そこでボニートの頭にある言葉が浮かんだ

自分の相棒が言った最新の言葉だ

く便所に行つてくる」

「うおおおおおおお！あの野郎！これを見越してたつて訳なんだな！」

サービスエリアに猛烈なスピードで駆け込む

途中で客にぶつかったが、彼の悲壮な顔に怖気づいたのだろうか、道を素直に譲つてしまつた

無論、行きつく先は「t o r e t t a」の文字

「ホル・ホース！今すぐ出てこい！緊急事態だ！敵がやつてきたぞお！」

「ハッ！今さら気づいたつて遅いぜボニート！残念だが、俺は最後まで満足してから出るようにしてんだ！テメーは後20分間そこで悶絶してな！」

「に、20分!?おい、イタリアの憲法にはな、5分以上のトイレ占有禁止が明文化されてんだぞ！」

「だつたら治外法権適用してやらあ！俺の生まれた土地にはなあ、トイレに入つたら満足するまで籠つてよしとなつてんだ！どうだ参つたか！」

「ぐぬぬぬ……」

皆様、氷の食べすぎにはご注意を

特にロツクアイスなど

第20話 お気の召すまま

結果としてみるならば、ボニートは無事に用を足すことができた

サービスエリアの店主から「客の迷惑になるから、奥の店員用トイレを使ってくれ」と言われたからだ

「気ン持ちよかったあゝ、すつきりしたあゝ」

それは何より

店から出たボニートは、真っ先に喫煙コーナーで佇んでいる相棒へと詰め寄った

「おつ、ボニート。やつと出てきたか」

「なアゝにがやつとだ。便意まで護衛しろと言った覚えは無えぞ」

「追加料金に含めとくぜ」

便意の護衛料は相場からして4000円ぐらいだろう

2人はブチャラティ一行が車を盗もうとしている現場へと出向いた

一歩踏み出したその瞬間、嗅覚が妙な刺激臭を感じした

匂いのもととは店の裏側

火柱だ

火柱が煌々と立ちあがっている

「火事か!？」

「いや、違う。……………ありやあ……」

火柱を背景にある人物が歩み寄ってきた

金髪に赤い服

ジョルノ・ジョバーナアだ

「暗殺チームか……」

「だろうな。もう終わったみたいだが……」

ボニートは急いで自動車を動かそうとしている一行に詰め寄った

「車は出せるか?」

「え? あ、はい。いつでも動かせますが……」

「だったら上出来だ。ジョルノが帰ってきたと同時にすぐに出せ。そろそろ客が出てくる頃合いだ」

~~~~~

現在の状況をお伝えしよう

亀のなかにはブチャラテイ、トリツシユ、アバッキオ、ナランチャ・ホル・ホース、ボニート

車に出ているのはジョルノ（運転係）、フーゴ、ミスタ

サービスエリアを出て4〜5時間は経過した

もう、敵の尾行の気配は全くない

「場所は今このあたりだから…迂回せずに直進すると…確かこの道は整備中で通れないから……」

「なあよく、隣でブツブツ喋んのやめてくれねえか？敵でもねえのに、気がソツチに行っちゃまう」

「ん、そうか？」

ボニートは地図とにらめっこしていた

亀のなかは大体のものがそろっている

本棚には漫画が沢山あったが、その端っこにこの地図帳があった（しかも2002年調べ！）

ヴェネツィアへの最短ルートを調べるにはうってつけの代物だ

「ボスから新しい指令が来た。アバッキオ、ダイニングチェアアのそばに来てくれ」

ブチャラテイの口から出た「ボス」の言葉

構成員ではないホル・ホースもその言葉に目を向けた

だが、何故かボニートは動かない

目はむけているようだが、ソファに深く腰掛けたままだ

「ムーディ・ブルースで10時間巻き戻せ？　どういうことだブチャラティ？」

「分からない。文面から何も何か裏があるとは思えない。とにかく巻き戻してくれ」

ムーディ・ブルースが変形しだした

身長は縮んでいき、大体140cmぐらいのところまで落ち着いた

顔も構成される。皺の具合から見て初老の男性といったところだろう

その正体にいち早く気付いたのは、ソファで静観していたボニートであった

「ペリーコロさん……」

そう10時間前亀のなかにいたのはヌンツイオ・ペリーコロであった

イスの背もたれの上にトンと立ち、こちらを向いた

『君たちに最後の指令を伝える』

『このような形にしたのはありとあらゆる盗聴手段から防ぐためだ……トリツシュをボスに引き渡す方法なのでな』

『ヴェネツィアに着いた時、この写真にある彫刻の中のO A — D I S Cを手に入れよ！』

そこまで言うのとペリーコロは写真をライターで燃やし始めた

証拠という証拠は一切残さないということだ

ナランチャが慌てるが、ブチャラティの指示によりムーディ・ブルースを一時停止  
写真の場所は「国鉄サンタ・ルチア駅前」であることが判明した

『最も重要なのはトリツシユとボスを安全に、そして確実に会わせること！この任務で  
優先すべきはそれだけだ！』

『……それでは君たちの無事と任務遂行を心から祈ろう、わしは今までボスのおかげで  
充実した人生を送ることができた』

『証拠は何一つ残さない……わしという最後の証拠も、だ』

ペリーコロは懐から拳銃を取り出した

おもむろに自分に向ける

その表情に『覚悟』はない

あるのは『若者への期待』と『安心』の表情のみ

ガアアーン！

「ペリーコロさん……」

ブチャラティはペリーコロから何度かお世話になったことがある

ポルポの部下であったときには親身に相談してくれたり、家に泊めてもらうこともあった

その心中察するに余りあるだろう

「アバッキオ、ムーディ・ブルースを停めてくれ」

静々とした声がムーディ・ブルースの解除を静止した

ボニートの声だ

ゆるりと立ち上がり、のそりのそりとペリーコロの元へと近づく

ボニートもペリーコロに恩を感じる内の一人だ

ポルポの陰険悪質極まりない仕打ちから、よく庇ってくれたからだ

それだけではない

不審死した父と母の葬儀を最初から最後まで取り仕切ってくれた人物でもあり、捨てられたボニートをポルポに拾われるまで探してくれていたとの話もある

「……………」

ボスのため、ひいては組織のために自ら死を選んだ

ヌンツイオ・ペリーコロ、『パツシヨ―ネ』の歴史にその名は深く刻まれるだろう

「ありがとよアバッキオ」

「……………ああ」

ムーディ・ブルースの解除された

もうペリーコロの姿を、恩師の姿を見ることはできないのだ

それに見ようものならペリーコロの遺志を踏みつけることになる

ペリーコロもまたボスと同じく、姿を探してはいけない人物になってしまった

「さて！ブチャラテイ、辛気臭いのは野暮だ野暮。次の仕事について話し合おうぜ」

「そう……だな」

そうだ

ここで止まってしまう事を、ペリーコロは望んでいない

## 第21話 ハイウェイ線上は戦場にて①

「良いか？お前たちはこのルートを迂回して、次の地点で高速道路に乗れば……」

「いや、ちよつと待て。ここからの高速道路は耐震整備をしている筈だ。渋滞で上手く動けなくなるぞ」

「何？うくん……よし、じゃあこの下道を通れば……」

時間は深夜2:00

幹部クラス2人の打ち合わせにナランチャはウキウキしていた

たまに見ているドラマのワンシーンを重ねているのだろう

アバツキオとホル・ホースはソファでゴロゴロとしており、トリツシユは皆とは離れ、イスで俯いている

「なら、ここからはどうだ？多少の渋滞はあるが、パーキングエリアを抜ければすいすい行けると思うが」

「……そうだな。時間は取られるが、一番無駄のないルートだろう」

話は纏まった

一行が通るルートはこうだ

フィレンツェに入る前に高速道路から降り、サンマリノへ向かい、アドリア海に沿う形でヴェネツィアに行く

おおよそ2時間ちよいかかる程度の距離だ

「そこで、だ。俺から提案があるんだが……」

「何だ？」

「その前に確認。お前らの任務はヴェネツィアで終了するんだよな？」

「そうだ。とはいえ、娘をどこまで連れていくかは別だがな」

「よし、分かった。それじゃここは安全を期しに期して……二手に分かれるってなあどうだ？」

「二手に？……構わないが、いったい何故だ？」

「俺の推論だが……敵はお前らの目的地がヴェネツィアだつてことに気づいてるかもしれねえ。いや、もしかしたらこの車を追っかけてるかもしれないねえな」

「……………」

「あくまで推論だ。確証は無い。だが、暗殺チームはあのロシア系ファミリーの連中もビビらせる程だ。警戒しておくに越したことはねえ。それに……」

地図のある部分に指を指した

ヴェネツィアからちよつとずれた所をだ



「ヴェネツィアに陸路で行く方法はただ一つ。このリベルタ橋だ」  
リベルタ橋

全長3, 58 kmある橋で、建設当初は「リットルオ橋」であった

しかし、第2次大戦終了後にファシズムからの解放という意味を持たせ、自由を意味する「リベルタ橋」となる

横に鉄道橋も見られ、ヴェネツィアの風景の一角を担っている

「二手に分かれる事には賛同しよう。だが、お前達は どうするんだ？この時間帯に車を  
用意するのは、簡単なことじゃ……」

「まあまあ、そこは任しときなさいって。俺の『ねごしえーちんぐ』で何とかすつからよ」  
「……………そうか。で、メンバーはどうする？俺のチームから何人かやってもいい  
が……」

「ご勘弁。いくら同僚の部下でも、気心の知れぬえ奴に背中任したかねえよ」  
アバッキオ・ナランチャに安堵の表情が戻る

気心の知れない奴に前を任せられないのは2人にとっても同じ事だろう

「俺はホル・ホースと一緒に別のルートで行く。少し時間はかかっちゃうが、ペリーコロ  
さんの『安全に』って言葉を守るんなら、これが一番最適のはずだ」

「なるほど……なら、どこで待ち合わせる？」

「ヴェネツィア駅の近く。パパドポリ庭園、ノーヴォ川沿いのどこかで」

~~~~~

「ん、じゃあ先行つといてくれ。後からゆるりと追っかけるからよ」

「ああ、パパドポリ庭園で」

車から降りたボニートとホル・ホース

ブチャラティチームが見えなくなったぐらいで、ボニートはごろんと地面に寝転がった

い 辺りを見回してみたが、車が来る気配はなく電灯の光がぼつんと照らされているぐら

「俺の経験上だがな？ある特定の人物を護衛する場合、戦力の分散つてのはNGだ。それに『安全』でもない」

「それぐらい俺も知ってるよ。というか、ブチャラティも知ってる筈だ」

「はあ？なら、どうして……」

「急用別件その他諸事情」

寝返りを打ち、相棒に背を向ける

呆れの溜息を吐き、ホル・ホースは煙草を吸い始めた

ボニートは物事を深く、ふかしく考えるときは寝転がる

曰く「自分の世界に入れるから」という謎理論だ

「(やつと合点がいったぜ。だが、どこだ？ 奴はどこに……………)」

「おー」

相棒の声にボニートは思考を中断し、起き上った

真つ暗の高速道路に光る2つのライト

大きさからしてトラックだろう

「ちようど良い。何運んでるかは知らねえが、潜り込もうぜ」

「……………3分遅い」

「？」

目を凝らしてよく見てみよう

運転手がフロントガラス越しに、こちらに手を振っているように見える

それもそのはず、なぜならその運転手は……………

「ボニートさん！ホル・ホースさん！迎えに来ましたよお！」

ボニート運搬会社の事務処理係、グーデンドルフ・マツケシユタイン

だ
今まで雑用しかしていなかったせい、外での仕事ということで少し興奮気味のよう

第22話 ハイウェイ線上は戦場にて②

「ボニートさん！僕、免許持ってないけど運転できましたよ！褒めてください！」
「ん？バーカ」

ボニートが特注したイヴェコは、様々な改造が施されている

後部座席に、防弾ガラスにランフラットタイヤなどなど

荷台に銃器を詰め込んでおけば、装甲車と何ら変わらないレベルだ

「ホル・ホースさん。ボニートさん、さっきからあんななんですよ……」
「急用別件その他諸事情、だだよ」

「？」

グーデンは助手席、ホル・ホースが運転、ボニートは後部座席に寝転がっている

一行はアドリア海を目指しながら高速道路を走っている

アドリア海沿いにヴェネツィアへ向かおうとしているのだ

「(どう考えても……やっぱりだ。だが……いや、待てよ)ホル・ホース」
「ああ？」

「少し進路を変える。次の分かれ道、左のところを右に曲がってくれ。」

「何言ってるやがる。そっちはミラノ方面だぞ」

「良いから行ってくれ」

「……………はいよ」

あと少しで左に曲がるところだったが、急カーブし右側の路線に入る

グーデンがその衝撃でサイドガラスに頭をぶつけてしまったが、大して問題はないだろう

それよりもボニートだ

ペリーコロの自殺を見てから何かがおかしい

「（親父様よお、これがアンタの言う『真実』なのか？）」

~~~~~

「よし、ここで停めてくれ」

「……………おい」

「ん？」

「てめえ、任務ほっぽり出す気じゃねえだろうな」

ブチャラティと別れただけでも大問題だ

彼らの任務は「ブチャラティの任務に助勢すること」

ブチャラティの許可があるから大丈夫なのでは？という意見も出るだろう

確かに大丈夫だと言われれば大丈夫だ

だが、今回の任務はボス直々の指令

へタに動くことは許されない

更に言えば、指令の内容に合流の文字があり、別行動を特別許すとは明言されていない

ギヤングの世界が現場主義であることは事実（組織によって方針は異なる）だが、それを唱えるには然るべき状況が必要なのだ

ボニートがブチャラティと別れたとき、別行動を取らねければならない状況であったろうか？

「任務は遂行するさ。待ち合わせにも間に合わせる」

「当たり前前だ。てめえが約束した事だからな」

「……………気晴らしだよ。亀の中がはじめじめしてんのが悪い」

「…へーえ、もうどうにでもなれってんだ」

車から降りたボニートは何という訳でもなく歩き始めた

夜の高速道路、特にこのA4は車の通りが少ない

深夜ぶつ通して、他の町に行くというのは運送業者でもない限り見られない

そして、ボニートにとってここは因縁の場所

「(前から変わんねえな…この嫌気は)」

今から22年前

ちようどボニートの立っている場所で交通事故が起きた

そう、彼の父母を襲った不幸の出来事

ボニートはその真実を、常に追い求めていた

「10年間、まるで冬眠に備えるアリののように情報を集めてきた。感慨深いとは言わ

ねえが、やっと辿り着いたっていうのは実感できる)」

車からあるものを持ち出していた

エルピディオからもらった事件のファイル

だが、もう用済みであった

ライターの火がうまく着き、ファイルを燃やし始める

実のところを言うと、ファイルを貰う前からボニートはある程度の推測を持っていた

ファイルはあくまでその確証を得る程度のもの

「(全部、とは言わねえ。それでもいくつかの謎は解けた……)」



イタリヤは太陽の国

だが、夜の風景もよいものだ

月は惜しい事に満月でも三ヶ月でもない、十日余りの月

「ボ、ボニートさん！」

上司が感傷に浸っているというのに、グーデンは声を荒げた

いつもの情けない声ではなく、どちらかというど鬼気迫っているような……

「サツだ！こつちに向かつてきている！」

「サツだと？」

赤と青のランプがうるさく鳴り響く

それも両側から挟み撃ちの形でだ

前方5台、後方4台

トラックに乗り込むと、ホル・ホースが助手席に移動していた

気取ったような目が「お前が動かかせ」と主張している

「気が利くな」

「ご自慢の『ねごしえーちんぐ』つてのを見せてもらってないからな」

「ああ、そういえばそうだったな」

「ボニートさん！早く車を出して！」

「やかましい、舌を噛ませるぞ」

「で、でも……………」

「グーデン、お前はもう少し自分の上司を信頼した方がいいぜ。なあ？ボニートさん  
よお、ヒヒヒヒッ」

「ハハハハ、そうだな。信頼してくれよ、グーデン」

そうだ思い出した

このイヴエコにはもう一つ改造されているところがあった

「アウトバーンじゃ出来ないことを見せてやるよ……アウトストラダーダの走りにな  
キーがもう一回りできることだ」

## 第23話 ハイウエイ線上は戦場にて③

「邪魔だぜえ！ポリちゃんよおおおお！」

一般的に、絵画の真髄とは題名に沿った対象物であるという見方が定着している

それそのものは別にかまわないと思うが、私はもつと違った視点からも見るべきだと思ふ

「グーデン！ヴェネツィア直行の道はあるか？」

「あるのはありますけど……多分……」

「封鎖されてるってか？ヴェローナへは？」

「ちよ、ちよつと待つてください……えーつと」

確かに、この画伯はこの対象物に特別な思いを注いだ、という考えはあつてしかるべきだ

しかしながら、その背景や実用品にも注目していただきたい

見ようによっては単なる邪推と言われても仕方がないが、例えば歴史に沿った作品の場合、この背景は当時の建築技術・自然環境で可能であるのか、この服装はこの人物が着るにふさわしいものなのか、食べ物や時代に見合ったものなのかを考えてみたい

「ボニートさん！大変です！この地図イタリア語です！」

「オーウ、エスタディーモ、ピッツアピッツア、グランディオソ」

「おいバカ共！後ろから新しく8台だぞ！」

次に抽象画

解釈は作品によって、だいぶ異なるので一つだけに注目しておこう

ピカソの『ゲルニカ』がなぜ白黒で描かれているのか

私の考察に沿えば、あれは当時の白黒写真を模したのではないかと考える

現代の我々は様々な色で、物事の濃淡を判断できる

だが、当時の情報媒体は全て白黒であった（カラー技術はある）

白黒の絵はカラーの我々にとって衝撃的だが、あの時代を生きた人々からすれば普遍的なものであったと考えるのが妥当であろう

「クソツ、ランボルギーニに追い回されるのはゴメンだぜ！」

「安心しろ、ありやフィアットだ！……よおし」

読者の皆様

唐突に芸術観を語りだしてコイツは何が言いたいんだ？と思っっている頃合いであろ

う

ご安心を、私が言いたいののはただ一つだ

「ガラス？タイヤ？」

「かつこよく決めたいだろ？ここは一網打尽といこうぜ」

結論：トラックにカーチェイスは似合わない

~~~~~

プシューン！

「うわああ！」

「ハツハツハツハツ！良いなあ、やつぱりスチームパイプは最高だあ！どうよ、ボニート
！」

「アホか！おかげでハンドル加減が狂っちゃまったじゃねえか！」

「ヒヒツ、そりやすまねえ」

「ボニートさん！分かりました、このまま真っ直ぐ行けばアドリア海に出れます！」

「遅い！俺だつたら5秒早く言えるぞ」

「そ、そんなあ！」

「あつはつはつはつは！」

相も変わらず騒がしい一行だ

女三人寄れば姦しいというが、男でもそう変わらないようだ

「出口だ！もしもに備えて、頭伏せとけよ！」

「了解！」

トンネルを抜ける

幸いにも警察の検問は無く、一先ず安心といったところだ

だが、パトカーで追跡するだけが警察ではない

ましてや、イタリヤの警察はいくつにも分かれているからパトカーで判別するのも難しい

「チツ、案の定ヘリかよ。変なところに税金使いやがつて」

「脱税者が何抜かしてんだが……いや、ありやあ……」

「どうした？」

ホル・ホースの思案顔に疑問が投げかけられる

一般の兵器には良く通じている男だ

ヘリコプターに最新の装備でも取り付けられているのだろうか

ふむ、良く見てみれば確かに変わった形だ

何かこう……横長いとか……

「ありやあ……カモフ!?旧ソの戦闘ヘリだ！」

「何イ!? イタリアは東側になったのか!」

「西でもあんま変わんねえさ! だが俺の『皇帝』でも、あのデカブツが喰らうほどの穴は開けらんねえぞ!」

「ぬうう…クソツたれえ」

トラックはスピードを上げるが、相手はへりだ

いくら逃げようとも、空から来る攻撃を回避する自信はボニートにない

それに搭載されているサムシートでミサイルの誘導も可能だ

トンネルに入り込めば、逃げ道もなく即KO

先にトンネルを抜けることができたのは幸運と言って良いだろう

「もう少し後だと思ってたんだがなあ…」

「?」

「グーデン、荷台に行け。お前に初仕事だ」

「え?」

~~~~~

「ホル・ホーースさん。じゅ、銃ってアレですよ、グロツクとかベレッタとかルガーとかが作ってるアレですよね?」

「ああ、そうさ。お前が使うのは……どれが良いかな」

遂にイヴェコが装甲車を製造していたことが判明した

トラックの荷台に積まれていたのは、古今東西と言っては過言だが、とにかくありとあらゆる銃器の山だ

シモノフ・NSV重機関銃・スプリングフィールド・69式ロケットランチャー・カー  
ルグスタフなどなど

ギヤングから武器商人になっても文句は言われないような品ぞろえだ

「グーデン。腕伸ばしてみろ」

「こ、ここうですか？」

初仕事

それも銃を使った仕事だ

ホル・ホースも先輩分として最大と万全の準備をしなければならぬ

「そうだなあ、初心者向けで相手を一発で仕留められるとしたら……コイツかな、持って  
みな」

「はい……うわ」

「銃を持つのは初めてか？ だったら覚えときな、それが『銃』ってやつだ」

「……………」



「ビビってんのか？」

「そんなことはありま……せん、多分」

「……………説教臭いのはニガテだからな、あんまりどやこやとは言わねえが、撃つんなら自分らしく撃てよ。それと気張るな、だが気張れ」

矛盾している。だが、筋は通っている

グーデンがこの意味を理解したなら大したものだ

『あー、テストス。聞こえるか？』

「よく聞こえるぜ、ヘリはどうしてる？」

『お前らが荷台に移った辺りで機関砲バンバン撃ちこんできやがる。昨日で車検切れたからボディに傷はいかせたくないんだがな』

「ケチケチすんな。何のためのジユラルミン装甲だ」

『こういう時のためなんだろうなあ………とところで、グーデン』

「はい」

『記念すべき初仕事だが、降りても構わねえぞ』

「初仕事だ」と言っておきながら「降りても構わない」と言い

嫌な上司の典型例だ

とはいえ、ボニートの上司もそれを上回る程憎たらしいのだから、ボニートがこう

なってしまうのも無理はない

『今まで雑用ばっかだからな、初仕事の自由ぐらいは与えてやるさ。それに俺の初仕事は「運び」だった。だが、お前のは違う。お前のは「殺し」だ』

「殺し……」

『そうだ。そしてそれは、一線を超えることになる。お前はまだ引き返せるんだ。ドイツの親父さんとこに頭下げて帰って、別の仕事見つけることだって……』

「それだけはイヤだ！ あんな奴の所になんか……あ……」

『……………』

グーデンドルフが初めてボニートに噛みついた瞬間だ

ホル・ホースもそれに感嘆の口笛を鳴らす

何より目だ。目が変わった

「一線ぐらい超えてやりますよ！ それが道だってんなら突き進んでやるだけだ！」

『…進み方は間違えるなよ。真っ直ぐつてのは良いが、歩く走るで大分違うからな』

「はいー」

かくしてここに一人のギャングが誕生した

その名をグーデンドルフ・マツケシユタイン

彼は一線を超える、後戻りは許されない！

「良い啖阿だ。んじゃあ、もう少しだけ教えておこう」

ホル・ホースはグーデンの持つ銃を指さす

全身1746mm、ガス圧作動方式の銃と言えば……

「コイツはosv96、弾数は5発と少ねえが一発の威力は天下一だ。専用の弾を使えば更になるが、今のお前にや普通の弾で十分だろう」

「反動は？」

「結構、効くぜ。ロシアの知り合いのツテで試し撃ちしたことがあるが、しばらくは腕がブラインだ……よし、そろそろ出るぜ」

「ええ!?まだ、心の準備が……」

「んなもん便所で済ましとけ。ボニート!ドアを開けろ、それと少しだけ持ち上げてくれ!」

『早くしろよ!ジュラルミンとは言え、エンジンに異常が出ればおじやんだ!』

トラックが浮き始めた

グーデンはホル・ホースの指示を聞き、銃口をへりへと向ける

しかし、浮いたとはいえトラックはトラックだ

カーブに差し掛かってしまい荷台の2人は激しくずっこける

「折角浮いてんだから真っ直ぐ行きやがれ!」

『運ちゃんとして、道交法ぐらいは守りてえんだよ!』

「わ、わわわ、わわ!とにかく車体を安定させてください!ボニートさくん!」

直線のコースが見えてきた

距離はおよそ1300mぐらい

ボニートはここを待っていた

ヘリとの位置を平行に保つにはここしかない

『グーデン!一発勝負だ!プロペラの接合部分を狙え!』

「待て!初心者にも、それも対物狙撃用ライフルだ。一発でソレを仕留めるには無理があるぞ!」

『勘違いするなホル・ホース。俺が試してるのは技量じゃねえ心理だ!やれるか、グーデン?』

「……………恨まないで下さいよ!」

「アツハツハツハ!それでいい!」

構えを元に戻し、ヘリに照準を合わせる

狙撃用スコップから見えるのはプロペラの結合部分

ここで撃てばヘリは確実に落ちる

だが、グーデンは緊張してしまった

本当に撃つていいのか、外れたらどうしよう、もしかしたら先にこちらが撃たれるかもしれない

「（ヘンな事は考えるな！一線を超えるって言ったじやないか！撃て、引き金を引けグーデンドルフ・マツケシユタイン！僕は……僕は……）」

「このドラ息子が！」

「！」

気付けば引き金を引いていた

ほんの一瞬だった

撃つたという感覚すら残っていない

そういえば、弾は

弾は当たったのか

「ボニート……作戦は失敗、外れた」

『……………そうか』

初仕事で失敗してしまった

その事実、グーデンドルフに大きなショックを与えた

目だ。目が変わってしまった

『クソツ！トンネルだ！』

「連中、これを知ってミサイルを撃たなかったのか」

トラックはすでに道路に戻っており、今からまた持ち上げれば上の道路にぶつかってしまう

もはや、どうすることもできない

覚悟を決め、ミサイルの恐怖と共にトンネルに入るしかない

『フルスピードで逃げる！何かに掴まっとけよ！』

「了解。……ほれ、グーデン」

「……………」

第二のトンネルに入った

ヘリコプターそのものは入れない

その代わりに追ってくるのが、搭載されているホーミングミサイルだ

「スチームパイプも見当たらねえ……どん詰まりだな」

トンネルの入り口でホバリングしているカモフはミサイルをいつでも撃てるはずだ。

だが、動く気配を見せない

ボニート達の逃げるサマを眺めているようだ

『野郎、オレたちを嬲る気か』

「んじや、せめてもの悪あがきだ」

ホル・ホースの『皇帝』が、天井の電灯を撃ちぬき始めた

それでミサイルの追尾能力から逃れられるとは考えていない

ヘリの熱センサーで仕留められるのは知っている

「ホル・ホースさんは……やけに落ち着いてますね」

「……何度か味わったことがある。死ぬって感じる時に何度かな」

「ハハハハ……じやあ僕も死ぬんですかねえ？」

「さあな。だけどボニートは必死こいてるだろうから……まあ、生きてたら儲けモンだ」

いつものグーデンらしくない

泣きわめいてボニートに縋り付くのが、彼なのにやけに落ち着いている

達観していると言ってもいい

「(悔いは無い……僕は一線を越えたんだ。こうなることは覚悟しなきゃならないんだ)」

仕事を終えたというのに、銃を握りしめてしまう

愛着なんぞ湧くワケでもないのに妙に愛おしく感じている

ああ、何という皮肉なり

思い出すのはドイツの光景

街中を酒飲み共が列をなし、失業者たちが路頭で暮らし、金持ちどもはいい気にワイ

ン

ホールに入ればベルリンフィル、農民たちは讚美歌を歌い、母はフラムクーヘンを作

り……

父は、父は、父は、

くこのドラ息子が！く

「！」

それは本能による動きだ

閉まった筈の荷台ドアを蹴破り、OSVの銃口を改めてヘリに向ける

目だ。目が変わったッ！

「（見ているよ……クソ親父）」



トラックとヘリの距離がどんどん離れていく

カモフに搭載されているミサイルは空対空ミサイル、ロケット弾などがあるが、相手がトラックとなると、恐らく対戦車ミサイルを撃ちこんでくるだろう

「……射角をもう少し上げておけ、それと撃つなら奴が撃ってきたと同時にだ」

「はいー」

ホル・ホースはグーデンを止めることなく、それどころかアドバイスをした賭けることにしたので

目の前の若いドイツ人がどこまで底を広げてくれるのかを

「来るぞー」

「……………」

カモフのハードポイントが少し揺れたような気がする

いや、揺れた

その証拠にミサイルの先端が見える

グーデンは落ち着いていた

2度目だからとかそんな甘っちょろい理由じゃない

必ず、撃つてやるという自信があるからだ

「(タイミング! 3, 2, 1…………)」

ズウウオン!

ただの銃声じゃない

良くも悪くもロシアの銃

重みも格もそんなじよそこいらの品とは違う

だが、それはミサイルにも言えることだ

良くも悪くもソ連のミサイル

ICBMの技術はアメリカを恐れさせた

規模は違うが、その技術は応用されている筈だ

「ボニート! ドアを閉めろ!」

『あれ? まだ開いてたのか? ちゃんと閉めたんだけどな』

ホル・ホースは危惧していた

ミサイルの当たる当たらずではなく、爆風による衝撃のことだ

ドアは閉まろうとしているが、グーデンが蹴破ったせいか完全には閉まらない

グーデンは放心状態になっており、回避することに頭が回っていないようだ

「Turn down!」

「え……うわあ!」

頭を押さえつけ、無理やり伏せさせた

その直後に爆風が彼らを襲う

襲うのは爆風だけではない、ミサイルの破片や熱もある

「ぬああああああー！」

「ウツ！があああああー！」

『何だああ!? どうした!?!』

一番焦っているのはボニートだ

サイドミラーは機関砲にやられ、後ろの状況が全く分からないからだ

その中で、突然の爆発だ

驚いてしまうのも無理はない

やがて、爆風が収まった

トラックも無事? トンネルを抜けている

「あらあ、ら。コゲ臭えの、お風呂入りてえ」

「そうだな。トスカーナにいい湯があるって聞くぜ」

「ああ、メデイチ家がうんたらかんたらっていう場所だろ」

トンネルの中を悠々と歩き、ヘリの残骸に辿り着く

パイロットを無理やり引きずり出す

顔も体も黒焦げで、誰かを判別するかも難しい

「こいつら一体何なんだろうな？うわさに聞く、カラビニエリって奴か？」

「連中が俺たちみたいいな社会不適合者に、こんな用意するわけねっだろ」

「さあて、どうだかねえ？…ん、これは？」

パイロットのポケットから何か光るものが落ちた

少し小さい

何かのバッジのようだ

「何かのバッジだな……どっかで見たことある、つてこりやあ」

「値打ち物か？」

ボニートは第2ボタンをホル・ホースに見せた

第2ボタンにはパッションネのバッジが縫い合わされている

パイロットのバッジと第2ボタンを並ばせる

「要するに……」

「ああ、こいつら全員。パッションネの構成員だ」

「内部抗争か？3人仕留めるにや、元の取れねえ装備だが……」

「…………考えられるが、恐らく違うだろう。どちらかという邪魔者を消しに来たって感じがする」

2人は踵を返し、トラックの元へと進む

焦げたバツジから様々な推測ができる

暗殺チームの一員、その他幹部からの刺客、出世を狙った下っ端

考え出せばキリがない

そう考えているうちにトラックへと戻ってきた

コゲが所々に現れ、ガラスも傷がいつている

カスタム費、約6000万（内4000万はローン）のイヴェコは動きはするが、無

残な姿になっていた

「次、どつちが転がす?」

「お前がやってくれ。ちと考えてえことがある……グーデンにも労いの1つや2つはし

ねえとな」

「おーおー、優しいことで」

「茶化すな」

軽く蹴りを入れ、運転席へと向かわせる

荷台を開ければグーデンが銃の手入れをしていた

隣に座り、肩をポンポンと労い代わりに叩く

「ホル・ホースから教わったのか」

「はい、『耳をほじるような感覚で』って言われました」

「はっはっ、ちゃんと掃除してやれ」

「……ボニートさんは」

「うん？」

「初仕事、どんな感じだったんですか？」

「今から7年前ぐらいか……メキシコからの密輸品をディーラーに運ぶってやつでな」

「……………」

「それがまさかの大失敗よ」

「え！それって……」

「密輸品に小型爆弾が仕込まれててなあ、高速道路でいきなりドカンよ」

「何かお咎めとかは……」

「特には無かった。だけど、『自分のケツはく』って言われてよ。グアダラハラで一発ブチかましてやったぜ」

「やっぱり、凄いですね……ボニートさんは」

「いんや、それは違う」

グルウン！グルウン！

エンジン音が彼らの会話を遮る

戦闘のダメージはそこまで受けてないはずだが、いつも聞く音ではない

何か異常が発生してしまったのか

『今日は晴天なりー、よしマイク繋がってるな。ボニート！エンジンがうまく動かねえぞー！』

「マジか!?じゃあ、下見るから少し待っててくれ」

戸棚にあった工具箱を取り出し、荷台を開ける

機関砲の弾がエンジンに当たったということはないはずだから、恐らくその周辺機器がおかしくなっているのだろう

「ボニートさん！違うってどういうことですか?」

「……………この業界でな?初っ端の仕事で成功する率は低いんだ。経験の無い奴が無理やりやらされるようなモンだからな」

「じゃあ、僕は…」

「おっと勘違いするなよ。だからってスゴいってワケじゃねえ。ポルポさんなんかは、初仕事で政治家何人か失脚させてんだからな」

少し慢心してしまったグーデンだが、先人の偉大な功績を聞き萎んでしまう

それもそのはず

大統領当選直後の与党の人間を何人か失脚させた事件は、時の新聞の一面を飾ったほどだ

尤も、本人は「安い仕事だった」と言っているからスゴいものだ

「まあ、だけど……その何だ……」

「？」

珍しくボニートが言いよんでいる

目を瞑り、頭をかき、途中で「あー」と言つて間を伸ばせたり

いつもの正々堂々、公明正大、青天白日という感じではない

まあ、いろんなことは考えられるが彼が言いたいことは、つまりこうだ

「よくやったな。グーデンドルフ」

「っ！ありがとうございます！」



## 第24話 水は水①

「急げや急げ！待ち合わせに遅れちまうぞお〜！」

「ええい、やかましい！元はと言えば、お前が修理に手間取らなきや良かったんだろうが！」

「イヴェコちゃんはデリケートなんだから、ちゃんと修理しなきや可哀想だろうが！」

ヴェネツィアにやつと入れた一行は急いでパパドポリ公園へと向かった

トラツクはヴェネツィア駅の裏に駐車し、グーデンを見張り番に置いているから大丈夫のハズだ

パパドポリ公園

ヴェネツィア市民なら、これを知らぬ者はいない

四方が海で囲まれているこの都市で、珍しく緑の色が見れる場所だ

それにヴェネツィア通の人物でも、この良さを見出す者は中々いない

「え〜と、ここらへんにいるハズなんだけどもなあ〜」

「あいつらじゃねえか？」

「ん？見つけ！」

ブチャラティは自動販売機の前のベンチで辺りを睨みながら座っていた

ジョギングをしている老人から怪訝な顔を向けられているのが証拠だ

「遅かったな。と言つても、俺もさっきここに来たばかりだが……」

「そりや良かった。で、他の連中は？」

ブチャラティは散歩中だった亀を拾いあげる

その意図が伝わったのか、ボニートは眉を少し釣り上げた

「どうだった？」

「俺ではないが、ジオルノとミスタが暗殺者に襲われた。今、少し休ませている」

「そうかお前んところも……、俺んところもやられたよ。被害はさしたるモンじゃなかった

が、パトカー十数台に戦闘へりときたもんだ」

「よく逃げられたな」

「悪態吐きのガンマンに泣き上戸のドイツ人がいたからな。ま、俺だけでも十分対処で

きたが」

「言うねえ、爆発に一番ビビってたくせによ」

「やかましい、『今から爆発します』って言われてたら何ともなかった」

「随分律儀なヘリだな」

「おっ！ 堅物だと思つてたが、中々冗談通じるじゃないの」

映画による偏見も含まれるが、一流のギャングの条件に『ジョークへの理解』が含まれているのは事実だ

一時期、ボニートはそれを身に着けようとクサイ台詞を言い過ぎ、ポルポから「気持ち悪い」と言われたことがある

「これを見てくれ」

「?……これは……」

黒焦げたパツシヨネのパツジ

ヘリのパイロットから転がり出てきたものだ

「暗殺チームか?」

「違う。暗殺チームにしちや手口が雑すぎる」

「幹部連は?」

「ありえん。おじいさま方なら、もつと派手にやる」

「……………分からんな。娘を預かっている俺ならまだしも、なぜお前が?」

「さあねえ、何か持つてるって言っても、ライターとタバコ、保険証ぐらいだけ?」

ポケットに入っている物をすべて見せ、お手玉のように遊び始める

しかし、本当にわからぬ連中だ

パトカーを数台盗むことができ、戦闘ヘリを向かわせるほどの力を持った組織・人物

ブチャラティもボニートも、それができる人物は知っているが、特に面識がある訳でもないし、恨みを買うようなこともした覚えがない

「んで、これからどこに行くんだ？」

「指令によれば、サン・ジオルジョ・マジョーレ島だ」

「その指令の中に、俺について何かあったか？」

「ああ……ボスは……」

ブチャラティは指令の内訳を伝えた

- ①・大鐘楼の最上階に向かう事
- ②・娘と随行できるものは『1人』、なお随行者の武器携帯は禁ずる
- ③・DISCを受け取ってから30分以内に来ること
- ④・残りの者は上陸してはならない

「30分以内？って、結構時間経ってんじゃないのか？」

「まだ18分だ。安心しろ」

⑤・ボニート・E・ゼルビーニとその『相棒』は、ブチャラティチームの随行者が帰ってくるまで船に待機

⑥・2つ船を用意するので、Aの船をブチャラティチーム、Bの船をボニートチームとする

「へえ、こまめだねえ」

「こうすることで、ボスの秘密が守られてきたとも言えるがな」

「そうだな。おかげで俺はタコの下で大分苦勞したもんだ……ま、ぼやいてても仕方ねえや。よし、行こうぜ」

公園から船着き場まで3人は特に会話することはなかった

はつきり言おう、ブチャラティはまだポニートを信用しきつてはいないのだ

ポニートの声、表情、動き。そのすべてに何か引っかけりを感じている

無論、ポニートはブチャラティを敵対視していない。それどころか、これからのお付き合いを考えて行動したと思っている

だが、ブチャラティはそれでもポニートを遠ざけてしまう

同僚であることは違いないが、仲間となると別だ

脳がどこかで拒否反応を起こしているのかもしれない

「この男は危険だ」と

「ん？どうした黙りこくって」

「……何でもない。ボスが相手と聞いて、緊張してな」

「だよなあ、ポルポさんだったら愚痴の1つ2つは言えそうだが、ボスとなるとなあ」

ポニートは珍しく弱気になっている

それはブチャラティも同様であった

悪くも後ろめたい評判しかない、パツシヨーネの『ボス』

誰が相手であろうと、その全てを社会的・物理的に抹殺してきた人物

会うだけの行為で、手が汗ばんでしまうのは両者とも初の体験だ

船着き場が見えた

あくまで、観光用の船着き場なので屈強な男たちの姿は見当たらない

「それじゃ、俺たちは先に行く。指令の地図によると、お前たちのBボートは一番端っこにあるやつだ」

「まあた、お前らが先か。分かった、一番端っこだな」

モーターボートがすさまじい水しぶきを上げながら発進する

一方、ボニート達は少し遅れて端っここの船着き場に来ていた

だが、世の中には格差がある

一部の経済学者は何も考えず「市場競争は良い事だ」と言っていたが、その結果がボニート達の目の前にあるBボートである

「手・漕・ぎくくくく!?!」

「一抜けた。オレ漕ぎたくない」

「おいおいおい、逃げるんじゃないの。ここは男らしく」

ジャン、ケン！………

~~~~~

「ひっひっ、ほっほっ。ぜえぜえ、はあはあ」

「良いねえ。ブルジョワジーが肉体労働してるサマは」
「うるへー！」

第25話 水は水②

「腕があゝ」

「ガンバレー、島まで5000mぐらいだぞ」

「……ちんきしよー!」

ボニートは半ば……いや、ほぼやけくそになっていた

テンガロハットの相棒は棒読みの応援しかせず、おまけに向い風
それでも漕ごうとしているんだから見事なものだ

「えっさ、ほいさ!おーえす、おーえす!」

「おお、速い速い。岸が見えてきたぞ、ほれもうひと踏ん張り」

「手で踏ん張るって、どういう意味だあ!?!」

オールを激しく回転させ、泡柱が立つ

島の岸にやつと辿り着き、ブチャラティチームからは少し離れた所にボートを止めた
「上腕二頭筋が……ぜえ……俺のチャームポイントが………はあ、ぜえ……ばんばんに
なっちまったじゃ、ねえか」

すると、ブチャラティチームの方からおもちやの戦闘機が、疲労困憊のボニートへ飛

んできた

それはナランチャのスタンド『エアロスミス』だ

エアロスミスにはレシートが引つかかかっていて、何かを伝えるに来たようだ

広げると「ブチャラティ先に行った。けど少し遅い。船上で待機」と書いてある

「ありがとよー！待機だな？了解！」

ボニートの大声に、ブチャラティ側から手が振られた

それを確認し、ボートに深く座り込む

そういえば、この2人は昨日から寝ずじまいだ

いつの間にかホル・ホースから寝息が聞こえる

「ふわぁあ、人に漕がせておいて先におねんねかよ……」

瞼がだんだんと重くなる

視界も霞んできて、眼が……だんだんと……

「(ああ……：そーいや……徹夜か……グロッキー……)」

うつらうつら……うつらうつら……r……

~~~~~

「、ニートー……ボ……きろー！」

「ん？なんでえ？」

ホル・ホースに激しく揺さぶられ、寝ぼけ眼を維持しつつ、一欠伸

気付けに頭をしばかれ、返す手で頬をぶたれ、もう一発頭をしばかれる

「おい、アレを見ろ！」

「ん？う？あーれー？」

ボニートは寝起きに弱いわけではないが、睡眠時間たったの20分では足りない

列車での戦闘・徹夜の運転・オール漕ぎの疲労が溜まっているのだ

せめて、後40分は寝かせなければ満足できない

ホル・ホースの言う『アレ』とはブチャラテイ達の事だった

ついさっきまで、帰りに何を食べるかを議論していたような感じは無い

何より驚愕なのが、全員上陸していることだ

ボスの指令に真っ向から逆らっている

「お前達とはここで別れるツ！オレと一緒に行動すれば、オレと同じく『裏切り者』になつてしまうからだッ！」

「!?!」

眠気が一気に吹っ飛んだ

ギャングの世界で最も犯してはならない行為

「裏切り」の言葉

「何故だ…なぜッ!?!」

「詳しい説明を…聞かせてくれブチャラテイ!」

数々の暗殺チームとの死闘により、ブチャラテイチームの結束力は以前よりも固くなっていった。ジョルノという新入りも活躍し、結果は上々

それが今、大きく揺さぶられている

「ボスは娘を…血の繋がったトリツシユを自ら始末するために、オレ達に護衛の任務を与えた。オレはそれを…見逃すことはできなかった…だから『裏切っ』た!」

ブチャラテイの裏切る理由は、ギャングという業界では認められるようなものではない

自分の父親が殺されようと、部下・上司を葬られようと『裏切り』という行為そのものは、やってはいけないのだ

アル・カポネであれラッキー・ルチアーノであれ、裏切りに寛大な態度を持った者はいない

「そんな無茶な……」

「正気かよ…ブチャラテイ」

「裏切り者が、どんな目に遭うか知らないじゃないだろうに……」

フーゴ・ミスタ・アバッキオも懸念を抱いた

ナランチャに至っては、どうしていいかわからず言葉を発することもできない

あまりにも、無謀だ

部下が100人いるわけでもないし、他の組織から保護されるわけでもない

真正正銘、孤立することになるのだ

「ともに来るといふのなら、階段を降りボートに乗ってほしい」

そう簡単に同意できるわけではない

金でも誇りでもなく、命を懸けなければならぬのだから

「ついて来いとは言わない……オレの勝手な判断だ、義理を感じる必要はない。だが、一つ偉そうなことは言わせてもらおう」

覚悟を決めた顔は、どっちつかずの状態にいる部下たちに一つの確信をもたせた

『後戻りをするつもりはない』

この確信が、彼らの不安に拍車をかける

「オレは『正しい』と思ったからやったんだ。ボスは必ず倒す。後悔は無い……こんな世界とはいえ、オレは自分の『信じられる道』を歩いていたい！弱点さえ見つければ……今は逃げるだけだが、『弱点』は必ず見つける！」

その言葉にメンバーはそれぞれの動きを見せたが、心情は一致している筈だ。ジョルノは既にブチャラティと共に行くことを決意しており、迷いはない

だが、他のメンバーは違う

信念に従っても、組織に従っても嫌な結末ばかりが見えてしまう

「言いたいことは分かったよ……それに、それが正しいというのも頷ける。だけど、理想だけじゃ生き抜けるものはいないんだ。現実が……この組織があつての僕らなんだから」

階段をから一歩離れ、「拒否」の意を示した

フーゴは現実に従い、組織に従う

ただ、それだけの事。賛否を設けるのはナンセンスかもしれない

「そうだ、フーゴの言うとおりだ。ブチャラティ、もうあんたに場所は無い。それに俺が忠誠を誓うのは組織。あんたじゃない」

アバツキオも拒否。だが、おかしなことに足は階段へと向かっていく

「しかしだ……よく考えてみれば、俺も行く場所の無い男。おまけに落ち着けんのはよお、あんたと一緒の時だけだ」

「ア、・アバツキオ!？」

普段のアバツキオなら、難なく組織に従うハズだ

フーゴはそれを計算に入れていた

アバツキオの判断はそれを裏切る形になった

しかし、その予想を一番裏切ったと感じているのは、アバツキオ本人であろう

この判断はいつもの合理的な彼の思考ではない

「ボスを倒すってんなら……次の幹部は、このオレだろうな。ほれ、亀を忘れてるぜ」  
ミスタもそれに続く

途中ジョルノに「ボスは隠し財産は」と呟いているが、彼がこの決起に参加することとは変わらない

「おまえら、どうかしてるッ！分かってんのか？死に行くことになるんだぞ！いや、このヴェネツィアから出ることも………」

フーゴは、いつもの紳士然とした態度を崩し、非難の言葉を投げかけた  
彼なりにチームを心配しての発言だ

とはいえ、ボートに乗ったメンバーは皆覚悟を決めた顔で、瞬時にその制止が無駄であることに気づく

「ナランチャは？」

最後のメンバー、ナランチャ・ギルガ

最年少という訳ではないが、彼は物事を決める事に關しては、周りに比べて幼かった  
ブチャラティからの恩も、組織の恐ろしさも、どっちも感じすぎている

「ブチャラテイ……お、おれ……」

「道は自分で決めるしかないんだ……ナランチャ。オレは何も言わん、だが忠告はしてお  
う」

「えっ？」

「お前には向いていない」

「っ……うう……うう……」

その宣告は、ナランチャの悩みの解決にはならなかった

生半可な覚悟で来られては、ブチャラテイ達もナランチャ自身もいらぬ危険を招く可  
能性がある

「ボートを出せッ！俺たちは『裏切り者』になる！」

「ごや、待てよ」

びしゅん！

海面に小さくも鋭い水柱が立つ

それはボニートの放った弾によるものだ

オートマグⅢカスタム

・ 30カービン弾を撃てるオートマチックはこれぐらいなものだ

「他の幹部が目の前にいるってのに堂々と裏切り宣言か。いい度胸してんな、ん？」

「……………ボニート」

いつものおちやらけた顔ではない

射抜くような目に、眉間に寄せられた皺

本気の顔だ

「どうしても、止めるか？」

「止める？生易しいこと抜かすんじゃないやねえ。仕留めるんだよ」

「ブチャラティ！」

「おおっと、動くなよ。『皇帝』の弾で要らぬ穴は開けたくねえだろ？」

状況、ボニートが完全に主導権を握っていた

ボートの上なので、常に揺れておりオートマグの照準は定まらないが、ボニートが外したとしてもホル・ホースの『皇帝』が彼らを襲う

弾丸もスタンドなのだ



止めることも、そのまま無くす事も可能

ミスタも似たようなスタンド『セックスピストルズ』を持っているが、この場合は先に撃ったモン勝ち

ポニートチームの優勢に変わりは無かった

「部下どもは見逃してやる。唆されたつて形で上役とはうまく話をつけておこう。せめてものお情けだ。だが、ブチャラテイ、お前はダメだ。ボスに深い忠誠があるワケじゃねーが、ギャングにもルールつてもんがある」

「……………」

ブチャラテイが無抵抗の証として、両手をゆっくりと上げる

「ミスタ、お前愛用のS & a m p ; Wもそうしてもらおうか。海に捨てるとは言わん、ポートの上にぼんと落とすだけで良い」

「……ちつ、結局かよ」

武装解除をさせたことにより、依然ポニートの有利が確立された

キャプテンビヨンドの能力を活かし、ブチャラテイのポートに近づく

「『失望した』なんていい子ちゃん気取るつもりは毛ほどもねえ。それに裏切りはこの業界じゃ、良くも悪くも華だ。……尤も、咲かせ方を間違えたみたいだがな」

「悪い冗談だな、オレが求めているのは華じゃない……これだよ」

「?」

ブチャラティは握っていた拳を開け、その中を見せた  
しかし、そこには何も無い

ただの手のひらがボニートの目に映るだけだ

一体何だ?何を意味している?

「グアツ!水が入って…っ!?!」

振り向くと手漕ぎボートが真つ二つに分かれ、タイタニックよろしく沈んでいた

ホル・ホースは間一髪岸に逃れることができている

つまり……

「ブチャラティ!」

そう全てブチャラティの罠だった

こちらが『皇帝』の弾丸を設置していたように、向こうもスタンド『ステイツキー・フィンガーズ』でボートにジツパーを取り付けていたのだ

してやられた

だが、これで諦めるようなボニートではない

「逃がすかあ!キャプテンビヨンドの『掴み』に制限は無え!」

海水を豪快に持ち上げ、モーターボートを横なぎにする形でぶつける

常人であることの是非を問わず、これを喰らえば死にはせずとも致命傷を負つても不思議ではない

波が収まり、海に安定がもたらされる

そこに……ブチャラティ達の船は無い

「沈んだか……あるいは」

「クソツ、逃げられた」

ボニートははつきりと見ていたし、見られていた

波がぶつかる前に、あの新入りが

ジョルノ・ジヨバアーナと視線が合ったのだ

彼の手に持っていた亀が、彼の仲間の無事を示していることにも気づいている

「ホル・ホース、適当な足を探してくれ。…ボスの所に行つてくる」

「帰つてきたころには首だけだったり」

「心配しろよ、雇い主が死ぬかもしれねえんだぞ？」

「ヒヒヒヒッ、その為の前金だろ？」

そうホル・ホースに情はあれど、忠は無い

その情も大体が女性に向けられるもので、今までの任務で無理して男を助けたことはない

伊達に暗黒街女性基金の副理事を務めているワケではないのだ

「嫌なヤツだ。さて……行つてみますか」

大鐘楼の頂部を望む

イタリアの闇を全身で感じなければならぬ

覚悟はしている。だが、いざ直面した場合、それは機能するのだろうか？

ボスを相手に……

かつての父はそれを探ったがために母と共に処分されたと聞く

カエルになるか鷹になるかはポニート次第

くくくくくくくくくくくくくくくくく

過去

私はそれをすべて消してきた

時間

私はそれをすべて消すことができる

未来

私はそれを知ることができる

この絶頂を脅かされたいために

だが、たった一人の男にそれが狂わされている

何故、一時の情に任せ、女と体を重ねてしまったんだろう

娘さえ生まれなければ……いや、それは違う

本当に忌むべきは自分だ

過去を消し絶頂に立つ、それが私だ

その過去を消しきれなかったのは自分だ

だから、始末しなければならぬ

その昔にも、自分を探っている者がいた

今このエレベーターに乗っている者の父親だと聞く

「ボニート・E・ゼルビーニ……父親と同じ轍を踏むか、それとも……」

帝王は、このわたしだ

依然変わりになく

## 第26話 水は水③

「……………」

この風景に似つかわしくないクラシック調のイスが一脚  
座れという意味だろうか

慎重にだ。慎重にならなければ

『どうした？座りたまえ』

「！」

ボスの…声だ…

ポルポさんやペリーコロさんのような人間性が全く感じられない

冷たい

機械的な声でも人間的な声でもない

氷だ…解けることのない氷のような声ッ！……

『娘には逃げられてしまったが、君がちゃんと任務を果たそうとしたのは知っている』

「そ、そr」

『いや、それには及ばない。ブチャラティの始末は我々でつけておく』

!?

今のは、なんだ？

俺は声を発した覚えは無い

だが、ボスには伝わっている

緊張のあまり、記憶が吹っ飛んだってか？

いや、そんなバカなことが：

『ところで、報酬についてだがブチャラティの分を君に上乘せすることにした。それでも不足というのなら』

「それでは……あn」

『ああ、君の父親アルバーノの一件は残念だったよ。有能な男だったよ、わたしの正体を探らなければ親衛隊に入れる予定だった』

まただ

この感覚、すべてを見透かされているような感覚

ボスは知っているというのか？俺のこれからの動きを：

「ですg」

『安心したまえ、君は信頼できる。ポルポも言っていた『良くデキる奴が入った』とね。そうだ、ブチャラティの持つシマを全て譲ろう。元々はポルポの物だ、周りの者も納得



してくれるはずだ』

このままやり過ぎすしかない

違和感だらけのこの会話を何とか果たさなければ

「ところd」

『ペリーコロ？素晴らしい人物だよ。わたしの…組織のために自ら死を選んだ。君もそれを見ただろうか？』

「は、はい」

『ならば結構。…中々に楽しかったよ、こうして声で会話するというのは久しくてね』

ならば、姿の一つや二つ見せてもらいたいものだ

だが、俺はボスの声を知ってしまった

もし、迂闊にソレを漏らせば…ゴミ捨て場を墓としなければならない

この会話もだ

『新しい任務は…追って伝えよう。しばらくは『待機』を命ずる』  
「……………」

空気が変わった

押しつぶされるような感覚から解放された  
ヴェネツィアの潮風が安心を教えてくれる

「よりもよつて、言われっぱなしかよ…ポニート・E・ゼルビーニ」

そうは言うが、流石に相手が悪すぎる

向こうはイタリア社会を半ば牛耳っている男

俺は精々町長レベル

「(だが、良い収穫もあつた…ボスさんよ、すまねえが少しカマをかけさせてもらった  
ぜ)」

ボスはきつと気づいていないだろうな

おかげで、俺は確信を持つことができた

後は奴の所在地を調べ上げるだけ…

「(フッフ…やつとだ。あと一歩で掴む事ができる…この俺を24年間も縛り続けた  
手紙を破り捨てることができる…だが、今は『待ち』だ。そう『待ちの一手』」

~~~~~

「おつ、戻ってきたか」

「首の皮見てみるか？」

「やめろ、野郎のうなじなんて見たくもねえ」

軽い冗談で2人は安堵した

船着き場には中型のホーバークラフトが停留している

ホル・ホースの話によると、ここの教会の神父が島とヴェネツィアを行き来する為に買ったが、結局水上バスを利用することになり裏口で埃をかぶらせていたらしく、こちらの事情を話すと快く貸してくれたとのことだ

「それで、これからどうすんだ？」

「思うところはたくさんあるが、とりあえず事務所に戻って任務達成祝賀パーティーなんて、いきましようかねえ！」

「おつ！そりゃ良いなあ。この所、何も食っちゃいねえからなあ…パーツとやろうぜ！」

「うーん、上等なワインにかぶり付きたくなる肉、世界種々のフルーツ盛り合わせ！」

「イタリアだからなあ、皿に盛られたパスタとならあ、ピッツアピッツアも堪らねえってモンだ」

「ようし、じゃあ早速事務所に帰って、もうバックバック食ってやつからなあ」

「ヒヒツ、楽しみだ」

—ヴェネツィア上陸—

「んふふふふ、ヴェネツィアのワインって言ったら世界最高峰だかなあ、目移りしちゃうー」

「なあに、気持ちの悪いコト言ってるんだ。…ん？…こりやあ、アンダルシア産のやつじゃねえか！へえ、ワインシヨップってのも立ち寄ってみるものだな」

「ボニートきーん、野菜とかは買い込みましたよ」

一行はステに観光気分でヴェネツィアを回っていた

パーティ用の物を買って立ち去る予定だったが、ヴェネツィアの魅力に引き込まれてしまったのだろう

ゴンドラを乗りまわし、愛の接吻の前で記念撮影をしたり、ドウカーレ宮殿で王族ごっこもした

「うーん、買った買った。これだけありやあ、お前らみたいな食い詰め者でも満腹になる

だろうぜ」

「お前もな」

「トホホ、やっぱり僕は荷物持ちなんですね……」

ワインシヨップを出ると、辺りは騒然としていた

いつもならあちらこちらと人々が行き来しているのに、今に限って一方向に流れて行っている

「何だ、何だあ？」

「……さてな……見に行く？」

「野次馬になんのは悪くねえ」

「ええ、まだ歩くんですか？もう帰りましょうよ」

「ダダをこねるなよ、何かのイベントだったりして」

野次馬は広場を中心に出来上がっていた

しかし、人が壁になっていて何が起きているか全く分からない
ただし、警察に救急車が見えた。喜ばしいことではなさそうだ

「なあ、アミーゴ。一体何が起きたっていうんだい？」

「見たわけじゃねえが、話によると銃殺された死体がいきなり現れたって話だ」

「(銃殺？……) グーデン、ちよつと持ち上げるぞ」

「はい」

「俺は？」

「……散歩でもしときな」

「…はいよ」

厄介払いされたというのにホル・ホースは嫌な顔をせず、その場を離れた
さて、現場を見てみよう

うむ、確かに無残だ。2人の若者の体にはそれぞれ複数撃たれた跡がある

「ボニートさん！アレ見て！」

「？」

この前やつと一人前にはなった部下が何かを発見したようだ

指が刺されている方向を見ると、その存在にボニートも気づいた

彼らの服に着いているアレ

それはボニートの第2ボタンにもついているアレだ

「パツシヨオーネのバツジ……」

「これをやったのって…もしかして」

「…引き揚げるぞ。これ以上ここに居る理由は無い」

「ちよ、ちよつと待ってくださいよ！」

手に持った荷物を激しく揺らしながらグーデンが後から追いかける
しかし、ボニートはそんなことお構いなしにずんずんと進んでいく
彼は一刻でも早くこの場所を離れたかった

ヴェネツィアを嫌いになったわけではない

バツジを見た瞬間、彼は感じたのだ

どこからかは分からない

だが、はつきりと感じ取った

あの大鐘楼で味わった、押しつぶされるような感覚を

数時間前の襲撃の反動もあり、3人は高速道路を悠々と進んでいた

パトカーに追いかけられることもないし、ヘリのミサイルを気にすることもない

「で、どうだった?」

「お前の察したとおりだ。モーターボートで足早に去っていく裏切りご一同様を見たよ」

「どこに行ったと思う?」

「方角からして、マルコ・ポーロ国際空港だろうな」

「やっぱりか」

陸路も海路も全てパツシヨーネの構成員で監視されている事を知つての行動だ
大方、そこで金持ちの私用チャーター機でも盗むのだろう

ボスがそう簡単に逃がすとは両名とも思つていない

きつと何かしらの対策を練っているだろう

「追わねえのか？連中を殺つちまえば、お前の株はさらに上がると思うが」

「俺が上げたいのは株じゃねえ、給料と身長だ」

「いわゆる三高つてやつだな。高収入・高身長・高学歴……」

「全く嫌な時代だぜ。時勢よりも教科書を読むやつがエライんだからなあ」

「それが時勢だろ？」

「……ああ、違いねえ」

ボニートの哀愁にホル・ホースが皮肉で返す

逆もまたしかりだ

2人の付き合いは、ちょうど7年前のロシアから始まつた

イギリス人は「友とぶどう酒は古いほどよい」と口を揃えて言うが、7年を古いとい

うには無理があるだろう

彼らの間には友情もなければ義理もない

だが、利害の一致というのはあまりにも寂しすぎる何か、こう……言葉で表すのも難しい関係なのだ

「だけど、どうしてブチャラティは裏切ったんでしょうね？今、イタリアでぶいぶい言わせてるのは、このパツシヨーネのはずなのに」

「……………」

グーデンの素朴な問いを、ボニートは敢えて返さなかった

頭に残る『始末は我々の手でつけておく』との言葉

思い出すだけで、身震いする

要は『手を出すな』ということだ

それに加え絶対守秘義務を突きつけるボスの性格

簡単に答えてしまえば、ボニートも対象に入ってしまう

「何でだろうな……………」

「ま、そう考え込まえねえ方が良いんじゃないか？知らぬが仏だ」

「……………何かごまかされたような」

空返事に納得がいかないのは仕方がない

もし、ヘタに喋ればそれこそ水道管に四肢バラバラで投げ込まれる可能性がある

何としてもそれだけは避けなければならない

「ああ、もう！これからパーティーだぞ！仕事の話はナシだ」

第27話 ワインセラーの明日①

「うへへへへ、見よ！我が誇りあるドイツに伝わりし800年の伝統！いぎ、3本ラツパ飲み！」

「はっはっはっは！良いぞお、もっともっとお！」

「はむはむ、ハムハム。むしゃむしゃ、サラダサラダ。もぐもぐ、ペペツ、ペペペペツ！ペペロンチーノ！ペペロンチーノ！」

テーブルに並べられた数々のイタリア・ドイツ料理

カルパッチョ、オツソ・ブーコの匂いに、シュバイネハクセの食感があれば文句を言うことは許されない

おまけに、ヴェネツィアワインをがぶ飲みしているのだ

これ以上の贅沢はあるまい

「ようし、音楽流すぜえ！我が愛しのデイキシランドジャズだ」

「……ゴクゴク、つぶはあ！やつぱり、ワインはジョッキで飲むに限る」

「ドイツに伝わりし800年の伝統その2！極太ソーセージ10本かぶり付き！」

とは言うが、口に放り込んだソーセージはドイツ産ではなくアメリカから輸入された

ものだ

それに先ほど飲んだビールも3本ともカナダ産

そう、このパーティにドイツ産のものは一切使われていない

見えない嫌がらせほど、性質のワルいものはない

「お〜い。酒がなくなつたぞ〜」

「ほいよ」

「ん…ぶふええ！何だこりや!？」

「ああ、すまねえ。お前ブランドーはダメなんだよな。こつちがワインだ」

「つたく、最初からちやんと渡しやがれ」

キュポン！

コルクの音が小気味良く響く

銘柄はシャトー・マルゴー

フランスで最も格式高いボルドーワインだ

ほのかな酸味が舌を刺激する「女性的な味」にボニートは感嘆を禁じ得ない

「見よ！我がドイツに伝わりし800年の伝統パート3！逆立ちビール飲m…」

「もう、そういうのいいから」

「えっ、うわあ！ちよつとうわっ!」

一つだけ補足することがあるなら、ワインというものは好き嫌いというより飲める飲めないのどちらかだ

体質の問題といったほうがよからうか

少なくとも、通ぶりたい連中が最初に飲んで酷評するというのはよく聞く話だ

「しつかし、ええ？ 豪勢なもんだな。幹部つてのはそんなに儲かる仕事なのか？」

「そりゃあな。どこぞのフーテン気取りのテンガロ暗殺者に比べたら……サラリは良いほうだ」

「フーテンとはひどいな。せめてボヘミアンだろ」

どちらも似たようなものだと思うが、どこかに違いがあるのだろうか

だが、ホル・ホースが奔放無頼の生活を送っているのは確かだ

ある時は南米の大農場で、またある時は中央アジアの山岳地帯で、と世界を駆け巡っている

そして今はイタリヤに

「おい、グーデン。何かしろ」

「待つてました！ 見よ我がドイツに」

「だから、それはいいって！」

「んぎゃー！」

「じゃあねえ。どれ、今度は俺がやってやろう」

「『皇帝』の早撃ち披露とかは見飽きたぞ」

「誰がそんなせこいことするか。レッドソックスの応援歌だよ」

ナポリにボストン野球の歌が聞こえる

サツカーの町だからできる芸当であろう

「負けてらんねえな、俺たちもナポリの歌だ！グーデン！」

「いや、僕、ディナモのファンなんで、そういうのはちよつと」

「……………」

~~~~~

次の日

ボニート達は非常に厄介な敵に遭遇していた

お片付けだ

二日酔いの頭にはきつすぎる

「グーデン、その顧客名簿持って来い」

「はい」

「これどこに置いときやいいんだ？もう、字が読めなくなってるが…」

「よこしな…何だ3年前の決算用紙じゃねえか。捨てる捨てろ」

パーティのあとの片づけほど、楽しくないものは無い

何が嫌かと聞かれると、その荒れ果てた部屋が自分たちの手によるものだからだ

酒浸しになったソファ、食べ物のカスが挟まっているファイル、床に散々と付着しているチーズ

どれもこれも、自ら進んでやろうという気にはならないものばかりだ

「ピザもひっくり返っちまってんじゃねえか…濡れ雑巾！」

「すまねえな、ホル・ホース。水道はこの前止められちまってなあ、唾でもつけといてくれ」

「唾でも？それがあるじゃねえか」

ホル・ホースが指さしたソレ

昨日のパーティで残ったスコッチウイスキーだ

しかし、それだけはさせてなるとボニートは抱えて後ずさりした

「これは今日の晩酌に使うの、床拭きなんてもつたいねえや」

「だから愛飲者気取りは面倒なんだ。まあ良い、ちようどころいうものがある」  
積まれたごみ山の底からもう一つボトルを取り出した

産地ボリビアの銘酒、シंगाニだ

バケツにそれを注ぎ、雑巾を浸す

実に頹廢的な雑巾がけだ

「ボニートさん、台所掃除してたらこんなの出てきたんですけど…」

「ん？ああ、それなあ…確か…」

「確か？」

「そうだ、思い出した。ブラジルの知り合いから貰ったお麻薬だ」

「お、お、お麻薬うううううう!?!」

別にそこまでビビる事ではないだろう

ギヤングの事務所にある白い粉といえは大体察しがつくもののだが、グーデンにその耐性はなかったようだ

「ちゃんと管理してくださいよ！小麦粉の隣に置いてあったんですからね」

「今度からコシヨウの横に置くようにする」

「そういう問題じゃ……」



抗議の声を上げようとするが、無駄だと悟ったのかそれ以上は言わなかった  
今思えばこういうことは何度かあったのを思い出す

電話のメモ帳代わりに土地の権利書に書こうとしたのを必死で止めたことがある  
これからもグーデンの苦労は続くであろう

「おい、シンガニ足りねえぞ。やっぱりスコッチじゃねえとな」

「あー、ばかばか！汚い手で触るな！折角のラベルがベタベタになっちゃうじゃねえか、  
もう可哀想だったねスコッチちゃん」

「……しやーない」

「あれ、どこに行くんですか？」

「シンガニが無いんじや、ビールで拭くしかないだろ」

「ビールですか………ん、ビール？ホル・ホースさん待ってください！ビールはダメで  
す！それ僕の晩酌に……」

「なあにが晩酌だ、どいつもこいつも！ビールなんて大衆蒸留酒、そこいらの安物スー  
パーで買えるだろうが！」

「や、安物!?!あれはドイツの教会で作られた至高の逸品ですよ！」

「クライストの血はぶどう酒だ。麦じゃねえ」

「そ、そんな〜」

この3人の思考回路にミネラルウォーターを使うというものはないのだろうか

シンガニの上にビール、とてもじゃないが好いブレンドとは思えない

どうせ床に伸ばすのならウーロン茶のブレンドをおすすめする

「ボニートさくん、僕の晩酌が〜」

「おお、哀れなるグーデンドルフよ。それではこの1000ユーロを使いビール5本、レタス3玉、ドレッツシング、パン5斤を買いに行くがよい」

「う、う…」

「鵜?」

「うわあ〜ん! 領収書ボニートさん名義にしてやる〜!」

グーデンが泣きながらに事務所を飛び出した

この前のトンネルで受けた仕事との落差に泣きたくもなるだろう

「寄り道すんじゃないやねえぞ。横断歩道は手を上げろよ。寝る前に歯あ磨けよ〜」

「診断書、ボニート・E・ゼルビーニ。身長191cm、体重75kg、虫歯経験有り……」

「恥ずかしいこと言うんじゃないよ…」

どうにも締まらない男だ

## 第28話 ワインセラーの明日②

「それで、お前いつまでいる気だ？」

「次の依頼が来るまで、って言やあそれっぽいけど、実のところ食い扶持が無くてな。しばらく、ここでおまんま食わせてもらうぜ」

「報酬から色々減らしとくぞ？ 食費・光熱費・通信費とバカにならねーんだからな」

パーティの片づけが終わった頃には夕食時となっていた

今日の食事当番はグーデン

明日も明後日も、昨日も一昨日も

「ご飯出来ましたよー」

「また、豆とベーコン炒めかよ。もうちよつとバリエーション増やしやがれ」

「この前『ドイツ料理に飽きた』って言ったじゃないですか!？」

「やかましい！ 朝昼晩とワインナーってどういう神経してんだよ」

「まあまあ、そうカツカするんじゃないやねえよ。俺あ嫌いじゃねえぜ、この19世紀辺りの貧乏人が食べべそうな料理はな」

「21世紀になっても、貧乏人の食事ってのは変わんねえわけだ。歴史的悲劇ってヤツ

だあね。ホントに」

しかし、食うものは食うようだ

ベーコン2切れを平らげ、レンズ豆を一気に飲み込む

ボニートに至っては、おわかりまでしている

隠し味のブラックペッパーが効いた証拠だ

「テレビ見ても良いか？世界放送で好きな番組があつてな……」

「ピンクチャンネルはホテルで見ろよ」

「バカ。『古代自然旅行記！』視聴率100%以上は当たり前前の冠番組だぞ」

西部の見た目とは裏腹に、趣味は中々博学なもの

様々な大学の教授を招き、地球の動きをCGで再現するという月並みな内容だが、教授達が激しく論争し合うことが偶にあるので、一定の視聴者から支持を得ている

しかし、番組はまだ始まっていないようだ

その代わり、今日起こったことがニュースで報道されている

『今日の午後15:00に福祉制度の改善を求めるデモが行われました。参加者は現在の政府に対して……』

「……このアナウンサー可愛いな」

「見る目あるねえ、そりゃ女子アナ番付3位の女だからな」

「じゃあ、あれなんですか？」

グーデンはなぜか細かいところに目が行き届く

この前のヴェネツィアでもそうだったが、眼球の中にセンサーでもあるのだろうか  
指さしたのはアナウンサーの薬指

綺麗に光るリングが……

「人妻かよ……生憎寝取りの趣味はねえぜ」

「守備範囲の狭い奴だ。そんなんじや男も幸せにできないぞ」

「そうだそうだ！」

「グーデン、今月と来月と再来月の給料ナシな」

「……ホル・ホースさん！ボニートさんの悪口言うのやめてくださいよ！」

随分と現金なものだ

ニユースは次々と話題を変えていく

州知事選の結果、助演男優賞など……

尺が長いわけではないから、どれもさわりを説明しているぐらいだが

『チェリッツィオ氏はこれで3度目の助演男優賞を受賞したことになり』

「俳優は良いねえ……俺も昔はショーン・コネリーに憧れたモンだ……」

「僕、新聞取つてきますね」

「おーい、洗うから皿持ってこーい」

今日の皿洗い当番はボニート

エプロン姿が全く似合っていない

だが、手際が良いのは認めよう

昨日のパーティーの分も含め、皿という皿が乾燥台に置かれる

『イタリアを代表する宝石商、ヌンツィオ・ペリーコロ氏が銃殺されました。犯人は不明ですがまだこのイタリアにいると警察は推定しています』

ボニートだけでなく、この部屋の全員がテレビに見入った

パッショーネの大御所、ヌンツィオ・ペリーコロ

表の世界では宝石商として業界を渡り歩いてきた

今、イタリアで出回っている宝石のすべてにペリーコロが手を付けたという噂まである

『同氏の莫大な遺産は、息子であるジャンルツカ・ペリーコロ氏に相続されるということですよ』

「莫大な遺産ねえ……知ってるか？暗黒街で聞いた噂だと、大手ヘッジファンドの株も大量に持つてるそうだ」

「……………」

ボニートの眉間に皺が寄っていた

何か気に食わない事でもあったのだろうか

彼は警戒している

いや、怯えているといったほうが良いかもしれない

「ボ、ボニートさん！ボニートさん！」

「……………どうした」

「これ……………ポストに……」

く当選おめでとうございます！く

20—15—18—9—14—15の番号を当てたあなたに45190ユーロの賞

金が贈られます

神と精霊の息吹あらんことを！

く全国情熱宝くじ協会く

「隠語……読めるか？」

「……………なるほど、ね」

この隠語は幹部クラスとなったボニートにしか分からないように細工されていた

エプロンを雑に畳み、クローゼットから黒の背広を取り出す

鞆に放り込む物も最小限必要な物ばかり

ライターやタバコ・保険証にオートマグ、偽造パスポートにそれから……

「面倒だ。グーデン、お前はここにある荷物をまとめておけ。それと、ありとあらゆる文書は全て燃やせ。いいな？」

「何でそんなことを……ああ、分かりましたよ」

最近、グーデンの勘が冴えているような感じがする

やはり一線を越えたことが一番の刺激なのだろうか

ぜひ、私も越えてみたいものだ

「ホル・ホース、お前は……」

「皆まで言うな、付き合ってやるよ。どうせ、だ」

「額をねだるなよ」

「冗談」

彼はもうここに戻ってくることはない

今から葬式に行かねばならないから

それは奴の葬式か、はたまた自分の葬式か………

答えは、主のみぞ知る



## 第29話 伊仏直行便①

「失礼。当選番号を」

「20—15—18—9—14—15」

「……ふむ、確認しました。受け取りはあちらで行われます」

「ん」

堅苦しいのは苦手なようだ

喪服はすでに着崩されて、葬儀に来る者の態度ではない

教会のキリスト像の裏には似つかわしくないが、雰囲気醸し出す階段があった

背徳とは言わないまでも、不信心だ

「……」ゴシックだな」

ホル・ホースの博学ぶりは見事なもの

この前のテレビ番組でもそうだが、西部の見た目をタキシードに変えたほうが女性に

モテると思うのだが……

そこはポリシーというやつか

この教会はある時、言葉は相応しくないかもしれないが経営不振という状態だった地元の人間はそれを知ってか積極的にこの教会を利用してくれたのだが、それで賄えるような状況ではなかった

屋根の隅には蜘蛛の巣ができていたり、告解室の壁は汚れているひどいときはステンドグラスに変な霏のような何かが覆っているときも……修理できないわけではないが、それには多額の費用が掛かる

更に言うなら、この教会が建てられたのは今から400年前。選ぶ相手も限られ、当時の建築技術を純粹に受け継いでいる大工はヨーロッパでも極少数

これ以上はダメかと神父が考えているときに手を差し伸べたのがパツシヨーネ費用は全て工面し、あろうことか政府からの補償まで取り付けた裏の荒地地を墓場として拓き、図書館も小規模ながら設けた  
そしてもう一つ……この地下聖堂である

ここではパツシヨーネ主催のイベントを主な目的として使用されている聖職者である神父もこれには頭を抱えたが、費用を負担してくれた手前大きく抗議することはできなかった

パツシヨーネ側も変ないざごきは起こしたくないらしく、この聖堂を使用するのは極力控えており、身内での闇競売や幹部の葬式ぐらいにしかここを使うことはない

「……………」

「こりやまた…すごい数だ」

目の前に広がる喪服の男たちは、イタリア各業界のトップクラスの人間ばかり  
宝石商としてではなく、ギャングとして付き合ってきた者たちだ

ステージ下手側にいる司会にスポットライトが当てられる

『皆さん、ご多忙の中お集まりいただき誠にありがとうございます』

「ご多忙？」

「すごい暇でした」

『それではこれより……ヌンツイオ・ペリーコロ氏の葬儀を執り行います』

緞帳が上がると、ステージには宝石が一つ

パパラチア・サファイア 36.7カラット

マダガスカルで大量産出されたものではなく、銘地スリランカで得られたものだ  
保証書もついている

『では、まず遺産の分配から！産地スリランカ、パパラチア・サファイア。価格は50万  
から！』

—62万！—

—まだ、買うときじゃないな—

「フェルメールは……3個目か」

「なるほど……葬儀の名目で遺産の競売か」

「二応は合法だぜ。ニュースで聞いたが、ペリーコロさんの遺産は何割かを博物館や知り合いの宝石商に譲るって形になったそうだ。尤も、その宝石商・博物館を経由してこの競場にあるって寸法だが……」

「怖いねえ……ループルも押さえてんのか?」

「フレンチにまで手を伸ばそうとは思わねえよ」

パッショーネはあくまでイタリアのギャング

それに現在内乱とも言える状態で他所に首を突っ込むのは非常に危険だ

他にも、敵対ギャングの残党や、最近台頭の兆しを見せ始めているロシア系ファミリーの存在も忘れてはならない

「んで、お目当ての品は?」

『では次! 古くは中国、宋の第2代皇帝太宗の書簡! お値段は89万から!』

「品じゃない、人って言った方が良いな」

「人身売買か……人道上の云々を疑うぞ」

「反社会的な人間に人道を説かれてもねえ……待ち合わせだよ」

噂をすればなんとやら

2名の黒服がボニートの前に立った

「ボニート・E・ゼルビーニ様でございますね」

「ご明察」

「では、私達の後が続いてください。：お連れの方は？」

「気にしなくていいよ、ちよつとここの品揃えを見てみたいからな」

「そうか、じゃあこれ使ってくれ」

ポケットから出てきたのは紙切れ1枚

いや、ただの紙切れと思うなかれ

中央に輝く数字は250万ユーロ

円換算3億5000万相当の価値だ

「報酬とは別個だよな？」

「どうせだからパーツと使い切れよ」

「お大尽！良いこと言ってくれ」

~~~~~

特別室には車いすに座った一人の老人

その周りには、側近とみられる者たちが囲むように立ちふさがっている

「ボニート君……か」

「お久しぶりです。Mr. ピエモンテ」

Mr. ピエモンテ

ヨーロッパで行われる主要な闘競売には必ず現れるという、その道の大御所だ

パッショーネの所属でもなく、どの組織にも属さず、しかしその存在は認められている。数々の競売イベントを主催・プロデュースしてきた手腕が見事なものだからだろう

対立が無かったと言えば嘘だ

ある仏画を巡って、死者38人の事件を引き起こした事があるほどに

双方ともこれ以上争うと警察からの監視がきつくなると判断し、一応の和解はしたそう
うだ

それ以降は、比較的良好な関係を保っている？という具合（あくまで比較的）

御年82歳、しかし驚くことに56歳年下のウエイトレスと結婚するなど、老体に見
合わぬ精力ぶりを見せている

「ポルポは死んだそうな……いやあ、良いことだ。奴には特に思いがあつてなあ」

「同じく」

「カーハツハツ！小僧が偉そうに」

この人物はどうも苦手だ

ポルポと同じニオイがする

自分は動かないくせに、動いている奴以上に仕事ができる性質だ

「ペリーコロもこのザマ。良い良い、社会はこうして秩序を取り戻すべきなのだ。そして、いずれは君や君のボスもね」

「生憎とご老体のぼやきを聞くために、ここに来たわけじゃないんですが……」

「覚えておきたまえ、老体のぼやきは大統領の演説より価値があるぞ。……色々と稼業をやってきたが、全部足せば5000万ユーロはある。そう、私のそれは5000万ユーロなのだ」

「羨ましいものですか、精々250万の自分も学びたいものです」

「受講料は5000万ユーロだぞ」

「ミスター、そろそろ出なければ奥方との食事に……」

「そんな時間か……では、行かなければな」

パチン！

ピエモンテの指が鳴ると同時に、側近の1人がボニートに1冊のファイルを渡した

「君の目当ての品だ。代金はこちらから受け取っておこう」

「助かります」

『それではあく…その名はワイルド・ビル！保安官ヒコツクが被ったといわれる帽子！
DNA証明書付き！ですが、ちよつと痛んでおりますので……10万から』

—15万！—

—いや、18万…18万5000！—

「ヒコツク！250万！おい、ここに250万があるぞー！」

「…確かに、250万。ファイル代きつちりと受け取りました」

「えっ?」

握りしめていたはずの小切手が、するりと手から離れた

「ちよ、ちよつと。俺の250万、返せー！ドロボー！」

「そうだ、まだ言いたいことがあった」

「?」

ピエモンテが車に乗りかけたところで、ボニートに振り返った

側近から早く乗るよう催促されるが、鼻で笑い拒絶する

「社会の秩序の回復……それはどうでもいいが、現にこうしてポルポもペリーコロも死んだわけだ」

「……冥福を」

「思わないことは口にしない方が良い。だが、それはね？ 私達にも言えることだと思う」
ピエモンテの脳裏にはある風景が描かれていた

走馬灯とも言えるような、自分の半生を描いたものだ

肉屋での下働き、シヨバ代を巡り闇社会に足を踏み入れ、時にはファシスト党と争うこともあった

「覚悟しておきたまえよ、ボニート君。我々のような……良くない人間はね、生き死にを繰り返すだけの、それだけのものだ。あまり詳しくないが半永久的なものだ」

「半永久……」

「うん、半永久にね。ペリーコロやポルポが死んでも代わりに奴ができるんだ。君も私も、それこそ君のボスも」

「ピエモンテ、もうこれ以上は……」

「分かったよ、面白味のない奴だ」

車に乗り込むが窓は開け、にやけ面をボニートに見せつける

嫌な顔だ。悪魔というには優しすぎ、天使というにはキツすぎるその笑顔

「最後に、今の時代我々のような人間はもう本業で死ぬことはない。カポネやルチアーノは別格だが、我々はもう無理だ……ペリーコロはそれを分かっていたんだろ。今やメディアは宝石商として彼を扱っている」

「ピエモンテ、だつたらあなたは何なんだ？ パツシヨーネの中にはあなたを尊敬する奴だっているですよ」

ボニートは苦手な人物ではあるがピエモンテを尊敬していた

どこの組織にも属さず、たった一人でイタリアの闇にその存在を示した男は後にも先にも彼だけだと信じている

敵対していたとはいえ、そうピエモンテはたった一人で立ち向つた

誰も頼りにせず、側近たちを別の国に避難させた上で『パツシヨーネ』と戦いを繰り広げた

「嬉しいね、若者にそう言われると。この薄汚い82年もやりがいがあつたということだ」

「ピエモンテ……」

「だが、嫌な時代だ。ギャングはギャングとして死ぬことが許されないんだから……！」
車の急発進にボニートは反応できなかつた

いや、反応しなかったというのが正しい

「ギャングがギャングとして死ねない」

大御所が抱え持つ葛藤にボニートは共感した

ピエモンテ自身は裏の人間であるがギャングではない

それどころか、ギャングと対峙する職業だ

「(ピエモンテ……もう、あなたとは会えんのだろうな)」

「(だが、色々学ばせてもらったぜ)」

ファイルの中から一枚の紙が飛び出す

今日の風はやけに強い

「(目指すはフランス……そこに奴がいる!)」

~~~~~

### 暫定成立名簿

ルツチア・パルド氏   ベルリンの壁の破片   38万ユーロで落札

アレクシア・アモロス夫人   タトラt97   400万ユーロで後払い

ミスター・モンコ氏 チヤイコフスキーの手紙 137万ユーロで落札

アンドレイ・ブルシアーノ氏 ナポレオン肖像画 200万ユーロで落札

.....

カルロ・アバーテ氏 ロッキード・コンステレーション 3000万ユーロで落札

## 第30話 伊仏直行便②

「いきなり、血相変えてどうした!?家の鍵でも閉め忘れたか?」

「それはありませんよ。僕ちやんと閉めましたし」

「ああ、もう!これやるから少し静かにしといてくれ」

イヴェコトラックは公道をしたらめつたらに走っていた

何度か他の車にぶつけてしまったがそんなことはお構いなし

制限速度も完全に無視しており、警察に通報されるのも時間の問題だろう

「運ちゃんとしての最低限のルールはどこに行っただんですか!」

「ハッハー!存在自体が御法度なこの俺に、道交法なんて紙屑みたいなもんさ!」

「暫定成立名簿?どれどれ……」

「丁重に扱えよ。250万の品だからな」

「こんな紙の束が250万……250万……250万?俺のヒコックを奪ったのはてめえ

か!」

「だから、や・か・ま・し・い!」

ボニートのハイテンションは2人が引くレベルのものであった

いつも以上のハンドルさばきは、曲がり道も難無くカーブしている

声の大きさも、まさに世界が勝手にイメージするイタリア人という具合だ

「北軍アメリカを生きた保安官のカッコよきは分かんねえだろうな！」

「ちよつと、借りますね。……………うわあ、経歴真つ黒な人がいっぱい」

例えば、タトラt97を購入アレクシオ・アモロス夫人

ギリシャの大富豪と再婚したが、その6か月後大富豪が突然の事故死

大富豪の息子に遺産が継がれるはずだったが、その息子も自殺

ある記者は夫人を「遺産目当ての女」と題した記事を掲載

翌日、ある記者は失踪したそうな……………

この事から、裏ではカマキリ夫人と呼ばれている

現にパツショーンネも関連している。パーティーに出席している姿も確認されている

「アンドレイ・ブルシアーノ……………聞いたことがある。美術品のためなら手段をいとわぬ

クズ野郎って、同業者からも評判だぜ」

「ルツチア・パルド。父アリアノ・パルドは大戦時にナチのシンパだったそうで、いわゆる頹廃芸術品を買い漁ってた模様。それを受け継ぎ、博物館に法外な値段で売り飛ばしているみたいですよ」

「要は全員日陰者ってことだ。世界観で見るなら結局俺らみたいな連中だよ」

「それで？我らがボニート様はどこに行く？予定で？」

ファイルを投げつけた時と同じ動きで、地図帳を後部座席に放り込む  
亀の中にあつたものを拝借してきたものだ

イタリアからフランスに向かって赤い線がひかれている

「フレンチには手を出さないんじゃないか？」

「フランスパンだよ。無性に食べたくなつて仕方がないんだ」

「事務所にあつたんですけど……………」

「……………」

「おい、お前何か隠してるだろ」

ギクツとは言わないまでも、ピクツとはした

疑問にうまく答えられないのか、鼻で笑い運転に集中しようとするが

ホル・ホースはそれで許してくれるほど大人じゃない

後ろからいきなり首を絞められる

思わぬ攻撃にボニートは何とか耐え、タップをしながらもトラックを道路脇に寄せる

「何しやがる！」

「そりゃ、こつちのセリフだ！急に仏頂面になつたと思つたら免停上等のスピードでフランスだと？ル・マンにトラックがエントリーするなんて聞いたことがねえぞ！」

「ベントレーじゃなくて悪かったな！だがな、急がねえと連中は今すぐ飛んじまうんだぞー！」

「連中？連中って一体何だ？」

「あつ……………」

しまったという表情を顔に出してしまい、ホル・ホースからの疑惑の視線が更に強くなる

「答えろよ幹部様。じゃなきや、俺はここで降ろさせてもらうぜ」

ドアを開け片足を外に投げ出す

そこまでされたら、ポニートの顔も思案顔になる

3分

額に手を付け、うんうんと唸りながら3分

意を決したのか深呼吸してホル・ホースに向きなおった

「さあ、どうだい？決心は」

「ああ、分かったよ！話せばいいんだろ、話せば」

座席に深く座り、空を眺める

目をつぶって記憶を掘り起こさなければならぬ

あれは何時だったか、これは何時だった、それは何時かわからない



「俺がまだガキの時だ」

くくくくくくくくくくくくくくくくくくく

ちようど8つの頃だったかな……初めてポルポさんから親父の事、アルバーノの存在を知った

驚いたよ、それまでに俺にとって父親はジエノバのホームレスだったからな

しばらく経って、俺がやつとパツシヨーネだつて肩で風切れるようになったぐらいにポルポさんから呼び出しをくらった

何かと思つたんだが……アルバーノのことについてだった

だけど、俺はもうそういうのは吹っ切れたつて言った

……珍しくな？ポルポさんが歯切れ悪くその話を終わらしたんだよ

何時もは、無神経にすげすげと葬式でも悪態吐くような人が、後ろにゴロンと寝返つて「もう、帰りましたまえ」だと

まあ、俺もそこまで気にしちやいなかった。それこそ吹っ切れてたからな

ある時、部屋の掃除をしているとき親父からの……アルバーノの方だ。手紙が出てきた

使い道がある訳でもないからそのまま捨てようとしたんだが……捨てられない

気の迷いだ、今度はストーブの中に放り込もうとしたんだが……放り込めない  
そうだよ、知りたくなっちゃったんだ。アルバーノの言う真実ってやつをな  
仕事の合間を縫って幹部連のおじいさま方や古株の構成員に色々と取りあってみた  
返事は全て「ノン」

当たり前だ。裏切り者と親しくしていましたがなんて口が裂けても言えねえや

1人だけ、答えてはくれねえがそれっぽいことは言ってくれた

又ツイオ・ペリーコロ

あの人ホントにすごいよ

後ろに窓があるつてのに笑いながら思い出話してくれたよ

色々新しいことも聞けた

アルバーノは幹部の中でもやり手だったこと

その死後、アルバーノの部下たちはボスに反逆を企て暗殺チームに掃除されたこと

何でも話してくれたよ

案の定収穫が無いモンだから、もうアルバーノに関することは忘れようとベッドに  
入ったその時。俺の頭にインスピレーションが沸き起こった

なんでペリーコロさんだけが答えてくれたのか

俺は早速ペリーコロさんのアリバイだったり経歴だつたりを調べ始めた

アルバーノが死んだとき、ペリーコロさんはシンガポールで宝石商の仕事をしていた  
そうだ

それはいい

だが、興味深いことを聞いた

パツシヨーネの2次組織が一斉に会合を開いたとき、ペリーコロさんの仲介で参入した組織のトップたちにあることを尋ねた

何時どこでペリーコロさんと交流を持ったか

ある奴は「1970年10月8日ミラノで」と答えた

隣の奴は「同じく1970年10月9日ブフテアの地下街で」と答えた

……おかしいとは思わねえか？

~~~~~

「つまり、ペリーコロは2人いると？」

「ああ、イタリアからルーマニアに行くってなるなら2日以上はかかる」

「だけど飛行機を使えば……」

「無理だ。当時のルーマニアはチャウシエスク政権が共産社会とやってたときだ。西側とは比較的交流はあるが、それでも入国の制限は厳しい。不法入国ならなおのことだ」

「ますます話が見えねえな……」

ペリーコロが2人いる

ボニートの行き過ぎた憶測に2人は頭を抱えた

ドツペルゲンガーを認めると言われて、認めるほど大人じゃない

しかし、ペリーコロが2人いるというのも考えようだ

「フランスにいるつてのは？」

「カルロ・アバーテ。元々はペリーコロの側近でシマの10分の1を受け継いだ奴だ」

「それで？」

「そいつの買ったロッキードは、フランスのド・ゴール空港建設予定地跡での引き渡しになるそうだ」

時のフランス政府はド・ゴール空港（パリ国際空港）をニースに作る予定であった

しかし、現地の住民から猛烈な反対に遭い当初の計画は頓挫。議員たちはこれに喧々の議論を繰り広げ、ようやく現在のロワシー＝アン＝フランスに決定した

となると、ニースの予定地にある建設途上の滑走路と格納庫を撤去することになるのだが……ここで問題が起きた

建設会社が引き受けてくれないのだ

そうヨーロッパ中の全マフィアがこの予定地に目をつけ、圧力をかけたのだ

ある議員は「軍を使い直ちに撤去に移るべし」と声高に唱えたが、その翌日に「やっぱり軍よりも民間会社に任せられた方が良いですね」と手のひらを返した

「ロッキード……えらく古い飛行機ですね」

「全くだ。3000万もするピーナッツなんて恐れ多くて手が出せねえや」

懐かしい事件だ

バックとギアチェンジを使いこなし道路に戻る

さっきの反省からかスピードは少し落としている

「だが、何故ペリーコロを追う？ポスへの得点稼ぎか？」

「…俺はな、嫌でもアルバーノの子供なんだよ。血筋なんぞに未練はないが、どうも気になっちまったんだ、アルバーノの言う真実をな」

「そうか……そうだよな、お前は生来好き嫌いはしない性質だよな」

「だ、だけど……ポニートさんとペリーコロさんに何の関係が…」

後部座席から顔をのぞかせるグーデンにポニートは少し顔をしかめた

「アルバーノが死んだあと、ペリーコロはガキの俺を探していたらしい……」

「良い事じゃねえか」

「最後まで。そしてペリーコロは小規模ながらゼルビーニ夫妻の葬式まで執り行った、

ポスにバレぬよう極秘でな」

「ほうほう」

「夫妻の死んだ明後日にな」

「明後日……うん？ おい、アルバーノが死んだ時ペリーコロは……」

「そうさ、シンガポール。今と違って空港は整備されちやいねえし、それどころか1970年代の東南アジア、色んな意味で簡単には入れず出れずだ」

「マジで2人いるってことかよ……」

「あくまで仮説だが、本体は一つだけ」

「本体……じゃあ、ペリーコロさんは！」

「そうさ！ 野郎は……」

スタンド使いさ

くフランス　ド・ゴール空港建設予定地跡く

最近の若い者はどうも勘が良い

わしも昔はあれぐらいあつたものだが、どうも『老い』というやつはそれをゆるしてくれない

色んな事があつたなあ……

国立銀行の襲撃・中国からエジプトへの密輸・東側諸国から亡命の手引き

何でもやつた

それこそファシストの連中ともやりあつた

パルチザンの友人は今何をしているんだらう

地下でヒソヒソと爆弾を作っていたころが懐かしい

そう考えるとこの時代は非常に息苦しいものだ

どのギャングも波風立てることを恐れ、政治家の真似事ばかり

唯一、力を使うとしたら反逆者に対してのみ

臆病な連中が増えた

若い衆だけにそういう気風があるなら、時代の流れと割り切っていたが…幹部連までもが及び腰の能無しばかり

比較的強行手段の多かったポルポも死に、後に残るはわし一人
冗談じゃない ふざけるな

この老骨にも手段というものはあるのだ

火炎瓶を黒シャツ隊に投げたことがあるか？

敵対ファミリーのボスを直にゼロ距離で撃ちぬいたことがあるか？

わざわざコロンビアに行ってマリファナ農場を空爆したことはあるか？

わしはそれを全てやってのけたぞ！

老人の下らぬ過去の栄光話と受け取るも良い

それこそ、この職種だ

いくら難題をこなしたとて、2代以上語り継がれる事はない

……ああ、いかん

少々熱くなりすぎた

だが、一つだけ言える

もう昔ながらのギャングはいないのだ

サツが来たらガンを飛ばし、みかじめ料を強要し、鉄の掟を互いに守り……

ふふふふ、やはりわしは時代に取り残されたジジイというわけだ
それで良いのだ

すでに根回しは完了した

ニューヨークマフィアも動く気配はない

この世代を塗り替えてやる

2001年！全ギャングは1950年代に遡る！

第31話 作戦名シャルル・ド・ゴール①

「フランスに入りました！ニースまであとちよつとです！」

「そうかい！」

途中、サービスエリアで買ったフランスパンをほおぼりながらカーブを効かせる

当初の目標「フランスパンを食べる」は達成したが、スピードが落ちる気配はない

元とは言え、相手はパツシヨ―ネを仕切っていた人物のうちの一人だ

「肝心のペリーコロを狙う理由を聞いてなかったなあ！教えてくれよ」

「これだよ」

運転に集中しているため、まともに取り合うことはできないが手紙を見せた

アルバーノからの手紙だ

「コイツの言った真実つてのが気になつちまつて仕方がねえ、やっぱり俺はアルバーノの子供なんだよ。恩も義理も感じちやいねえが……………明かしてやりたいのさ。なぜ死んだかぐらいは教えないと可哀想だろ？」

「どうも引つかかっちゃうな……………いくら親父でも会ったことのない奴にどうして命を懸ける？」

「言ったはずだぜホル・ホース。俺は結局アルバーノの血を持つちまったんだよ……嫌でもな」

「気乗りしねえが……そうだよな、お前は生来好き嫌いする性質じゃねえな」

「お褒めの言葉ありがたい………見えてきたぜ」

視線の先、シャルル・ド・ゴール空港建設予定地跡

この前にも言ったとおりだが、時のフランス政府はこのニースの辺りに作ろうとしたが、現地住民の猛烈な反対に遭い現在の場所ロワシー＝アン＝フランスに建設計画を移行したという話だ

しかし、建設途上の滑走路が残っている

本来なら解体されるはずなのだが、請け負ってくれる建設会社がない

当たり前だ

ヨーロッパ中のマフィア・ギャングがこの場所に目をつけているのだ

迂闊に手を出すことはできない

左派政党を支援する政治団体が「他国の企業に任せるべき」とデモを行った翌日に「やっぱり国内企業の方が良いですよ」と転向したことから、その重要性が分かるだろう

「待ってるよペリーコロ………signoreなんてつけてやらねえからな」

~~~~~

「ボス、出発の準備ができました」

「うむ、そうか」

遂に別れの時だ

イタリアよ、ヨーロツパよ

わしは故郷を捨てることになる

錦の御旗を飾れなかったのが残念だ……いや、後悔をしてはいけない

もう24年前に決意したじゃないか

「ギヤングをギヤングとして……宿願を達成させなければ……時間がない」

時間というよりも寿命といったほうが良かったか

あと20年！20年生きなければわしの人生は泡になってしまう

人生だけではない、ギヤングという職業もだ

「チンピラ如きになつてはいかんのだ。確かに低俗な存在ではあるが、どこか高潔さを  
感じさせなければギャングとは呼べん」

ヴィトー・コルレオーネになれというわけではない

マイケルにもなる必要はない

現実世界において『自分』というブランドを確立させなければ、この闇社会に名を刻  
むことはできない

「ぐあつ！敵だ、応戦！応せ、ぬああああ！」

「一体どこだ、どこから……いぐあ！」

味方が全滅しようと眉を動かしてはならない

この業界に入つて一番最初に教わつた言葉だ

今でも、守っている

「……………」

「血筋は争えぬというものかな？ブランドはある様だが」

ええ？そうだと、ボニート君

~~~~~

彼らは2手に分かれた

ボニート単独で対ペリーコロ

ホル・ホース、グーデンのコンビで格納庫の制圧の寸法だ

「グーデン、敵を見つけたら確実にヘッドショットを決めるよ」

「……はあ……はあ」

呼吸を整えろ、頭をからっぽにしろ、敵はヘッドショット

3つの教えを叩きこまれ、いきなり実戦に使わせる

やはり、銃社会の人間はどこか意識が違うのだろう

それでもしなければ生き残れないというのも否めないが

「1、2、3……」

見事に命中

ぱつと見だが、視認できる敵はもういなくなつた

後は格納庫の中にいるペリーコロの手下たちを始末するだけ

ここからはホル・ホースの出番だ

「う、腕シビれて…動け、ない…………どはっ」

「…おい、しつかりしろ。援護射撃がまだ残ってんだからな」

「はい…だけど休憩させてくらはい…………」

「甘えたこと又かすんじやねえ。……………行ってみるとします、か」

『皇帝』をペン回しの要領で弄び、草むらをかき分けていく

外には18人の手下たちがいた

経路上考えるなら中にはその2、3倍の数があるハズ

だが、そこに『ペリーコロ』の不透明さが邪魔してくる

死んだと公式に発表されたとき、大部分の部下は息子ジャンルツカやその他の幹部の下に行ったと聞く

ならばあの18人はこの事を知っていた少数派ということになる

「(頭脳明晰なオレとしちゃ、もうちよつと深く考えてえが…………まあ、良い。出てきたらぶっ放す、それだけだ。それに…………)」

ズオン！

「(銃声は聞こえないわけだしな)」

銃身を含め弾丸もスタンド

ならば、銃声もスタンドと考えるのがセオリー通りだ

格納庫に何か動きがあるようには見えない

「よし、じゃあ行くか……」

声を上げるも、行動は慎重であらねばならない

身を常に屈め障害物を行き来する

ドアの前に辿り着けば、更に神経を研ぎ澄ませろ

ノブを回すだけで気づく手練れがいるかもしれない

ゆっくりゆっくりゆっくり……

「……一先ずは成功か、ん？」

格納庫に侵入はした

しかし、まったくもって予想外の光景がホル・ホースの目に映る

いると予想されていたペリーコロの手下がいないのだ

まさか、外だけを固めていたという事なのか

そんなことある筈がない

唯一予想通りあるものと言えはこのロッキードの飛行機のみ

「うくん？外の18人で全員だった……まさかな」

拍子抜けもいとこだ

折角、『皇帝』のイカす銃撃戦を待ち望んでいたのだが相手がいらないでは話にならない

「グーデン呼んでこのロッキードに……なんてな！」

メギャン！

ホル・ホースはプロだ

プロ中のプロ

空気の微細な流れも肌で感じるほど鋭敏な感覚を持っている

だから、気づいた。自分の後ろを狙う者の存在に

「ヒヒヒッ、隠れてねえで出て来いよスナイパー。フェイスラインに自信が無いわけじゃねえだろ？」

——言ってくれるなホル・ホース。やはりお前は三枚目だ——

「初対面の挨拶に自分が二枚目っていうのはやめた方が良いぜ？それにお前は……いや、その声どこかで……」

黒いシルエツトに色が映える

カーキ色のシャツに迷彩模様ズボン、スキンヘッドには不可思議な刺青が彫られている

一番目を見張るのは腕と直結した猟銃だ

服装だけなら軍人だが、風貌は傭兵と言った方が良い

ホル・ホースは知っているこの男を

脳裏に思い浮かぶのは燃え盛る金庫に閉じ込められる自分

「相変わらずだな。その古臭い恰好といい、口調といい……ホル・ホース」

「お前にファツシヨンのセンスがあるとは思わなかったよ……『サンチエス』」

ホル・ホースと刺客サンチエス

最後の銃声は誰が鳴らすのか

第32話 作戦名シャルル・ド・ゴール（ホル・ホース）

「おい、グーデン。援護射撃中止だ」

『えっ？ホル・ホースさん、なんd』

ぐしや！

通信用のトランシーバーを踏みつける

これで無用な手出しは無くなった

グーデンには悪いが、1対1でやらなきや意味が無いんだ

「ボニートはペリーコロを、俺はお前を。ちようど良い塩梅じゃねえか」

「逆だホル・ホース。俺がお前を、だ」

コイツとの因縁は10年前のボストンに遡る

まだ俺が『皇帝』を発現したての頃だ

当時の俺は青二才よろしくバカやって色んな所を襲いまくっていた

宝石店や富豪の家……もうホント浴びるように強奪を繰り返していた

そのおかげかどうか知らないが、俺はボストン暗黒街の顔役になり、そこいらのマフィアからの勧誘もなか受けていたな……全部断ったが

ある日酒場で飲んだくれていた俺にある男が話しかけてきた

それがこの男、サンチエスだった

「何だそのテンガロハット？かっこいいと思ってるのか」

「バカには分からぬ漢の美学ってやつだよ」

メキシコ系アメリカ人というのが表での肩書だったが、実際はオレと同じようにスタ

ンド能力を使いあちこちを襲撃する一級の強盗犯

それも俺と同系統のスタンド。猟銃のスタンド

意気投合するのに時間はかからなかったさ

翌日には俺とコイツはコンビを組み、一人じゃ出来ない危険なヤマに手を出すことに

なる

結果は大成功

5：5の取り分で4万ドルという大金が互いの手に入った

有頂天つてのはあのことなんだろうな

それに気を良くした俺たちは手当たり次第に金を奪っていった

ボストンの地方新聞には「州民の敵」として顔は出ぬものの名を連ねたこともある

「だが、まさか生きているとは思わなんだ。あのまま炭になっている…そのハズなんだが」

意気揚々と強盗稼業に勤しんでいるとき、今度は州立造幣局を襲うことになった別になんという事ではない

州立以前に国立銀行に手を出した俺たちからすれば、小遣い稼ぎ程度の意識だった「ヒツヒツヒ、俺だけがなるのはどうも癪でな、お前にも体験してほしいんだ」

計画はこうだ

造幣局の主要な場所に爆弾を仕掛け、その混乱に乘じ俺は金庫の中を、野郎は印刷所からドルの原本をいただく

シンプルかつ原始的な方法

それですべてがうまくいく……ハズだった

金庫の中に入るまではいつも通り

だが、俺は騙されていた

中にある筈の金が一銭たりとも無い

単なる手違い、そう思い振り向いた直後火の手が回ってきた

本来の計画なら金庫に火が回るのは30分後

俺は即座に理解した。嵌められた、と

「ケジメつけに来たんだよクソ野郎。裏切りの代償は高くつくぜ！」

「お前がそれを言うか？ 殺し屋と傭兵を勘違いするなよカウボーイ」

造幣局からの脱出を図ったが、時すでに遅し

サンチエスは警備システムをいじくり窓という窓にシャッターを下ろしていた
万事休す

後悔と屈辱、そして諦観の念が入り混じるなか目に飛び込んできたのは完全密閉型の
大型ロツカー

脳内に溢れていたアドレナリンとエンドルフィンが告げた「あの中に入れ！」つてな
自分でも分かるほど……みじめだったよ。どん底つてのを味あわされた

「ぶちまけな……！」

B a m !

「おおっ……！」

事件の後、俺はボストンを去ることにした

プライドが許さなかった

確かに悪人のプライドなんて大した事ねえ

だがな、やられただけの男なんて自他ともに認める訳にはいかねえや

それこそ「ホル・ホース」という名を背負ったのなら！

「何故裏切った、なんて野暮ったいことは聞かねえでおいでやる。来いよサンチエス、1
0年前のやり直しと行こうぜ」

~~~~~

さて、熱くなるホル・ホースに対してサンチエスは非常に落ち着いていた  
 全てにおいてそうだが、勝負というものは冷静であればあるほど良い

「ホル・ホースめ、最初に撃てば何事も優勢に持つて行けると思ったら大間違いだ」  
 サンチエスはスタンド：『プレゼンス』に弾丸を込め、相手の出方を伺う  
 10年前まで一緒にくんでいた相棒だ

その癖、微細な動きを把握はしている………が

10年、10年のスパンはあまりにも長すぎる

基礎の読みはデキても、応用された動きは全くと言ってよいほど分からない  
 だが………

「それはお前も同じだろ！ホース！」

「いつ」

一髪、ホル・ホースは積まれている鉄骨を盾にし何とか弾丸を回避する

「よし、反撃してきた。調子に乗るのはお前だけで十分だ」

ガンマンはいかに相手をだまし合うかで勝負する

マカロニウエスタンではそれが常識だ

かつこいい名乗りなんていらぬ。123で振り返る必要もない

早い者勝ちの世界

そういう意味ではホル・ホースには一日の長がある

彼の特性は何といつても「早撃ち」の一言に尽きる

ただし、対するサンチェスにはガンマンのもう一つの醍醐味が備わっている

「オレのスタンドを忘れたか！隠れたところで無意味だぞ」

プレゼンスの能力

広く見れば弾丸にあるのだが、実質はその銃身にある

どんな弾丸でも使えるのだ

弾丸という火器全般

パラベラム・マグナム、いやそれどころじゃない

徹甲弾から爆薬榴弾などなど

熟練を重ねれば大陸間弾道弾も夢ではない

そして彼が撃つのは…ナパーム弾

飛行機に影響が出ないようちやんと狙いを絞って



「焼き切つてやる」

鉄骨を中心に火柱が燃え盛る

「アチー！アチチチチ！」

「ちっ、逃げられた」

「おお、あちちち……この野郎火だるまが好きならそうしてやる」

反撃の一手にライターはいかが？

ジッポー社の製品を無くす事は非常に惜しい

放り投げたライターに弾丸は見事に命中し、周辺に火の手が行きわたる

「ベホツゴホツ……」

「咳き込むぐらいならカッコつけんな！」

皇帝の全弾発射

ホル・ホースは勝負に出た

隙を見せたら、一気に突け！

Go! Go! Go fire!

弾は八の字状に襲い、血しぶきが上がる

その出血量たるや惨なもの

周りの火が消えていく程といえはお分かりただけだろう

「ヒツヒツヒツヒツ気持ちいいなあサンチエス！火だるまにできないのが辛い血だるまになるほうがお似合いだぜ！」

「ぬっ……ぐおおおお！」

身を後退させながら弾を避けようとするが皇帝の弾道修正により苦痛は続く  
ホル・ホースの考えは厭らしいの一言に尽きる

八の字弾に決定打はない

十分に弱らせてからその頭に必殺の一発を撃ちこむ算段だ

「ホオル・ホース！うぐあ！」

抵抗むなしくサンチエスが倒れる

「ヒヒツ、ヒツヒツヒヒ、ヒツヒツヒ……」

独特な笑いが静々と鳴り響く

復讐・歓喜・満悦の三拍子が込められた笑いだ

10年間は長く。一発は一瞬で終わる

「あの頃に戻りたいとは言わん。やり直そうというのはオレの立場じゃない」

「ふう……ぐおお……」

「俺は炎を味わった………お前は地獄を味わってこい」

予想通りの展開だ

最後の銃声はホル・ホースに委ねられた

D a m m !

「う、あ……え？」

「んっふっふっはっはははは！血だるま？地獄？そりや全部お前の役目だホース！」

ああ、説明し忘れていた

サンチエスの持つ醍醐味。それは……

「お前はつくづく正統派のカウボーイだ！マカロニガンマンってのは殺しに糸目は付けないもんだ」

騙し撃ち

その一言に尽きる

元来の性根がそうなのだ

死んだふり・後ろから狙撃・決闘という名のリンチ

褒められたものじゃないが、サンチエスはソレを繰り返して生きてきた

これが……裏に生きる男のやりかたでありポリシーであり……

「てめえ、よくも……ああ？」



普遍的なパラベラム

ソヴィエト最高傑作マカロフ弾

ペリーコロと同じく、ハーグ陸戦協定違反ダムダム弾

「じゃあ……これで頼むよッ！」

その勝機はこの一発にかけていたんだ

自分のスタンド『皇帝』の弾丸を

銃は撃てない、左で当たれる自信なんて彼にはない

その時に……思い付いた

「相棒ならどうするだろうな？」

撃つではなく投げる。原理が原始的なっただけだ

「!？」

「何度も言ってる。弾丸だってスタンドだ！」

だが、これが最後の一発だ。もうスタンドパワーが限界に近付いている

「そう来ると思ってたぜ……」

「何!？」

指にはめていた4つの弾丸を捨て、プレゼンスが火を噴いた

騙し撃ち

サンチエスは弾丸を選ばせる気などひとかけらもなかったのだからと言って助かるという訳ではないが………

皇帝及びプレゼンスの弾丸がぶつかり合う

互いの精神力の差を見れば結果は言わずともわかるだろう

弾丸が来たのはホル・ホースの方だ

「俺を騙すなんて分の悪い賭けに撃つてでたモンだ」

ホル・ホースの目の色が変わる

決死の目から諦観に、抵抗の目が媚び始めている

「な、なあ頼む。昔のよしみだろ？俺はもうこの通りだ……約束しよう！二度とお前を追わない」

懇願の声に耳を傾けるほどサンチエスは大人ではなかった

落ちていた弾丸を拾い、プレゼンスにリロードする

口笛の音色が短調になっていく辺り、葬送曲でも流しているつもりなんだろう

「金か？いくらでも払ってやるぞ。ドルかユーロか？なんでも払ってやる。だから！」

「やかましいんだよ」

プレゼンスの銃口が真つ直ぐテンガロハットへと伸びる

「三枚目は死ぬのが筋だ！」

ズギュー!…グオオオオオオン!

~~~~~

side ホル・ホース

「あ、ああ?え、ま、ええええ?」

ヒヒヒヒヒヒッ!

騙し撃ち?三枚目?

啖呵のワリには情けない顔してるじゃないか

「ホル・ホース…てめえ」

「よっこいしょつと」

演技すんのも止めだ止め

右肩を撃たれたのは辛いが…:

気にすることはない。あつちは右腕を無くしたんだからなあ

「何をした…?答えろ!」

「弾丸と言ってもな市場に出回っていないものがある」

「市場、だと？」

「一般的に。種類にもよるが弾丸に込められる火薬の量は決まりがある。そこからは雷管がどうたら撃鉄がうんたらという話になるが、それは置いておこう。……もし、火薬炸薬の量が一定をはるかに上回るものだとしたら？」

「じゃあ……俺が撃つたのは……」

「ご明察！ホル・ホース印の薬量20倍パラベラムさ」

完成するのに1週間はかかる傑作的自爆弾

天秤を使って程よく調査しなければ自分が吹き飛んじまうから神経尖らせたぜ

どんな弾丸でも撃てる？

ヒヒヒツ、それが仇になるとはゆめゆめ思っちゃいなかっただろうな

「だが何時だ……何時俺に仕込んだ！」

「頭の悪い野郎だなく、ソレツ」

「あつ、がつ」

4つの弾丸を捨てた時だよ。その時、俺はポケットから自爆弾を奴の近くに転がしたまさか一発目がその弾だとは……ツいてるねえ

なあに、相棒の考えに則ってみただけさ

投げて弾丸を撃つ。奇想天外な戦い方は発想の勝利だ

さつきは弾かれちまったからな

今度は当ててやっただ、左大腿筋!

「自分から弾ア捨てておいて『ガンマン』名乗るからそういう目に遭う。今度からはちゃんと敵味方の弾を分けておくべきだな」

「ううぐあ……」

「ま、その今度ももう無いが……」

騙し撃ちが得意な奴だから何か仕込んでるだろう

そう考えた俺はシャツの裏側をめくり、ある弾を取り出す

おお、あつた。これこれ

「ナパーム!撃たれたときはびっくりしたぜ、うん?」

「はあ、ふう……分かった。謝ろう!あの時裏切つて悪かったツ!」

ナパーム弾をサンチエスの腹の上に載せる

この時だ!10年間も待つのはこの時の為だったんだ

命乞いだつて?お前それでもサンチエスかよ

何か隠してあるんだろ?俺は知ってるぜ……ツヒヒヒヒ

「ガンマンの心得第5条……」

「ひい……」

そんな顔しないでくれよ

最期、なんだ

もうちよつと明るく行こうよ

ほれ笑えよ。スマアイル

「傷つけた相手にはとどめを刺せ」

「……ふう………殺れ！」

あばよ、サンチエス

今まで不愉快だったが……今からは最高の気分だ・

「飛行機は……よし大丈夫だな」

サンチエスも守っていたが、俺たちもこれを守らなければならなかった

そう、作戦成功の為のカギだからな

「ホル・ホースさあん！どこにいるんですか？」

「ん？おーいグーデン！ここだここ！」

飛行機から降り、グーデンの許に向かう

「うわ、コゲ臭い……」

「ナパームの匂いは嫌いか？」

好きな奴はいないだろうな

硝煙ならまだしも変な化学薬品とか入ってるんだ

トーシロに嗅がせるのは無理がある

「そーいやボニートさんは……」

「まだだ。あの野郎時間厳守を押し付ける割に人を待たせるからな」

「ははは……では」

「おう、頑張つて来いよ」

そう俺たちには作戦がある

あの老獪なペリーコロを出し抜くためには……ペリーコロの作戦も使わなければなら
ない

全く大胆な奴だよ

しかも、言いだしつpegが囧になる

昔から知っているがああいうところは好感が持てるんだよな

憧れはしないが……さて

「あいつの負けっぷりでも拝んでやるか」

第33話 作戦名シャルル・ド・ゴール（ボニート）

「ようこそボニート君！ここに来るのは君だと思つていたよ」

「ご招待に預かつた覚えは無えよ」

野郎勝ちを気取つてやがる

役者のような身振り手振りが一々鼻にかかる

おまけに好々爺然としたあの笑い

まるでポルポさんじゃねえか

「オペラじゃないんだから、もう少し自然になつたらどうです？」

「ふあつはつはつは！老人がここまで楽しんでおるのだ。ノリを知りたまえよ若人」

ノリと言われても俺は『殺し』に来たんだ

ポルポさんから「殺しは静かにスマートに」と教わつた

だが、なんだろうな。これが世代の違いつてやつらしい

「あんたに幾ばくか聞きたいことがある！イヤでも答えてもらうぜ」

「アルバーノのことか？それともボスに対してか？あるいは……君の事かな？」

「冗談はやめろ。こっちは本気だぜ」

ペリーコロからため息が出る。つまらない奴だとも思っているのだろう

「かつて、ギャングは公権力との戦いであつた！」

「……………」

「時には一般人を巻き込み、政治家実業家投資家に触手を伸ばし、自らの権益の拡大の為に朝から晩まで考え、手段を選ばずより率直な方法ですべての事件を引き起こし解決。

その循環であつた！」

「マキャベリズムか？ 難しい言葉使えばだまされるようなオツムじゃねえぞこっちは！」

「権謀術数か……ふつ、ならば君はどこのおかげでその職に就いているのかね？ ポルポに人道博愛の精神なんて一欠けらもありはせんぞ？」

「てめえ……………」

とはいふものの、あながち間違っていない

あの人の事だからペンシルバニアでもどぎついことやってんだろな

バツの悪い顔に、相手はしたり顔

『「一般人をなるべく巻き込むな」……アルバーノは全く正論だけの男だったよ。だが！
それで回るほどギャングは甘くない！」

「だから、殺したのか!!」

「……………奴の考えはギャングではなかったよ」

自分こそ真のギャングだと言い張りたいらしい

ご老体には生憎だが、元祖とか本当のとかいうキャッチコピーは飽き飽きしてんだ
誇り持つんならまだしも、我正しというやつは信用できないし「信頼」できない

「ボスもそうだ……………最初は大分好感を持てた人物だったが……………姿こそ見せんかったが大
胆なやり方に憧れた連中がいたんだ、今の幹部連がそうだ。だが、どうだ？ いざ勢力を
伸ばすとなるとまるでカタツムリのように引つ込んで……………幻滅したよ。だから、その秘
密を守るために死んでやった。何も知らされていない秘密の為にな！」

杖を突きなおす音が滑走路に鳴り響く

「名調子の演説だったぜペリーコロ。大方の事情は分かったよ、要はアレだ。世代の移
り変わりについていけないのを周りに押し付けているだけだろ？」

「ガキが言うじゃないか……………」

怒らせちまったよ

笑顔でいるあたり、余裕かましてんだろうがそうはさせねえ

ああいうタイプには、全力で煽っていくのがオレのスタイルだ

しかし、相手はポルポさんと同じくデキる人物

考えたかねえが、もしかしたらもう奴の術中に嵌っているかもしれない

「そこだー！」

「ぬ……」

先手必勝

映画じゃないんだから間合いなんで考えてたらハチの巣になっちまわあ

オートマグを一発撃って、資材の裏側に隠れる

幸いペリーコロが持っているのは杖だけと見た

…隠し玉は持っているだろうが

「（だからといって、何もせずに死ぬのはごめんだ。どうせなら思いっきり迷惑かけて死んでやる）」

資材から身を乗り出し、銃を構える

そこにペリーコロの姿は…いない!?

どこだ、どこに行った

「こつちじゃよ」

「な…ぐあー！」

後ろに振り向いた直後、頭部に強烈な一撃が加わる

老体に見合わず中々キツイ一発だ

杖に鉄を仕込んでいやがるな

やられっぱなしは主義じゃねえ！

「喰らいな！」

「ぐおお！」

頭のぐらつきなんてなんのその

今度は当ててやったぜ、体に3発・足1発

飛び散った血がソレを物語っている

後ろに回り込まれたのはびつくりしたが、俺のタフさを舐めてもらっちゃ困る

「へっ、何だい。もうちよつと戦ってくれるかと思っただがなあ」

大きな戦いほどあっけなく終わっちゃうもの

とは聞いたことがあるが、どうもこういうのは不完全燃焼だ

オートマグのマガジンも折角スペアを持ってきたのに使わず

いや、一番のがっかりはキャプテンビヨンドを使わなかったことか

「スタンド使いの見方は間違ってたかな？」

倒れ伏しているペリーコロに蹴りを入れ（かなり強力に）死んだかどうかを確認する

げしっ！どかつ！ばきっ！ぐおん！

うん、死んでいる。瞳孔が開き切ってるあたりその確証が持てる

「…イタリア暗黒街の大物ペリーコロここに死すってか？いや、もともと死んだ扱いか」

—死ぬのは君の方だ—

気付いたころにはもう遅かった

左の肩に開けられた穴

飛び出すB型の血しぶきは目の前で倒れているペリーコロではなく、この俺ポニート・ゼルビーニ

それもただの弾じゃねえこの痛み

一般の弾じゃありえない、ダムダム弾の痛み

だが、それよりもありえないのは……………

「何で生きてやがる……………ペリーコロ!」

「大きな声は出さない方が良く。出血に響くぞ?それはそれでありがたいがね」

おかしい

俺はちゃんと撃ったはずだし、死体も確認した

だのになぜ生きている

スタンド能力、これ以外にありえんだろう

俺はちゃんと本体を叩いたはずだ

例えそれがスタンドだったとしても、本体に影響が無いってのは考えにくい
信じたかないが、まさか蘇生能力を持ったスタンドなのか

だがそれなら、ルーマニアやシンガポールからの移動が説明できなくなる

「ゴ丁寧に銃で戦うスタンド使いのギャングがいるとは驚きだよ。キャプテンビヨンド
はどうしたのかな？」

「……………へへっ、老人を大切に扱っていうだろう？」

軽口で返すも頭の中はパニック状態だ

蘇生したペリーコロはさっきまでのスーツ姿ではなく、まるで特殊部隊が着るような
防護服

手には最強の拳銃として名高いSW m500

オートマグ一丁装備のボニートではとても太刀打ちできない

「カエルの子は何とやらだな。その無様な姿アルバーノにそっくりだ」

まともな家庭で育った奴ならこの言葉を聞いて憤慨するんだろうな
嫌なことに俺はその感情が無い

更に言うなら、コイツは俺のそういう心を知ってる

はははは…やっぱりだ、俺は嵌められてたのか

「死ぬときは綺麗に……………ちゃんと真ん中狙ってくださいよ？」

「往生際は良いな。感心感心」

M500の銃口は俺の眉間へと向けられる

嫌だ嫌だ、死にたくない、まだこいつにけじめをつけていない、ポルポさんに笑われ
ちまう

死ぬときは綺麗に

くそつ、なんでこんな時にあんな言葉を律儀に守っちゃまうんだ俺は

「では、どれ……………」

死ぬのか？死ぬか？死んでしまうのか？死んじゃうのか？死のうとしているのか？
死を恐れているのか？死を受け入れるのか？死を良しとするのか？死ぬ？死と向き合
うのか？死と戦うのか？死がゆっくりとやってくるのか？死を享受するのか？死を抱
くのか？死を…死を…死を…死を…死を…死を…死を…死を…死を…死を…

「ええい！ちやちやこましいい！」

キャプテンビヨンドツ！

死体の方のペリーコロを投げつけ、一気に駆け出す

こんなところでこんなやつに殺されてたまるか！

映画みたいに一旦間合いを取って、キャプテンビヨンドの小石攻撃でぼこぼこにして
やる

手始めに……!

「あばよマグちゃん!」

オートマグを時速60 kmでペリーコロに投げつける

キャプテンビヨンドの本領発揮だ!

持ちと投げ

この2つがあればナシヨナルリーグだつて夢じゃねえんだ
滑走路の周りは森林地帯だから石にも木にも困りはしない

夜目が効くのを待つことになるが、待ちの一手だ

焦るんじゃない、正確に狙うんだ

体のどこかに当たれば俺の勝ちと言っても良い

そうこう考えているとペリーコロが起き上がろうとしている

まずい、まだ距離を取っていない

「2つばかりくれてやる!」

「ぬぐつ!」

第二ボタンを引きちぎり時速100 km投げつける

スピードこそ速いが、いかんせん物が小さすぎる

しかし、ペリーコロの叫びが聞こえてくるあたり良いところに当たってくれたのだろ

う

「どうせなら靴もだ！」

ダメ出しに靴も投げつけてやり、遂に裸足になった

小さな砂利が足の裏を刺激するがそこは滑走路、生の地面を歩くよりかはマシだ
滑走路の端に着いた辺りで地面に手を付ける

スタンド能力は工夫だぜ、ペリーコロ！

「キャプテンビヨンドにはこういうやり方もある！」

舗装された滑走路にビヨンドが手を突っ込み手ごろな岩を一つ取り出す
あまり穴をあけすぎると滑走路が使い物にならなくなる。それも目的だ全ヨーロッパのマフィアを敵にまわしちまうが、あいつ一人に比べたら大した事じゃ
ねえ

ほぼ瓦礫同然の滑走路。これで野郎はここから飛び立てねえ

残念だったな、ペリーコロ

「滑走路は破壊したッ。あとはお前を伸してやるだけだ」

~~~~~

「はあ……はあ、ぐあつ。中々、無茶をやる……」

あの小童め

上手く当てたからといって調子に乗っているな  
老骨の余裕を見せておればいい気になりおつて  
いや、あれぐらいが丁度良いのかもしれない  
そこいらの奴だったら一目散に逃げている所だ  
ゼルビーニの血は面白い

—どうした、ペリーコロ？怖くなったか？—

よく言う！怖がっているのはお前のはずだアルバーノ  
シンシアを殺され、子供と離ればなれ、自分の体には不必要な穴が開き……  
素晴らしいな、ゼルビーニというものは！

だから仕留めなくてはならん

彼は……彼の血筋はまさに脅威じゃ

本人には自覚は無いだろう

余計に危ない！自覚なき脅威、まったくもって度し難い

「わしの野望を、宿願を……邪魔されるわけにはいかん」

ボスも騙し息子も騙し部下も騙し

後には退けん。すべてを『無駄』にすることだけは避けなくてはならない  
儂が生きていと知った以上、その探究心は認めるが生かしては置けん

「では…本気を出すとしよう……マジにな」

出て来い、『ストレンジャー』

~~~~~

「左肩は使いモンにならねえが…俺にはキャプテンビヨンドがあるッ！」

ペリーコロのあの妙なワザ

迂闊に近づいたら俺の負けだ

ペッシと同じ方式でじわじわと追いつめてやる

夜の闇に眼は慣れ、正確な像は視認できないがシルエットははっきりとわかる
「全力で投げてやるぜ……！」

まずは一発

キャプテンビヨンドの投げはルースも越えるんだ

戦車砲レベルのスピードで硬度100の小岩を撃ち投げる

「ちっ、外した……だが」

下手な鉄砲も数撃ちや当たる

弾はあるんだ

滑走路下から瓦礫・小岩を適当にかき集め、俺の左腕・キャプテンビヨンドの両腕で

撃ち投げまくる

「そらあ！大盤振る舞いだ、爺さんだからって遠慮するなよ！」

あのシルエツトが右往左往している

あつはつはつは！おもしれえ、クセになっちまいそうだ

「そろそろ当たってくれよ……」

そう念じた時

シルエツトが不自然によるめいた

あそこだ。狙い撃ちい！

今まで散発的に投げていたのを一点集中型に絞る

「おうれ！どうだどうだ！」

あたふたしろよペリーコロ！

老人だからって気を抜くようなボニートさんじゃねえぜ

……よし、本気中の本気を見せてやる

投げのラツシユを一旦止め、眼を細める

狙撃ならぬ狙投

…起き上った……よろめいてる………バランスを保つ………今だ！

「ふん！」

砲口初速は10000m！ビヨンドのスライダーを喰らいなあッ！

ーうぼああああああー！

BINGO！あの断末魔が聞こえたのなら戦果は上々だ

だけどな…俺がこれで満足すると思うなよ

「ええ、そうだろ。ペリーコロ！」

確かに俺はバカだがアホじゃない

奴の戦法は大体わかった

自分自身を囿にして相手が油断しきったところを、蘇生してぶっ叩く

つまり

「二度背中を狙われるのはゴメンだ」

「うぐぐ…おお………」

後ろに回っていたペリーコロの腹に小石を埋め込んだ

やつぱり、おじいちゃんだな

若者を侮るからそうなるんだよ

俺は2度同じことをされるのが大嫌いなんだ

しかし、これで仕留めたと思っっちゃならねえ

これはあくまで確認だ。蘇生の回数はまだ把握していないからな

なら、俺のとる手段は……

「今度は上に逃げっ……うおー！」

キャプテンビヨンドに持ち上げられたその時

今度は俺の腰骨の辺りに違和感が……痛覚が走る

やべ、いやこれマジで……やべえ

この痛みはさつきと一緒だ。ダムダム弾！

「ふっ、ぐお……ペリー………コロお」

「ふはははっはっは！ 亀の甲よりだ！ 若者を侮るな？ そんなだから、こんな老人に足元を掬われるんじゃよ」

バカな

俺が殺したペリーコロの死体の上に………また、ペリーコロが！

口を三日月に歪めやがって………気持ち悪い

石で反撃……ダメだ血が抜けて頭が回らねえ

ズドン！

「ぐあつ！」

「……ふくん、気が変わった。そのまま心臓を吹っ飛ばすのも気持ちいいが、こうして苦痛にゆがむ顔を見るのも最高じゃ。アルバーノはすぐに死んで楽しみがなかったからなあ」

ああ、分かった。遅すぎたが分かったぞ

こいつゲス野郎だ

それもデキるタイプのゲス野郎だ

「ダムダム弾なんて……もうちよつと国際法勉強した方が良いですよ……」

「頭を使ったまえよ、弾は撃てばもう使えない。むしろ貢献しているといった方が良いでしょう。ふふふふ……」

ハイテンションだな

クソツたれえ、万全の状態ならこつからカウンター一発KOしてやるっていうのによ
「ふふふ……どれネタバレをしてやろう」

「？」

何だコリヤ

気のせいかわりコロが2人に……いや、3人、4人！増えていやがる！

これがこいつのスタンド……蘇生ではなく分身ッ！

「分かるかね？ボニート君。わしはその気になれば君を殺すことをはじめ、パツシヨーネを掌握することだつてできるのだよ。4体までしか出せないのが欠点だが……まあ、そんな小さなことに精を出そうとは思わん」

「……蘇生能力じゃなかったのか……」

「蘇生？ははっ、言い得て妙だな。喜びたまえボニート君。君は今世界で唯一ワシのスタンドを知った男だ！ワシの『ストレンジャー』をな！」

「スト、レンジャー……」

激しい出血で意識が遠のいていくなか、ストレンジャーという言葉が耳に残った

他人、客、見知らぬ人

それがお前のスタンドか

なるほど、その能力なら世界各国に自分を回せるつてこつた

シンガポールもルーマニアも、そして今から行くであろうアメリカもな

「この能力を隠すのはいささか面倒だな」

「ボスや部下にも何回か疑われてな」

「だが、能ある鷹は爪を隠す」

「非スタンド使いという印象はとても役立ってくれたよ」

出血がうつ！

本格的にやばい…意識が飛び、かけてる

「そして私はね…：…うん？おやおや」

最悪のパターン

こつち見んなよお爺ちゃん

やつと単体になれたんだ

そのまま古話を続けてくれればこつちも手がある…：…のかな？

ガハッ！

「分かったぞ、もう意識が保てんのだろう？その出血量、医者でなくともよう分かる」

「……………」

「辛いかな？痛いかな？その表情をもっと深めるんだ」

「だま…れ、よ ジジイ」

「ふふ、良い目だ」

1人になったペリーコロがm500の銃口を俺に向ける

……へっ、来いよクソジジイ

変な情けかけられるよか、その方がありがたいえ

だがな、もうお前に痛みも苦悶の表情見せんのはこれつきりだ
うぐー！……………はっはっ……………

「おい、ボニート君。ああ気絶したのか」

……………

……………

……………

……………

「ゼルビーニというものは面白くする割には本当にオチが無い一族なのだ。アルバー
ノもシンシアもそんなだったよ」

……………

……………

……………

「心臓か……………それとも脳天か……………」

「そこがお望みか？ 穴を開けるだけなら俺もプロだぜ」

第34話 作戦名シャルル・ド・ゴール②

「後ろを狙うのが君の流儀か…ホル・ホース君？」

「手を頭に、銃は捨てろ」

簡潔な言葉でペリーコロに命令する

逆らっても意味なしと踏んだのか、あっさり承諾した

ただし、『皇帝』の銃口の先がぶれることはない

「取引をしようじゃねえか」

「取引？」

「俺たちはこれ以上アンタを追わない。実質追えないっていうのが本音だが、とにかく追わないし探らない」

「それをその男が認めると思うかね」

「…何とかするさ」

「ほう…で、儂には何がある？ユーロを積んだところで意味は無いぞ」

その言葉を待ってましたと言わんばかりに指をパチン！と鳴らす

すると、黒服の男がよろめきながら現れた

ホル・ホースは男の頭を掴み、地面に倒す

「ボス……すみません」

「こいつは飛行機のコックピットでビクついていた奴だ。コイツがいなけりやアンタは飛べない。反面、ソイツがいなければ俺に給金が回ってこない」

「それは……嫌だな」

その老獪な知恵をもつても、この場を瞬時に切り抜ける最良の言葉は中々思いつかない

うんうんと唸り、これもダメあれもダメと小さくつぶやいている

「どうする!?俺の気は長くは無いぜ」

「……なら、仕方がない。後味の悪さはゼルビーニの特徴だからな」

ゆっくと

両者は互いの人質へ歩みを始め

ホル・ホースはポニートへ、ペリーコロはパイロットへ

そして、すれ違う正にその時!

「後始末できてこそ男だとは思わんかね?」

ずおっ

ペリーコロからもう一人のペリーコロが現れる

ストレンジジャーだ

その手にはナイフが握られており、発現した勢いでホル・ホースとの距離を詰めるだが、そこはガンマン

利き腕である右腕が使えないのが痛い、左腕でも額を貫通するぐらいの精度はある「サンチエスの契約料分。君の命で払い戻させていただくよ」

「やっぱり、ね」

パン！

第2弾を撃ったその直後、周囲が白煙に包まれる

サンチエスからくすねた煙幕弾だ

「ごほつごほつ！目くらましのつもりか」

そうは言うが、この煙を晴らすことはできない

老体故にこの環境での激しい運動はあまりよろしくない

口元にハンカチをあて、目に涙を堪らせながら晴れるのを待つしかない

まあ、待ったところで

「逃げおおせたか……」

敵がいる可能性はゼロに近い

~~~~~

滑走路から離れ2人は飛行場跡から脱出できた

ニースの街中を人目に悟られないように路地裏ルートでトラックへと向かう

「ボニート、おい起きろ」

「うぐえ」

腹に拳一つ分の圧力が来たシヨックでボニートは目を覚ました

「はあ……ふう……ホル……ホース。お前がうう！いるってことは」

「ああ、作戦通りだ。見ろ」

示された親指の先からジェットエンジンの音がする

ロッキードの飛行機が飛び立とうとしているのだ

「あいつは乗ったか？」

「おそらくな、っていうか絶対だ」

顔に笑みが浮かぶ

作戦は成功した

あいつは乗ってくれたんだ

「イヴエコに、早く……ああ！」

「無理するな、肩貸してつやからよ」

「すまねえ……はああ」

い  
ホル・ホースも右肩を撃ちぬかれこそしたが、ボニートに比べれば大したものではない

ダムダム弾を2発喰らって意識を戻したんだ

その精神力たるや見事

しかし、スタンドを発現するにはいささか脆すぎる

「飛行機はどっちに行った？」

「北北東だ。軍のレーダーに引っ掛からない為だろうな」

「よし、出してくれ」

ブロロロロロロロ……

トラックは重厚なエンジン音を上げUターンする

飛行機を追っているのだ

あまり離れすぎると見失ってしまうし、どこでアメリカ行きルートに切り替えるかも見ておかなければならない

だが、一番の目的は……………

電波を届けるためである

↳ロツキード機内（side PERICOLOR）↳

『ボス、もうそろそろ大西洋です』

「……………」

逃がしてしまった

妥協という考えは大嫌いだが、こうなつては仕方がない

向こうの本部に着き次第、早速暗殺者を手配して合理的に始末するとしよう

いやはや、こういう時に限つて郷愁の念というのは強くなつてくる

「やはり、オチは下手くそだったな」

それがゼルビーニの家系なんだろう

責めるわけではない

アルバーノの時もそうだったが、ボニートもああだった

そういうものと割り切るしかないのか

「……………」

グラスに入ったスコッチの味が全くしない

運動のし過ぎ…いや、先の戦いにおける不完全燃焼のせいだ

サンチェスがヘマをしなければ、もう少し楽しめたんだがのう

フン、まあ良い。所詮金で雇ったチンピラだ

「音楽をかけてくれ。クラシックを頼む」

『ええ？ですが、ここで電波を取るとレーダーに引つかかる恐れが…』

「この時間帯の大西洋…いったい誰が気にするのかね？」

『……………はい、了解しました』

気の利かん奴だ

こういう嫌な気分の際は音楽を聴くに限る

↓ O sole mio! sta, n fronte a te! ↓

おお……神はとことん懐かしい思いにさせる気だ

そうだこの曲だ

皆で歌いあつたなあ

栈橋で酒を酌み交わしながら、音程もリズムも気にせずに自分らしく歌うのだ

「sta, n fronte a te……」

『クアンノファノツテ…』

「!？」

何だ、この声は

さつきまで聞いていた歌手とは違うまったく別の声だ  
おまけに、こう……通信機のようなノイズも入っている

『どうだい、ペリーコロ？俺の美声は』

ああ！そうだ！

何だ、何が不完全燃焼だ

アルバーノ！お前は最高の男を生んでくれたな

最高に燃え上らせてくれるじゃないか……

「ボニート君！」

『空の旅はどうだ？老体にやきつかろう』

「ふっはっは！君こそ白々しい、あのケガでよくしゃべれるものだ」

流星はと言ったところだ。儂と銃を交わしあっただけある

『俺があんたのことを疑ったのは、アルバーノについて聞いた時だ』



その通りだ！

君を始末するには、どこかでボ口を出さなければならなかったのだ

上手く喰い付いてくれた

儂は誘つてたんじゃよ。君がポルポの庇護下にある以上、自ら出向くというのは危険じゃつたからな

あの時、「知らぬ」と言えば君はアルバーノについて諦めていただろう

このイタリアを離れると決意したとき、一番の未練であり障害だったのが君だ！

始末しなければ処理しなければ解決しなければ……殺さなければならぬ

ボスの真似事をしたくは無かったが……そうギャングを復古させるためには過去を一掃しなければならぬのだ

『勘違いするなよ？俺がアンタをここまで狙うのは、何も父母の仇討ちなんて高尚なものじゃない。……言い出したら色々あるが、アンタにとどめを刺すこと！それがアルバーノの言う真実……そう思つたからさ』

真実だと？

儂にとどめを刺すことが？

ふあはははは！親子そろつてバカな連中だ

「真実？それがどうした？声は届いても肝心の攻撃が届いていないのでは何の説得力も

ないぞ」

『哲学の話になるが…アンタは自分が今どこにいてどこに向かっているか、考えたことはあるかい?』

「何を……言っている?」

『文字通りさ。おかしくないとは思わないか? 一定の高度を保つ飛行機が……』

!

その言葉を聞き、儂は操縦席へと向かった

確認しなければならぬ

最後まで聞く必要もない

奴が何を言うのか理解した

「おい!今進路はどうな……って……」

コックピットはもぬけの殻だった

座席に捨てられている緊急脱出用キット

操縦桿はガムテープやつつかえ棒など様々なもので固定されており、動かすこと

はままならない

クソお!こんなところで負けてたまるか

儂はペリーコロ。ギャングを立て直す男だ

操縦桿が破壊されたわけではない

邪魔な物を取り除けば何とかはなる

「ストレンジジャー！」

スタンドをフル活用してそれぞれに指令を与える

「早くしろ！このままだと成層圏に突入するぞ！」

「分かるとるわい！……ええい、これでどうじゃ」

3体目がすべてのテープを剥がす

よし、これなら行ける

「機体そのものを旋回し、本来のルートに戻す！何かに掴まっておけ！」

「エンジン正常！昇降舵修正！」

残念だったなボニート！

自分から手口を表すとは、ギャングの風上にもおけん奴だ

引き分けに思うなよ

儂はそういうなあなああの勝負が大嫌いなんじゃ

「このハンドルを引けばッ！儂の勝ち、勝利じゃあ！」

ツツツドオオオオオオン

!!!!!!!!!!!!

~~~~~

「ふああああ~~~~」

朝の眠気到人々は戦うことになる

中には負けてそのまま眠ってしまう者も多い

だが、今日の朝はスパイスが効いている

ヨーロッパ人は総じてニユース・新聞が大好きだ

経済面から国際面、娯楽面にかじりついているマダムもいる

「あなた、コーヒー」

「ああ、ありがとう」

新聞にコーヒーあるいは紅茶、そして愛する妻のキス

うむ、これぞヨーロッパだ

「やっぱり株価は下がる一方か……ん？」

言つたはずだ

今日の朝はスパイスが効いていると

紙面に書かれた一文は……

「サリー！ テレビをつけてくれ！」

『謎の航空機が大西洋上（フランス領海）で大爆発!?』

第35話 真実の探求

「ん？(ハハ)は……」

薬品の匂い、真新しいシーツの感触・

これらの条件が整っている施設と言えば病院しかない

「そうだ、俺は……あうっ！」

ベッドから降りようとしたその直後肩と腰に痛みが走る

何とか我慢して……いや、無理だな

ここは諦めてナースコールを使うしかないか

ブザーに手を伸ばすとノックの音がした

手間が省けた

「失礼しまーす。服の交換に……え？」

「えーあー、そのー」

ナースはこちららを凝視したまま固まってしまった

何だ？何か変な格好でもしてるか？

改めて自分の姿を見回すが別に変わりはない。一般的な患者のスタイルだ

……隠すべきところもちやんと履いている

「よ」

「せ、先生！3号室の患者さんが意識を！意識を取り戻されました！先生！」

目の前に機材を置いたまま、ナースは慌てて部屋を飛び出してしまった

まったくもって分からん

いや、俺が怪我をしているのは分かっている

うーん、それだけしか分からないな

「おい、ボニートー！」

「ボニートぎあ〜ん」

交代する形でホル・ホースとグーデンが入ってきた

泣きじやくった顔でグーデンがベッドによって来る

「本当に大丈夫なんですか？怪我は？痛風は？中耳炎は？水疱瘡は？ヘルニアは？ポ

リープは？」

「そんなもん患った覚えは、ね！」

「ふげー！」

久しぶりの拳骨だ

もう一発……あてててて！

肩の傷口が開きやがった

「バカ、ヘタに動くと入院が長引くぞ」

「ホル・ホース……お前も怪我してたろ」

「なアに気にするな。お前の血をな？ 顔・服に塗ったくつて優先的に集中治療を申請しただけさ」

「てめこのやろ！ 友達甲斐の無い奴だ」

そうは言うが、なぜか笑みがこぼれてしまう

理由は知っている、俺たちは勝ったんだ

結果コレ（入院）だから圧勝とは言いがたいが、コレで済んだだけマシと思うか

2人が持ってきた土産からリンゴを一つ頬張る

「……で、こっちは？」

「スピードワゴン財団が運営する病院さ。俺の特殊なコネでな、お前みたいな非合法的存在も人道の対象らしい」

非合法とは失敬な

今でこそこのザマだが、いずれはどこかの市民権を取得するつもりだぞ

「失礼するよ……おおこれは本当に」

ナースに引つ張られる形で医者が入ってきた

「こちらを見るなりナース同様驚愕に染まった顔をしている

……俺、やっぱりなんか変か？」

「ふむ、血圧は正常。脈も落ち着いている……」

「先生、一体どうしたんだい？俺の体はそんなにやばいのか？」

「いや、そういう訳ではない。ただ、回復が見込みより少し早かったのにな」

「おお、そうか。こう見えても朝ごはんはパン2枚とすっかり食ってるんでね」

「はっはは……うむ、とりあえず元気そうだ、ね？」

「2度も聞かねえで下さいよ」

「いや、失敬。職務上の癖なんだ……それじゃ私はカルテを取りに行くから」

「行く前に聞きたいことがある。俺は何時退院できる？」

「見るところ君は高所得者の匂いがするから死ぬまでここにいて欲しいんだが……」

「冗談は抜きで」

「……見積もって3か月。ただし、安静に過ごした場合での話だよ。それじゃ」

3か月か

ちと、長いな

個人的には1週間ぐらいの方が良かったんだが、プロが言ってるんだ

信用しよう

しかし、退院の期日よりももっと知りたいことがある

「ペリーコロはどうなった？」

部屋の雰囲気が瞬時に張り詰めたものになる

けが人の俺からすれば何とも言えぬ重圧を感じるから傷に痛みが増してくる

「グーデン、お前が言え」

「確実に見たわけではありませんが……ちゃんと仕留めれたと思います」

あの時（俺自身は気絶してたが）、ホル・ホースが人質にしていたパイロットの正体はグーデンドルフであった

先の戦いで何度か言われてきた『作戦』。内容はこうだ

まず、変装したグーデンをパイロットとして搭乗させハンドルを固定、コックピットに爆弾を仕掛ける

ただの爆弾じゃない。威力もまあ強く、専門の知識が必要だが簡易的に作れるプラスチック爆弾だ。それをハンドルを動かした瞬間作動するようにセットし、後は離脱。ここからはあくまで推測だったがペリーコロは焦って飛行機の軌道を修正しようと試みるだろう。そしてドカン！

気絶していたのが惜しい。爆破シーンは是非見たかった

「思います、だど？」

「いえ、仕留めましたね。自分はスタンドは見えませんが……」

即答する辺り成長したモンだなと我ながら感銘に浸っている

「そうか、仕留めたか……仕留めた、フフフフフフ」

「おー、ナースコールもつかい押そうか？」

最高の気分だ

勝った勝った勝った！

勝負に負けて試合に勝つとはこの事だ

そうさ、にやけ面はポルポさんの特権だ

だが、今ぐらいは良いだろう。俺にもにやけたいときがある

「ホル・ホース、ライター貸してくれ」

「すまん、この前撃ちぬいた」

「ジツポーをか？豪勢な奴だ」

「今になって後悔してるよ……マッチでどうだ？」

「古風だな、嫌いじゃない」

ベッドの台に置かれている……あいつの手紙をマッチに近づける

「お、おい！そりゃあアルバーノの……」

「良いんだよコレで」

手紙に火が引火する

綺麗だ

この24年間俺はこの手紙に縛られて生きてきた

分からんだろうなあ、お前らには

俺はこんなちつぽけなものに縛られていたんだ

情けなくて腹が立つ

だが、見ろ。見ろ見ろお

ほら後ちよつとで燃え尽きる

ふふふふ、ははははははは

「ホル・ホースさん、ボニートさんは……」

「ほつといてやれ、今コイツは楽しんでるんだ」

「これかあ、これが真実か……あつけないなあ」

手紙が灰になる

真実は灰か

何とも文学的じゃないか

「真実の探求……かつこいいコト言うなよ。ボニート・E・ゼルビーニ」

エピソード

くイタリア ナポリ・カポディキーノ空港く

『パツシヨ―ネ更生の道!? 麻薬被害者のための施設に資金援助を確約』

「先代が死に…無名のジオルノ君がボスになり……」

何か一波乱あつたんだろうな

だけど、ジオルノ君。この業界でギャングスターつてのは厳しい茨の道だぜ?

まあ、君ならやつてのけるかもしれないが

ボニート・E・ゼルビーニと言う名前をご存じだろうか?

この名前を知っているならば、まず表を生きれる人間ではないのは確かだ

「退院おめでと」

「花束は?」

「病室にヒヤシンスが飾つてあつたら」

思い出した

確かあの濃い紫のヒヤシンスだったな

花言葉は「悲哀」

…まったく良い趣味してるよ、ホント

「伝えてくれたか？」

「ああ、警戒こそされたが……『急行列車の時はありがとうございました』だよ

ちっ、勘付かれちまったかな？

俺の名前は表で生きる人間はまず知らないだろうが…裏で生きる人間からすればもう使い道のない名前だ

当たり前だ

ポルポさんと同じ手を使うのは癪だが、ヨーロッパを離れるにあたり俺は自らの存在を死んだことにした

今もテレビ・ラジオで特番やっている大西洋上航空機爆破事件

それに巻き込まれて死亡して形なんだが……シヨルノ君には気づかれちまつてるだろうな

あの子、勘が良いから

「お前はこれからどこに行く？」

「3カ月もすれば次の仕事なんて見つかるものでな…チュニジアだよ。スピードワゴン財団はとことん俺を使い潰すつもりらしい」

「派遣社員に比べたら可愛いモンだろ」

「可愛いって言葉は女のためにあるんだがなあ」

—— 次の便はチユニス行きです。ご搭乗されるお客様は3番ゲートへ——

「おい、あれじゃねえか？」

「そうみたいだな。じゃ、またどこかで」

「おう達者でな」

キャリーケース2台分に珍しくスーツ姿のホル・ホース

しばらくは会えなくなるが、何悲しいわけじゃない

良くも悪くもこの職業

いずれどこかで会えるだろうさ

敵か味方かは別だが

「……………」

手すりに置いてあるカップコーヒーを一啜り

美味い

が、どこか寂しさを感じる

グーデンは先にアメリカに渡ったし、真正正銘ひとりの状態だ

唯一の楽しみと言えば、こうやって旅行会社の雑誌を読み明かすぐらい

「すみません、となり良いですか？」

「構わねえよ」

全身黒づくめの男が、と言えば悪い表現だ

修道士の男が俺の隣に座る

「いやあ、どうも……やはり旅というのは辛いですな」

「布教の旅かい？」

「いえ、世界各地の修道会や学校で教えを説いて回り、ある時は教えを乞うときもありま
す」

「敬虔だねえ……イタリアには何の御用で？」

「はい、と言つても目的はヴァチカンです。同じ修道会の友達が誘つてくださいます
ね」

「そうか、だったらアヴェンティーノの丘にあるマルタ騎士団の館に行つてみな。あそ
こは最高だぜ」

鍵の穴を探すのに一苦労だが、そこがミソなんだよなあ

いや、ほんと。嘘じゃない

あの小さな穴から見えるサン・ピエトロ大聖堂は見ごたえがあるぞお

皆も行つてみるといい

「今までニホンで色々教えていまして……ウエノという場所で昔の教え子に別れの握手し

たんですが、思いのほか力が強くてね。成長を喜ぶ半面もう会えないという寂しさがどうも……」

教師と生徒の関係か

俺は今までそういうのを味わったことが無いんだよな

ポルポさんは教師って感じではない。良いところ恩義はあるが腐れ縁の結びつきだ

——8番ゲートにメリディアナ社アメリカ行きの方が参ります。ご搭乗されるお客様は——

「旅立ちの間際に付き合ってくれてありがとよ。おかげで気分よく発てる」

カップをゴミ箱に投げ捨て、8番ゲートへ歩みだす

この空港は内部が入り組んでいるから早めに動かないと迷って遅れる可能性がある

5、6歩進むと後ろから呼び止めるような声が聞こえた

さつきまで俺にしゃべっていた、あの修道士だ

「シニョーレ！こちらもお付き合いくださりありがとうございます！ごさいます！」

そういうと修道士は左腕をやんわりと掲げた

よく見ると人差し指と中指が絡んでいる

指言葉か

確かアレが意味示す言葉は……

「ああ！イタリアを楽しんでくれMi a mico！」
『幸運を祈る』・『しつかりと』

さて、行きますか！

場所は自由の国の銃社会、その名はアメリカーナのペンシルヴァニア！

新しい人生…楽しませてくれよ？

俺の名はボニート・E・ゼルビーニ

まぎれもない、れつきとした、誰が何を言っても、正真正銘の、折り紙つきの……

「ギヤング」である